

アルフレッド・ベスター

ローグとデミ:はちゃメタ♡  
恋のだましあいっ!



**Alfred Bester, *The Deceivers* (1981)**

山形浩生訳

**ローグとデミ：  
はちゃメタ♡恋の  
だましあいっ！**

***The Deceivers***

**アルフレッド・ベスター**

**Alfred Bester**

**山形浩生訳 [hiyori13@alum.mit.edu](mailto:hiyori13@alum.mit.edu)**

# 目次

1. 発見	1
2. 妖精とシナジスト	18
3. エネルギー	31
4. 戴冠	47
5. 恋に破れて	65
6. さらなるたばかり屋ども	75
7. トンズラ屋	84
8. 探索	93
9. 戦略 VS 戦術	107
10. 狩る者 VS 狩られる者	118
11. トロイの木馬	132
12. トリトンのにらみ合い	141
13. 吊られた男のバラッド	148
14. テラ・インコグニタ	166
訳者あとがき	176

# 1. 発見

自分が世間に見られているかは知らぬ。だが自分では、浜辺で遊ぶ少年のようにしか思えない。たまにすべすべの石ころを見つけたり、少しきれいな貝殻を見つけたりして気を取られているだけなのだ。その間にずっと、真実の大海は、まったく見出されることもなくその目の前にあるのだ。

——アイザック・ニュートン

放射線防護のジャンプスーツを着ていた。白色で、重役階級を示す。白いヘルメットをかぶり、バイザーは下ろしてある。武装していた。この準軍事使節ではあらゆる重役が武装するのだ。彼は投光器で照らされたコンクリートの平面を、夜にそびえる巨大なハンガーのほうへと、堂々と歩いていった。すさまじい自己抑制能力。そびえたつハンガーは、ドーム型の天文台のような形で、そこに黒いアーマーをつけた警備兵の正体が、入り口ハッチの前でうとうととして横たわっている。重役は、軍曹を激しく蹴り飛ばしたが、そこに感情はまったくこもっていない。小隊長は叫び声をあげ、あわてて立ち上がり、その部下たちもすぐに続いた。ハッチをあけて白服の男を通すと、男はそこを真っ暗な中へと入っていった。そして、ほとんど思いついたように彼は明かりのほうに戻り、小隊をねめつけた。小隊は全員、その注目におびえて立っている。男はまったく何の感情も見せずに軍曹を射殺した。

ハンガーの中には光はなく、音だけだ。幹部は闇の中で静かにしゃべった。

「お前の名前は？」

返答は、二進数ビットのシーケンス、高音のピツという音と低音のビーブ音だった。

「—’ “—” —’ —」

「二進数ではない。音声に切り替えろ。RW お前の名前は? RR 答えろ」

答は質問と同じくらい静かだったが、単一の声ではなく、声を揃えて答えるコーラスだった。

「我らの名前は R-OG-OR 1001」  
「ロゴル、お前の使命は？」  
「従うこと」  
「何に従う？」  
「我々のプログラムに」  
「プログラムはされたのか？」  
「はい」  
「プログラムは何か？」  
「火星の OxCam 大学ドームに乗客と貨物を配送」  
「命令を受けるか？」  
「認可された指揮系統のみから」  
「私は認可されているか？」  
「あなたの声紋は指揮バンクにプログラミングされている。はい」  
「私の識別 ID を」  
「我らはあなたをレベル 1 幹部と識別する」  
「私の名前は？」

答は再び一連の高低ビット。

「それは統計 ID だ。社会名は？」  
「入力されていない」  
「いま受信して声紋とリンクせよ」  
「回路オープン」  
「私はデーモン・クルップ博士」  
「受信、入力、リンク完了」  
「監査用にプログラムされているのか？」  
「はい、クルップ博士」  
「監査を行うので開け」



ハンガーのドームがゆっくりと 2 つの半球に別れ、それがすべり下りて星空の柔らかい光を受け入れると、クルップがこれまで話をしていた二人乗りの機体が浮かび上がった。深い点火ビットの上に高くそびえるその機体は、巨大な骨董品のロシアのサモワールと驚くほど似ている。小さな王冠状の頭、幅広の円筒形の胴体から、変な取っ手にも見えるものが突き出し、その導体が細くなって、四つ足の四角い土台へと続く。その 4 本足は実はジェットノズルだ。

土台のハッチが開いて、ハンガーに機体内部からの光があふれた——この船には窓など必要なかった——そしてクルップは、差し込み式のはしご段を昇り、監査のために入船した。R-OG-OR 1001 は驚くほどオーバーヒートしていた。クルップは服を脱ぎ捨て、身をよじらせつつ制御デッキへとよじ登った。そこはサモワールの王冠にあたる（無重力の宇宙なら、こんな苦勞して昇る必要はない）。主用腹部船室にいくと、熱帯じみた暑さの理由がわかった。裸の女性が、透明保育機のまわりに散らばるメンテナンス工具を扱いつつ、汗だくで悪態をついていたのだ。タコのような複雑な機器を、いたるところでいじりまわして這いずっている。

助手のクルーニー・デッコ博士だ。ヌードの彼女を見るのは初めてだったが、声は抑制され、その嬉しい驚きを示すことはなかった。

「クルーニー？」

「ええ、デーモン。船とあなたの挨拶は聞こえてた。イタッ！ちくしょうめ」

「問題？」

「このクソツタレな酸素供給が気まぐれすぎて。ついたり消えたり。これだとガキが死にかねない」

「それは許せない」

「危険は冒せないから。うちの胎児を七ヶ月も世話して喰わせてきたんだから、こんな機会に台無しにされたるもんか」

「装置のせいじゃない、周辺圧力が計数をおかしくして、供給を止めてるんだ。この装置は宇宙用の設計だから、宇宙にいけばまったくちがってくる」

「そうならなかったら？」

「この寝床をかち割って、マウス・ツー・マウスで人工呼吸してやろう」

「こいつをかち割るって？ まったくデーモン、こいつをかち割るにはデッカいハンマーでもないよ」

「クルーニー、そう文字通りに考えるなって。かち割るってのは手順をいじるって意味だよ」

「あらさようで」と彼女は這いだしてきて立ち上がり、肌は湯気をたてかんしゃくを起こしていた。これほどそそられる彼女は初めてだ。「すみませんね、ユーモア方面には考えが及ばないほうです」。そして彼女はデーモンに意味深な視線を向けた。「マウス・ツー・マウスも冗談だったの？」

クルップは彼女を抱きしめた。「いまはもうちがう。ぼくたちの子が流出したら、すぐにこうするつもりだった。もう生まれたんだよ、クルーニー……」

そしてこのため、R-OG-OR 1001 はガニメデに墜落したのだった。船は稀な百万 BeV の宇宙素粒子で誘導システムを幸運にもやられ、軌道はずれたのだ。これはたまたま起こることで、普通は手動で修正されるのだが、クルップとデッコはコンピュータを過信していたうえ、自分たちの情熱に夢中すぎてチェックを怠り、このため三人とも墜落。男、女、そして保育器の少年ともども。



このすべては物語の始まったジキル島 (ハイド氏とは無関係) でのこと。これについてはいささか自慢でっせ。物事の連鎖のいちばん発端を見つけるというのは、なかなかないことですからね。これが岡目八目の後知恵だったのは、お恥ずかしい限り。てのも私の稼業は先知恵で八目読めなきゃいかんのよ。その理由はこの連鎖の先に行けばわかる。

私はオデッサ・パートリッジ。この物語において、事前および事後のできごとをほじくり出し、時に再構成して適切な順番に並べるといふ、ユニークな立場にあった。例えば。幕開けの R-OG-OR 1001 での遭遇は、ずっと後になるまで突き止められなかったもので、その情報源のほとんどは、まだコスモトロン・ゲゼルシャフトで流通していたゴシップ。おかげで手遅れになってからとはいえ解明された疑問もかなりあった。いずれにしても、それはただのオマケ。お目当ては他にあったんでして。

ちなみに、私の態度が軽薄に思えるなら、それはこの仕事がまったくクソきつくて、己を保つ対処法がユーモアしかないから。まったくもう、ガニメデからのシナジスト、チタニアからの妖精、およびワタクシ自身の生活を苛んだ、ジキル島で生成される陰気なパターンときたら、ありったけのユーモアが必要なほどなんですから。

さて、この連鎖の最初の部分を取りまくできごとを見ましょう。

コスモトロンがメタスタシス・エネルギー工場を設置したときには、グルジア沿海のジキル島を買おうとして、脅し、恫喝し、袖の下を贈ってやっと認められた。このグリーンベルト保全地域にはびこる不法占拠者たちや、しつこい環境保護団体をあぶり出し、ときには殺害して始末するのに 1 年がかり。その同じ 1 年の間に、過客どもが残して行ったゴミ、クズ、死骸の片づけもあってね。それからジキル島を 1500 メガボルトの電化プライバシーで囲い、発電所を作った。

生産のためには、とっくに放棄され忘れられた装置が必要だった。さらに 1 年かけて、古代装置を求めて博物館を探索襲撃した。そしてわかったのが、聡明な若き工学博士たちは、そんな古代遺物の扱いなんか、皆目見当もつかないってこと。そこで高級人材専門家

を雇い、引退していた古代教授連中を引っ張り出して契約し、そいつらにしかわからない装置を稼働させた。人材専門家はその監督役に昇格。それがペルソナ分析で学位を得た、デーモン・クルップ博士だ。

クルップの博士論文は、ハンチントン舞蹈病(聖ヴィタスの踊り)についてのもので、その病気が患者の知的・創造的な能力を拡大するという概念の、目もくらむ探究だった。あまりにドラマチックで、実に話題となったため、陰口屋たちは「クルップはハンチントン舞蹈病にかかっているし、ハンチントンはクルップ病をもらっている」と言ったもの。

相変わらず知性拡大に舞い上がっているときに、コスモロン工場が危険な実験の門戸を開いた。コスモロン社は太陽熱核騒動のミニチュア複製版である転移プロセスを使い、原子量 1.008 (水素) から 259.59 (アシモビウム) に到る周期律表のあらゆる元素を合成している。放射性副産物がいつも悩みの種で、おかげで職員は防護服の常時着用が義務づけられていた次第。だが放射線がクルップの実験のヒントとなった。その実験が、「連結放射線排出によるレーザー生成胎児増幅」こと MAGFASER だ。

その助手クルーニー・デッコは医学博士で、大喜びで参加。おおむねクルップにベタ惚れだったからだが、一部は機械遊びが大好きだったからでもある。二人は「Magfaser 実験」と称するものの実験装置を設計設置したが、もちろんこれは「連結放射線ウンヌン」の略称。そして試験材料の問題が生じた。ここでクルーニーが活躍。

彼女はグルジアのメディアに慎重な広告を打ったが、それは一人で悩む皆さんたちにとって、無料中絶を意味する広告だった。二人で全応募者を、身体的にも精神的にも検討し、やがて理想の被験者が登場。背の高い、色の黒いカッコいい山娘で、字は読めなくても鋭い知性を持ち、地元強姦の犠牲者で妊娠 2 ヶ月。この娘に限り、デッコ医師は慎重に胎児を胞衣ともども保存して、それをフラスコ内の羊水におさめた。

クルーニーはマイクロ手術でへその緒をバランスの取れた栄養供給につないだが、その手術はその頃には実に詳しく研究されていたので、ほとんど標準手術手法とすら言えるほどだったが、手の込んだレーザー増幅は史上初だった。どうやったのかは永遠にわからない。クルップとデッコしか知らないし、二人とともにその秘密はガニメデで消えてしまったのだから。だがクルーニーはコスモロン社重役(匿名希望)と少しランデブーをしており、彼がベッドでの二人のこんな会話を報告している。

「なあクルーニー、きみとクルップ博士が『マグフェーザー』とかいうひそひそ話をしているのを立ち聞きされてるんだが、何だね、それは？」

「略語」

「何の？」



「あなた、とってもよくしてくれたわね」

「お互い様だよ」

「だから重役の名誉にかけてくれる？」

「いつもそうだが」

「だれにも言わない？」

「ゲゼルシャフト社長その人にだって」

「連結放射線排出によるレーザー生成胎児増幅」

「何だと！」

「そうなんよ。うちの放射性副産物を少し使ってるの」

「何のために？」

「胎児を胎内期間中に増幅すんの」

「胎児！君の中のかね？」

「ちがうったら。試験管ベビーをレーザー子宮の中に浮かせとくの。もう九ヶ月で排出寸前」

「どこで手に入れた？」

「彼女の名前を知ってても教えない」

「増幅して何にするんだ？」

「そこが悩みどころで、あたしらも知らないの。デーモンは全体的な増幅しているんだと考えると、言わば子どもを虫眼鏡にかけるような……」

「大きさ？」

「脳だけど、その子の夢のパターンをモニタリングしてんの——胎児が夢を見るのは知ってるよね、親指しゃぶったりとか——でもごく普通なの。いまや、そこでやったのは単一の能力をそれ自体として一種の平方 X2 乗にしたんじゃないかと思うんだ」

「イカレてる！」

「で、その X とは、その未知の量で自乗されたのは何なのか？ あたしも皆目見当がつかない」

「わかりそうなのか？」

「デーモンは、助けを求めるべきだと思ってる。あの人はすごい賢いし、ホント最高で、そのすごさってのは謙虚なところなのよ。自分の手に負えなくなったとすぐ認めるから」

「どこに助けてもらう？」

「休暇を取って、ガキを火星に運ぶつもり。オックスケン大学ドームに。そこにいる連中はぶっ飛んだ専門家ばっかで、デーモンの名声があれば必要な診断すべて得られる」

「試験管実験のためにそこまでやるのか？」

「おいおい、ただの実験じゃねえよ。ただの試験管実験であっていいはずないでしょ、7ヶ月も連結飽和してきた後なんだから。ガキは何か特殊能力を持ってるはずなんだけど、それが何なのか？繰り返しますがね、閣下、あっしもケー目、見当つきゃしませんかな」  
彼女がそれを知ることはなかった。



何年も前にチャーミングなミュージカルを見たが、その司会者（演者一覧では「お話女子」）は物語を語ってオフステージのできごとを説明するだけでなく、割り込んで一ダースものちがう役回りを演じては歌っていた。いまの自分がまさにそんな気分。というのもチタニアからの妖精とガニメデからのシナジストのロマンスにおけるキューピッド役を演じる前に、いまや全太陽系の図式をめぐる歴史家役（歴史女子？）もあわせてこなさなきゃなんないんだから。

もちろん、みんな歴史なんか忘れてますわな。かの深遠な哲学者サンタヤーナ（1863-1952）曰く「歴史を忘れる者はそれを繰り返すはめになる」そしてこれはびっくり！まさにそれを繰り返してて、しかもそのバカさ加減は自殺願望でもあるのかと思うくらい。我が太陽系のサーガを思い出させてしんぜましょう、あの宇宙学コスモロジーの月曜講義をさぼったとか、コスメトロジーそもそも化粧学入門——肌合い、肌理等の一般構造に関連する一学問（2単位）——とまちがって履修届を出したのでまったく出なかった人もいるでしょうから。

「新世界」のまったくの再演。イギリス、スペイン、ポルトガル、オランダが17世紀にアメリカ大陸を植民地化して戦ったように、地球人たちは27世紀に太陽系を植民地化して、いまや言い争ってる。千年くらいじゃ人間の性根は大して変わらない。変えられるものなんかない。ご近所の仲良し人類学者に聞いてごらん。

イタ公どもが金星ことビーナスを掌握。ビーナスはイタリア系だったからで。連中はそれを、アメリーゴ・ヴェスプッチにちなんで「ヴェヌッチ」と呼べと固執（そいつにちなんだ名前の別の場所もありましたねえ）。テラの月、ルナはこれ以上ないほどカリフォルニア（「だってよ、あの太陽だぜ！ギグスヴィルみたいな、ってかスゲえじゃん！」）で、そのイカれたドームはどれをとってもムキムキビーチかビッグ・サーかってな具合。テラ自体が古くさい Wasp 回廊に受けつがれちゃったよ、他のみんながさっさと離れてったから。

イギリス人は自分たちの地元の嫌な天候にいちばん近いのが火星だと思って、イギリス

ドームは「明るい時期」「降水」とチャールズ・ディケンズ「ホワイト・クリスマス」にプログラミングされてた。ここで面白ポイント 1 つ。火星「年」はテラ年の二倍近いので、やつらは 1 ヶ月 60 日にするのか、一年 24 ヶ月にするのか、どちらかを選ぶしかなかったこと。意見がまとまらず、したがってクリスマス、復活祭、ヨム・キップルではえらい苦勞となった。

わかっているだろうけど、かなり単純化してますからね。実際には、火星はイギリス人が多数派だってだけ。ウェールズ人、スコットランド人、アイルランド人、ヒンズー、ノヴァスコシア人、さらにアパラチア山地人、つまりアメリカへの 17 世紀移民の子孫たちもいる。混血する者もあれば、孤立を選んだ者もいる。

同様に、ルナが「これ以上ないほどカリフォルニア」だったのは、そのセグメントのイカれた魅力が他のドームすべてを魅了したってこと。メキシコ系、日系アメリカ人、カナダ人、ヴェガスにモンテカルロのゲーミングセンターまで。カリフォルニア連中は、そいつらみんなを、ビキニやルナ・デューンバギーやホーリスティック健康法、リフレクソロジー、さらに「人間の可能性」「インターフェース」「あんた、どんなスペースにはまってるの？」式の浴槽おしゃべりに目覚めさせたってわけ。

太陽系についての私の説明では、その点はお忘れなく。ごたませの中で支配的なものを特出してただけなんだから。

海王星のトリトンは、太陽系で最大かつ最も遠い居住可能な衛星だけど、日本中国系で、それが短縮して「ジャップ=チャンコロ」「ジャンコ」になったけど、他のアジア系人種もいた。そいつらは昔ながらに傲慢不遜、「内側の夷狄ども」と呼ぶ連中を見下してたし、太陽系に突然、青天の霹靂のように現れた驚異の新エネルギー発電装置「メタ」(転移メタスタシスの略)の発見でそれに拍車がかかった。このメタのおかげで黄金の歴史すべてに輪を掛けた紛争が引き起こされたんだけど。

人類は何世紀にもわたり、飲んだくれの船乗りみたいにエネルギー源を無駄遣いして、いまやとんでもなく高価な残り物かき集めに陥ってた：

準化石燃料や半化石燃料：泥炭やオイルシェールなど

太陽、風力、潮汐力(設置が複雑で、大金持ちでもないが高すぎ)

未燃焼の炭素：煤塵、煙突のすす、硫黄を含む残留物

機械排気の BTU

ゴムやベニヤ板産業、プラスチック工場の廃熱

促成パルプ樹木森林：ポプラ、柳、ハコヤナギ(でも人口爆発で栽培面積は限定)

地熱

スリーマイル島式原子力発電は、いまだに炎上するより凍死を選ぶという人口の半分により反対され阻止されていた。そこへやってきたのがメタ。トリトンで発見された予想外のエネルギー触媒で、まるで母なる自然が「無駄遣いについて懲りましたか？これで救われますよ、もし賢明に使うならね」とでも言ってみた。

太陽系が懲りたかどうかは、お手並み拝見。

木星のガニメデは強烈にアフロで、茶色人種と混血ムラートの味付けが加わってる。フランスとその植民地から黒人たちが奪ったもので、こいつらは白んぼどもとの絶望的な戦争に嫌気がさして、いまや内輪で戦争してる（原始的なんじゃなくて、苛立ってるだけ）。他の黒人茶人たちも手を貸してた。コンゴ対タンザニア、マオリ対ハワイ、ケニア対エチオピア、アラバマ対オールアフリカ、その他もろもろ。SAACP こと太陽系有色人種地位向上協会の絶望の種。

アフロドームはカラフルで、観光客もたくさん。ヤシの葉で屋根を葺いた小屋（屋内トイレつき）で部族村を再現しようという試みもあった。そこに小さな庭をつけて、ペットにアフリカ動物を飼うわけ。ニルガイ、ヌー、赤ちゃんゾウ、サイ、各種エキゾチックなヘビ、ワニさえも（池を作るだけのお金があれば）。ワニは絶えず悲嘆の種だった。若いワニはグルメ食材だったので、ワニ誘拐という許しがたい犯罪がガニメデでは横行。

オランダ人その他は木星のカリストにいて、ここもガニメデ同様、水星よりでかい。連中のドームは中世ブルージュを思わせ、石畳の通りと道にせり出す家屋が並ぶ（カリスト商工会議所は嫌がるだろうけど、地元の売春婦はいまでも窓の両側に小さな鏡をぶら下げ、通りの全長を見渡せるようにしているし、カモ候補が通ればいつも窓ガラスをコインでコンコンコンと叩く）。

カリストは黄金、銀、宝石カット事業が大きく、これでドームに大量のユダヤ人口がやってきた。ユダヤ人は昔から宝石の専門家で、昔からオランダ人とは友好的なの。あと伝統的な芸術家集落もあり、太陽系のその他部分は、レンブラント-29-ラインだのヤン-31-フェルメールなんて名前の連中が、まともな人間なら家に絶対置いたりしないようなアヴァンギャルド作品で、どうやって需要を作りあんなにゼニを得てるのか不思議がってる。

土星のタイタン（冥王星のタイタニアことチタニアとおまちがえなきよう、こちらは大量に後述）はイギリスの旧オーストラリアみたいに始まった。見込みのない常習犯罪者を流す場所だったんだけど、やがて太陽系はその輸送費よりも処刑費のほうが安いと考え、善行者だの良心の痛みなんかクソ食らえと言いはじめた。タイタンの子孫たちはいまだに、アナクロで理解不能の受刑者隠語をしゃべり、いまだに太陽系に対する古来の憎悪の偏屈地獄で、この忠実なる歴史にはまったく登場せず、唯一古典的な一文「一等賞はタイタン

一日、二等賞は「タイタン一週間」を提供しただけ。

フォボス、ミマス、木星第 6 衛星と第 7 衛星には、各種宗教、演劇集団、食生活、性的禁欲に献身する小さなイカレコロニーがある。たった 1 つの美しい驚異的な例外を除けば、太陽系の惑星や衛星には原住民が発見されたことがなく、オランダ人どももカリストを 24 ドルで買う必要はなかった<sup>1</sup>。火星のイギリス人に対するインド人の戦争もなし。「星生まれのジョーンズ」を名乗るふざけた野郎が始めたカルトは、自分たちが外宇宙から太陽系によって子供時代にこっそり誘拐されたんだと信じていて、千人かそこらを集めた。そいつは水星のカロリス盆地のジョーンズドームを創始したけど、そこはどのみちだれもほしがらない場所だった。

水星の「一日」は地球の 88 日に相当し、温度は鉛が溶けるくらいまで急上昇。星々からかっさらわれたエイリアンどもは、自殺するまでもなかった。ある日ドームの断熱が壊れて、みんなこんがり焼け死んだ。グランギニョル演劇の恐怖に喜ぶようなサディスト連中どもは、しょっちゅうジョーンズドームに出かけて、黒焦げの凍ったミイラを眺める。ビョーキのユーモアのセンスを持つイカレ野郎が、星生まれのジョーンズの口にリンゴを突っ込んだ。まだそのまま残ってる。

そうそう、でもその唯一の驚異的な例外チタニア、予期せぬものの妖精、ウラヌスの娘、天の神話的支配者。ここでは本当に先住民を見つけたの！偉大なウィリアム・ハーシェルは、かつて 1781 年にお手製望遠鏡で、言わば偶然にも天王星を見つけて、六年後にその衛星チタニアを発見。何かご質問は？

Q: はい、説明をお願いします。

A: えー、天王星は非常に明るいオレンジ、赤、青の帯で覆われ――

Q: いや天王星じゃなくてチタニア。

A: あ、そうですね、魔法の月。なんつーか、宇宙にはユーモアのセンスがあったみたい。星系やその組み合わせのほとんどすべてには「変なヤツ一滴」が追加されて、調和と秩序にあかんべーしてる。いささかロジャー・ベーコンの有名な一節「比率になにか奇妙なところのない卓越した美は存在しない」を思わせちゃいますよね。

Q: フランシス。

A: え？

Q: ロジャーじゃなくて、フランシス・ベーコンのほう。

A: フランシス。そうだった、ありがと。太陽系の組み合わせでは、チタニアがその奇妙

---

<sup>1</sup> 訳注: オランダ人がアメリカ大陸にやってきたとき、ニューヨーク市のマンハッタン島を 24 ドル (相当のガラクタ) で買ったという逸話がある。

なもので、その他すべてが驚愕絶望。驚愕は、得られてる数少ないヒントや情報が驚きだからで絶望はそれが理解不能だから。

Q: どういうものなんですか？

A: 宝石や水晶に馴染みがあれば、どんな結晶体にも流体包有物があるのはご存じよね。大きさと、包有物は半径 1 ミクロン以下から数センチまで様々。半径 1 ミリ以上の包有物はかなり珍しいの。センチ級なら博物館もの。

Q: でも宝石の価値は台無しになりませんか？

A: 確かに。確かにそうだけど、でもいまの話は結晶の地質学だから。包有物のほとんどは、純水に近いものから濃縮塩水まで各種の濃度で各種の塩溶液を含んでる。またほとんどの場合は気体の泡が含まれる。気泡が小さくて、そこにぶち当たる分子の数の乱れに反応できるくらいだと、ギクシャクしたブラウン運動で絶えず動き続けてるのが見えます。

$$\frac{n_1}{n_2} = \exp \left[ \frac{mg(p - p')N_o(h_1 - h_2)}{pRT} \right]$$

Q: 話が見えなくなりましたが。わかってます？

A: 失敬。ちょっとエラそうにアインシュタイン入れてみちゃったけど、それはさておき、そういうあぶくを顕微鏡の下で見て、それが十億年もその独房内で神経質に動き回っていたと思うと、わくわくしちゃいますね。

Q: いつになったら魔法の月、チタニアの話になるんですか？

A: そう慌てない、慌てない。一部の包有物は、その液体の中に複数の結晶がありますの。一部は複数の不溶性液体で構成される。気体だけのものもある。包有物の中の結晶に、さらに流体包有物があるものもあり、それが何重にも続く。で、これをそいつの半径千マイルにわたって続けると、できあがるのはチタニア、太陽系の変なヤツってわけ。

Q: なんと！

A: そうなんですよ。無窮の時を経て蓄積した彗星のゴミや瓦礫の地殻の下に、この衛星は半径 30 センチから数キロの巨大結晶の集積体を含んでますの。

Q: そんな話を信じると？

A: ええ、それが何か？ 伝統的な惑星や衛星のモデルは改訂されつつある。テラは生きた有機体かもしれないという説さえある。ただそれをつきとめられるほど深くまで掘れないだけ。気体がただの個体へと凝集したよりずっといろんなものが太陽系の形成には入り込んだのはご存じでしょうに。

Q: そしてチタニアの結晶がどうしたって？

A: 無数の包有物と包有物の中の包有物、それが果てしなく続いています。

Q: そしてそれが生きてるとでも？

A: わからないけれど、でもそこに驚異的な生命形態が進化したものが含まれていて、独自のブラウン運動を示しているのはわかっています。すばらしいシクラクラするけど残念なことに、太陽系がそこを訪れて探索はさせてくれない。「チタニアはチタニア人のもの」というのが彼らのスローガン。

Q: どんな姿？

A: 包有物？ 一種のプロト宇宙みたいな。自己発光して、地殻越しに見分けがつくくらい接近すると、その光がシンコペーションまたはシンクロしたりします。何かそれぞれの間に、分子的または浸透圧的なつながりがあるみたいで——

Q: ちがうちがう。原住民。チタニアの土着民。どんな姿？

A: ああ、チタニア人の話。どんな姿か？ イタリア人、イギリス人フランス人、中国人、黒人、茶人、あなたの奥さん、あなたの夫、愛人三人、歯医者二人、そしてナシの木のパートリッジ<sup>2</sup>。

Q: ふざけんな。どんな姿なんですか？

A: だれがふざけてるもんですか。どんな生物とも同じ姿。チタニア人は多形変異体、つまりはどんな姿でも好きに取れるんですよ。

Q: どんな性別でも？

A: いいえ。男の子は男の子、女の子は女の子だし、彼らの再生産は発芽じゃありませんから。

Q: エイリアン文化なんですか？

A: 少なくともテラの第三紀にさかのぼる、五千万年前からってところ。

Q: 原始文化？

A: いやいや、目もくらむ先進文化。

Q: だったらなぜチタニア人たちはこれまで地球にこなかったんですか？

A: なんでこなかったと思いますね？ ツタンカーメン王はチタニア人だったかも。ポカホンタスも。アインシュタインも、名犬リンチンチンも。あるいはマッドサイエンティストのキューバをタコ殴りにした巨大ハマグリも。いや巨大科学者のマッドハマグリかな？

Q: なんだって！ 危険なのか？

---

<sup>2</sup> 訳注: ……という定番のクリスマスソングがある。A Partridge in a Pear Tree.

A: いえいえ、楽しく遊びたいだけ。次に何を企んでるか検討も着かない。予想外の妖精たちなんですから。

そしてその一人がシナジストと恋に落ちたってわけ。



私たちはこのシナジストを、こっそり数年にわたり尾行して、一種の猟犬がわりに利用していた。実際、そいつのコードネームは「ポインター」。どんなふうにご利用したか知りたいでしょう。たとえばこんな具合。

太陽系に偽造コインやトークンがあふれかえった。ブリタニア金属で鑄造した見事な代物。私たちはこの活動をペルトリ——ペルトは「プログラム評価レビュー技法」の略——偽造品が火星から太陽系に入ってくるフローチャートはまとめたが、攻撃のクリティカルパスを見つけられなかった。言い換えると、それだけですべてを止めてしまえるような、ネットワーク内の唯一無二のつながりを見つけなきゃいけなかった。

さて「ポインター」はロンドンドームにいて、『ソーラー・メディア』誌向けにコックニーのカラー特集をまとめていた。あらゆるパターンを調べ、伝統的なコックニー式の韻を踏むスラングも見ていた。「皿(プレート)」が「足(フィート)」の意味——肉(ミート)の皿、のミートが足(フィート)と韻を踏むから。「カエル(フロッグ)」が「道(ロード)」の意味——カエルはトード、トードはロードと韻をふむ。「テイトファー」が「帽子(ハット)」の意味——しっぺ返し(ティットフォータット)とハットの韻。「ドット」が「フラッシュ」の意味(フラッシュは偽金を指す)——モールス信号のドット&ダッシュがフラッシュと韻。そしてそれこそが、我らがクリティカルパスだった。

というのもニューストランドには「ドット&ダッシュ」という骨董屋があって、扱うのは古いメダル、古い銀のトロフィー、装飾用のお飾りの剣、派手な鎚や職杖……その手の代物。すごくシック。すごく高価。コインの出所について、冶金所を精査していたんだけど手がかりなし。それがここにあった。目と鼻の先の場所で、無意識のうちに指摘されてたってわけ。古いトロフィーは銀製じゃない。ブリタニア金属製のものだ。

「ポインター」のことはいろいろ知っていたし、知らざるを得なかったけれど、でも本当にどんな種類の人間かは知らなかった——当人もご存じなかった——そしてその謎を最もうまく説明するには、彼の独特な性質を使えると発見してからしばらくたって、初めて彼と会ったときの話をするのがいいですかね。

それはジェイ・ヤエルの楽しいトーク・インでのことだった。ジェイはプロの美術鑑定



家で、絵画を集めるのと同じやり方で人間を集める。ゲストは一ダース、その中にヤエルご自慢の秘蔵っ子シナジストがいた。ちょっと背が高く骨張っていて、かつては若かった男で、服を着ないほうがもっと快適なんじゃないかという印象をなぜか与えてた。

彼はセレブの中でも珍しい、マシンなほうのように行動したし、いささか有名だったの。バランスが取れ、おもしろがり、決して生真面目になりすぎず、名声は努力なんてごく一部でほとんどはツキのおかげでしかないという信念をはっきり示していた。そして、とんでもないユーモアのセンスを持っていたわね。

万人かつ万物に没頭しそうな興味を示し、熱心に聞き耳をたてて、応答は話し手を激励してもっと引き出すものだった。そのタイミングが彼のシナジー的天才だったけれど、もう一つ素晴らしい性質も持っていた。その集団の人それぞれに、彼が没頭して関心を示しているのは自分一人に対してだけなのだと思わせる能力だ。視線をあわせると、その眼差しは、本当に重要なのはあなただけですと物語るわけ。

人々が落ち着き払い成功していると、完全無欠ではないのだと思わせない限り、敵意を抱かれる危険がある。このシナジストにもまちががなく個人的な欠陥はあったが、一方で興味深く惹きつけるような、公式の欠点もあった。巨大な黒縁メガネをかけて、頬に傷をつけている驚異的な放射状の傷を隠そうとしていたのだ。そしてそのメガネを引き下ろして傷を隠そうとする癖があり、それがあまりに自然なので痙攣しながら。

もちろんこれがログ・ウィンター。会話ピットで話が途切れたとき、そのファーストネームがあだ名かどうか尋ねた。相手に口を開かせるための糸口にすぎないのはわかってください。この人物については何でもすでに知っていた。それが仕事なもんで。

彼は重々しく言った。「いいえ。ログ・エレファントの略なんです。ヤエル博士がアフリカで、私の母親を射殺したときにぼくを発見しまして。母はブーテス・アルファから来た異星人のブリーダーによって、ゴリラと交配させられてたんです」。そしてメガネを引き下ろした。「いや、ウソに決まっていますね。実はログ・メール（一匹オオカミのオス）の略なんです。ヤエル博士が娼館でぼくを見つけてそのマダムを射殺したんです。愛しいマダム・ブルース」と悲しそうに付け加える。「ぼくには母も同然でした」。メガネ。「が、本当にホントの真実をお知りになりたいなら」とえらく真面目くさって「ぼくのフルネームは、ログ画廊ウィンターなんです。ヤエル博士がスコットランドヤードの警視総監を射殺した後で――」

「いい加減にしろよ、坊主」とヤエルが笑った。みんな笑っていた。「この素敵な女性に、私がどうやって我が最高の発見をしたかを話してあげなさい」

「最高かどうかは知りませんが、あなたの発見ではあって、あなたの物語ですよ。ぼく

があなたの役柄を横取りするようなことができますか」

「お上品にお前を育ててしまったなあ」とヤエルは微笑した。「では手短に、ログは宇宙船の残骸の中にいたのを、ガニメデのマオリ・ドームの斥候たちに発見されたのだよ。幼児で唯一の生存者で、彼らはそれをドームに連れ帰り、その王様だか酋長だかのテ・ウインタが正式に養子にしたんだ」

「長には息子がなかったんです。お嬢さんたちだけで。だからウインタが死んだら、ぼくがバナナ王になれるわけです」

「そのおかげで、ログの頬には王家を示す紋章の傷があるんだ。当人はバカバカしいほどそれを恥じているがね」

「なんというか、女の子をジグしてザグっちゃわせるんです」とウインター。またメガネ。

彼の女性遍歴を知る私は、笑いをこらえねばならなかったが、彼の素早い目がそれを捕らえのはほぼ確実でしょうね。

「マオリ族は彼にログという名前をつけた。墜落の瓦礫で読み取れたのがそれだけだったから。アール、ダッシュ、オー、ジー。R-OG ウインタ、そのOは長音でログと発音された。だろ、坊主？」

「むしろRゴホンOって感じでしたよ」とウインターは自分の名前をマオリ式に発音してみせた。「聞いた人は『お大事に』と言いたくなるほど」

「第1部はこれでおしまい」とヤエルが続けた。「第2部。私はマオリ・ドームを訪れて、彼らの見事な木彫りを検分していたんだ。そこへこの十歳児が姉とやってきた。お姉さんはビーズのチュニックを着ていて、この子はそのビーズを指さして、そこに見つけたパターンを説明しようとしていた」

「というと？」と私は尋ねた。

「素敵な女性に説明してあげて、RゴホンO」

「見たらすぐわかるはずなんです」とウインターはメガネを引き下ろした。「パターンはビースと縫い目が三角になっていたんです：

赤-赤-赤-赤-赤-赤-赤

縫-縫-縫-縫

黒-黒

縫」

ヤエルは天を仰いだ。「神よ、天才から凡人たちを守りたまえ！」と笑う。「この子が三角形を語るのを聞きましたか？ そういう子なんです。パターンで考え、パターンで生きる。

私が翻訳しなければなりません。王様の子どもは、8つの赤いビーズの集まりを指さして、指を一本立てた。それから4つの空の縫い目を指して、マオリ族のジェルーのしるしをした。黒ビーズ2つで指1本。空の縫い目1つでジェルーのしるし。そして手のひらで三角形を撫でて、指を十本示した。お姉さんは、くすぐったがりなのでクスクス笑い、それが私の発見だったんです」

「何を？女の子がくすぐったがりってことですか？」

「まさか。その弟が天才だってことですよ」

「ビーズ細工の、ですか？」

「しっかりしてくださいよ、マダム。8個の集まりが1つ。4つはなし。2個が1つ。1個はなし。王様の子どもは二進数で数えていたんです。二進数で1010は10だ」

「当たり前だと思えたんです」とウィンターは繰り返した。

ヤエルはせせら笑った。「なんだと、当たり前だと？裸で文盲のマオリの子どもが、独自に二進数を発見するのが？で、当然ながら私はテ・ウインタ王と取引して、RゴホンGをテラに連れ帰り、名前をローグ・ウィンターと英語化して、教育を開始したんだが、そこで困った。パターンの天才を持つ子どもを、いったいどっちに進ませたものか？」

「数学？」と私。

「それは二番目でした。私の独断と偏見で、まずは芸術でしたが、パリでめざましい出発をとげつつも、この子は興味を失って低迷しました。それからMITで数学をやって、同じこと。プリンストンで建築、ハーバードでビジネス、音楽はジュリアード、コーネル医学、ドーム設計はタリアセン、パロマで天体物理学——みんな同じ。最初は大幅に進みますが、すぐに集中力が低迷する」

「どれもタコツポ化してるように思えたんです。全体の一部だけでお互いにつながりがない。ぼくはありとあらゆるものまとまりを探していたんだ」とウィンター。

「そろそろ成人していたから、追い出してやった——」

「鞭で」とウィンターは顔をしかめた。

「ポケットに千ドルやって遊歴修行に追いやり、自分のやりたいことを見つけるまで戻ってくるなと厳しく言い聞かせました。正直言って、ボロボロになって舞い戻ってくると思ってたんです。すっからかんで従順になって……」

「浮浪人の農奴のごとくに」

「それはどこから拝借したの？」と私はウィンターに尋ねた。

彼はささやいた。『ハムレット』第2幕第2場。これはだれにも内緒ですが、ヤエルに隠れて英文学の研究もしたんです。ほら、『イギリスの大作家 I&II』講義。それも落第で

すよ、悪食がたたりまして」

「ところがこの若者、なんとまあオーバーオールから現金があふれんばかり、太陽系が見たこともないほどの統合理論のテープを持って、悠然ともどってきやがりましたな。みなさんあのベストセラー『ロックステップ』はご記憶でしょう。ローグはルナのギャンブルと——」

「博士からの餞別を10万にまで増やしたんですが、そこで噂が出回ってカジノのテーブルから出入り禁止をくらったんです」とウィンターは笑った。「人呼んで、学者ローグ」

「——さらにカンザス州のトウモロコシ作況、トリトンのメタ、ガニメデのハイファッション、ヴェヌッチの女性運動、カリストの芸術オークションを編み合わせた——そのすべてを太陽系パターンに取りこんで、あまりにも当然のものにしたんですが、それまでだれもそれに気がつかなかった。自分の天職を見つけたどころか！ こいつはシナジストだったんです」

## 2. 妖精とシナジスト

シナジー (*sin er ji*), 名詞 組み合わせた行動や活動。離散的な主体による協調行動により、その全体の影響が個別の影響の合計より大きくなるもの。

——ノア・ウェブスター, 1758-1843

ローグ・ウィンターの持つシナジー感覚は、あらゆるパターンや構築物に対する全体的な共鳴じゃなかったの。彼には妙に鈍感で気がつかない部分があり、多くはつまらないものだが、深刻なものもあった。最も深刻なものは、彼が 3 つの言語のパターンに反応していたのに、そのうち 2 つしか意識的に関連づけられないということ。おかげで彼は大災厄に叩き込まれることとなるんだけど。

ウィンターは太陽系口語をしゃべるけれど、これは彼が審問者(かつて 20 世紀には「取材記者」と呼ばれていた)で、世界のことばが彼の商売道具だったから。自分がソーマ・ゲシュタルト(20 世紀には「ボディランゲージ」と呼ばれた)を理解できるのは知っていた。多くの水準で見知らぬ相手とコミュニケーションを行う調査体験がいろいろあったからで、単語に隠されたものの背後にどんな現実があるのかを突き止めるのが彼の稼業。

これはすべて承知していたのに、本人がご存じなかったのは、彼がアニマ・ムンディとも共鳴しており、それが彼の驚異的なシナジーパターンの感覚を生み出していたということ。かつては、R-OG 宇宙船の墜落時に幼児が感じた恐怖の衝撃が、この超敏感さの原因だと思っていた。いまやそれが、クルップ=デッコのメーザー実験だったのは明らかね。自乗された X 量は、私が「フェイン感覚」と呼ぶものだった。これはギリシャ語で示すことを示す *phainein* から取った名前なの。このフェイン感覚こそが、一見すると無関係な事実からのできごとを示されて、それらを全体へと合成できるようにしてくれるだ。

アニマ・ムンディは、根源的な「世界の魂」。ラテン的にはアニマ=魂、ムンディ=世界。アニマ・ムンディはあらゆる生き物に浸透する宇宙精神であり、無生物にも浸透しているという説さえある。私自身、そう信じてる。古い家は独自の精神と個性を持つてる。

インテリアの中で自分の居場所が気に食わず、まっすぐに壁にかかろうとしない絵をよく見かけるでしょう？ 通りすがりに必ずぶつかって注目を集めようとする椅子もあるでしょう？ 機嫌の悪い階段は人をつまづかせる。

実に多く的人是はアニマと共鳴し、強力な影響を受けている。すぐにわかる側面もある。「魂」「ノリ」「靈感」、天気や昼夜の影響などね。だが、これらはもっと深い根底にある、礎石、全存在の生命線とも言うべきアニマ・ムンディの各種側面でしかないということにはみんな気がつかない。ローグ・ウィンターは、それに最も影響されていたのに、これをだれよりも理解していなかった。この礎石パターンに対する彼の無意識の反応の例を示しましょうか。そのパターンはフラマン娘から受けたものだった。

彼は業務で火星にいて、午後に休みをとってウェールズ・ドームの塩湖で釣りをしていた。その湖にはシーラカンスが放流されていた。「古き四足類」、白亜紀からの遺物。ウィンターはルアーを投げては巻き戻し、東から西へとエサを食べる四足類の群れを捕まえるべく東に向かって釣りをしていた。いきなり——彼はそれが直観で、自分が魚を出し抜いたんだと思ったけれど、実は無意識の第 7 感がアニマの命令に応えるよう彼に強いていたわけ——彼は向きを変えて西方向へ釣りを始めた。

数分にわたり何の成果もなしに投げていると、無人の湖畔に女子が現れた。半切りジーンズをはき、上半身裸、流れるブロンズの髪、重たい買い物用トートバッグを二つ抱えて、しかも無重力の恩恵なし。彼女はそれを下に置き、腕をさすり、にっこりして「アロー」と言った。

ウィンターはすぐにそのフランス訛りに魅了され、相手が頬に焼き付いた傷痕をジロジロ見ないことに感謝した。「今晚は。どこへ行くんですか？」

「おなり村の家のお客あるね。ディニユール買いに出かえたの」

「どこから来たの？」

「カリスト」

「でもカリストってオランダ系じゃなかった？」

「きたおとないの？」

「いや、まだ」

「全部オランダージュじゃない。ベネルクスなの、comprez? フラマン、ベルギー、ルクセンブルクもいる。わたしフラマン・ドームからきた。あなた、ツリーしてるある？」

「ご覧の通り。ディニユールに魚はいかが？」と彼はルアーを巻き取り、それを彼女の前に掲げた。「ツキがめぐってくるように、ツバをかけてよ」。もちろん大うそだったけど、彼女はすごくきれいで、実にオイシそうな身体をしていた。

彼女は困惑した視線を向けたが、彼の力強い目に力づけられ、ルアーに優しくツバを吐いた。ウィンターはもっと深い水域にルアーを投げ、ジグザグにそれを巻き戻したが、すさまじい当たりを得た。自分のツキが信じられないほど。大笑いして叫び、魚を取りこもうと格闘して、女子は興奮して隣で踊っていた。四足類に糸を与えずしっかりとぐり込んだが、最終的に岸に上がった獲物は子どもの死体だった。

フラマン娘はうめいた。「デュー！ あのフィレ (女の子)のメーガン。今日の午後に溺れた子。みんなうっと死体を探してたある」

「まったくジグ神よ」とつぶやいてウィンターはルアーを小さな水着からはずし、死体を抱え上げた。「どこへ運べばいいか教えてくれ」

ウィンターは、アニマの識域下の召喚に自分のシンセ感覚が反応したのだなどとは、皆目見当もついていなかった。不均衡な死が生じ、それをアニマパターンに収めねばならず、それが彼を西へと招いたのだ。いずれ他の自然な反応で解消されたかもしれないが、ローグ・ウィンターの第七感、生命線との共鳴が彼をまっ先にそこに連れて行ったのだ。

そして、それが自分も他人も常に驚かせる靈感を生み出すのと同じアニマ共鳴だ、などというのも、ウィンターはこれっぽっちも気がつかなかった。靈感というのは、偶然に予想外の求めもしない発見を行う能力。A 地点から B 地点に向かう途中で、目先のことだけ考えていたら、たまたま X にぶち当たる。ちょうどハーシェルが天王星にぶち当たったように。この性質のおかげでローグ・ウィンターは我らが「ポインター」になったのだった。

うちのメタファイル (最高機密。アレフエージェント専用！)「ポインター作戦」には他に何があるだろう。

彼は奇妙な記憶力を持っていた。ミリ単位まで形は覚えているのに、色は覚えられない。読んだり見たりしたすべての議論や行動は思い出せるのに、住所や電話番号は覚えられない。これまで合ったあらゆる相手の人格は覚えているのに、名前は忘れる。交際はパターンで記憶しているが、それは相手の女性にはお気に召さない記憶だろう。

スタジオのコンピュータとの脳波インターフェースを可能にする人工シナプスをインストールする、危険な脳手術を受けていた。ウィンターは考えるだけで、ワークショップのコンピュータを操作し、概念を印字、テープ記録、画像描写できる。こんな高度な技法を使える人は少ない。不動の集中力が必要で、よけいな連想に気を取られてはならないのだ。

パターンの歪みやずれを解明するためには何でもする。ウソをつき、インチキをし、誘惑し、盗み、脅し、下手に出て、十戒のすべてと十一番目の戒律 (汝つかまるなかれ) を破り、仕事でそのすべてに違反していた。

33 歳、身長 186.7 センチ、87 キロ、健康。昔々、ルナのフリスコ・ドームからの愛しい

少女と結婚していた。髪を兜型に結い、切れ長の黒い目、しなやかな水泳体型、巨乳、いつもウィンターが惹かれるタイプ。あらゆる文に、当時ルナ・ドームでの流行語で拡大しつつあったイグ語を散りばめる。「ジグ、いやきみはギグ愛してるけどね？ でもあたし、ジグ眠いだけで、もう寝るよミグ」

チャーミングで気まぐれ、楽しいけれど、やんぬるかな、IQ 方面はごく平凡なので、結婚は破綻。ウィンターは女性が大好きだったが、対等な関係のみ。そうした女性の一人は、これまた細身で胸デカ人種だったけれど、ウィンターの考える対等なんて、ご当人ですら満たせるはずがないと苦々しく語った。それに応えたのがチタニア人の妖精。



シナジーのある日、人生が変わった。

ウィンターはヴェヌッチの女性運動審問任務から戻って、いまだにポローニャ・ドームの激しいできごとでショックを受けていた。それが理解不能だったのでなおさらショックだった。これが人生を変える日の前夜のことだった。

彼はボザール・ロタンダのアパートのワンフロアすべてを占領していた。この複合施設は張り出し窓、暖炉、創造的なアーティスト同士をお互いから遮断する分厚い壁を持った、古いエドワード朝様式で建てられていた。この断熱遮音で、コロラトゥーラと格闘するソプラノの絶叫、「Gマイナーの銀河ガボット」の轟く大音響、ヌースペック翻訳中のオックスフォード英語辞典口述などは気にならなくなる。

彼の住戸はオールドファッションで、趣味にぴったりだった。ジョージ朝内装の大きな居間、ユーティリティ・キッチン、化け物のような 2 メートルのバスタブ、裏には寝室二つ、一つは大きく、一つは小さい。小さい方はきわめて簡素で僧侶の房室を思わせた。大きい方が彼のワークショップでぐちゃぐちゃ。壁は一面に本、テープ、フィルム、ソフトウェア。机代わりの会議室テーブル、神経接続されたスタジオコンピュータ——使っていないときには、読み込みのスイッチを確実に切っておかないと、アパートの中で考えていることすべてを記録してしまう——大量のノート、生フィルムやテープ、床に散らばる古い記事の書き散らし、一部はスプールからほどけてしまい、ラオコーンと息子二人を探すヘビの群れのように見える。

あまりに神経が参って、旅行トートバッグを荷ほどきもせず、着替えすらしなかった。アリタリアのジェットは決して清潔さで知られていないというのに。かわりにウイスキーのボトルを持ってきて、居間のソファにすわってコーヒーテーブルに足を上げ、酒で神経



を鎮めようとした。初の殺人から回復しようとしていたのだ。それがヴェヌッチで昨晚起きたことだった。

転換点は一瞬で起こる。これがウィンターの人生を変えた、ボローニャ・ドームの暗いセントラルガーデンズでの三秒の乱闘だった。女の子とデートの待ち合わせをしていたところへ、殺し屋ナイフを持ったゴリラが、暗い茂みから飛びだしてきたのだ。子供時代の長年の訓練でウィンターの反射神経は鍛えられていた。彼は当然予想されるように、力に力では対抗しなかった。むしろ脱力し、へなへたと倒れ、攻撃者が空振りして倒れるところで横転し、殺し屋の背中に飛び乗った。股間に膝で2撃、ナイフを持つ手首はねじ上げて両手でへし折り、ナイフをつかんで右の頸動脈を切る。このすべてにうなるような沈黙三秒間。殺し屋が死ぬまでにはずっと長くかかった。それは考えたくなかった。

「でもなぜだ、ベイビー、どうして？」と彼は考え続けた。

ドリンク三杯後に、急に思いついた。「いま必要なのは、女に溺れることだ。パターンが現れるのを待つにはそれしかない」

ログの呼応体の一人（彼は一ダースもの代替人格を持っている）が応えた。「好きにしろよ、でもでっかい赤本をワークショップに置きっぱなしだぜ」

「なんだってジグジーに賭けて、オレは歌や物語で有名な小さい黒本を持ってないんだ？」

「なんで電話番号を暗記できない？ まあいいや。じゃあご婦人方のご相伴を願いますか」

電話を三本かけたがどれも不首尾。さらに三杯呑んだがどれも上首尾。裸になり、僧坊の日本式ベッドに入り、もぞもぞして、呪詛を吐き、やっと眠ってイカれたパターンを夢見た

イカれたパターン

カれたパターン

れたパターン

たパターン

パターン

ターン

ーン

ン

翌朝ウィンターはかなり早めに目を覚まして起き出した。まずはネットワークに出てプロデューサーと脚本会議。次に出版社と図版をめぐって一戦交える。最後に『ソーラーメディア』に出向き、編集コリドーに入ってお決まりのサーカスパレードを実施。スタッフにキスしたりつねったり分け隔てなく一通りやってから、最後にアウグストス（チング）

スターンの角のオフィスで終点。チングが編集長だ。

「記事はモノにしたの、ローグちゃん？」

「した」

「締め切り三週間」

「間に合わせる。一時間ほど使える空きオフィスとかありますか？ 何本か電話したいし製作からチェック用のゲラも着てる。今日中に戻せて」

「どの記事？」

「宇宙とモンゴル愚行：E=mc<sup>2</sup>の発達障害」

「にゃんとま！ あれは昨日のうちにラボにまわすはずだったのに。会議室をお使い、ローグちゃん。今日はそこでブレーストーミングしてるヤツはいないから」

ウィンターは会議室に落ち着き、電話をかけ、コピー部を4でヴェヌッチ参考文献を取りに来てファイリングしてくれと頼み、著者用ゲラテープを指先で読んだ——走電性も彼のシナジー能力の一面なのだ——そして激怒してチング・スターンに電話すると締め上げ始めた。

会議室に女子が頭をつっこんだ。筋入りブロンド頭で、髪はヘルメット状で切れ長の黒い目。コピー部のデミ・ジェルーだ。ウィンターは彼女に入るよう手振りをして、投げキスを送ると、インターコムですさまじい罵倒を続けた。「愚行の記事のゲラを見てたんですけどね、どっかのクソツタレがぼくのコピーを書き換えてるじゃないですか。何度言ったらわかるんですか？ ぼくのコピーはだれにもいじらせない！ 変えたいなら、ぼくに言えばぼくがやる。クソつたれな後知恵野郎をぼくの署名記事に入り込ませないでくれ！」

ウィンターはインターコムを叩きつけ、顔をあげると怯えたような女子に微笑んだ。「可愛いデミ、飲んだくれた男にとって、きみは何とも眼福。おいで、パパにでっかな抱擁を」と彼が腕を開くと、彼女は身体を寄せつつ震えた。「我が比類なきコピーチェッカーさん、ヴェヌッチの背景資料は全部揃えたから」

「もうコピーチェッカーじゃないんです」とデミは柔らかいヴァージニアの声で言った。

「まさか我が海洋の宝石がクビになったとか言わないでくれよ」

「昇進したんです。ジュニア編集者になったんです」

「おめでとう！ 遅すぎるくらいだよ。こんな賢い子を、しかも出身が——えーときみのなんちゃら出身校ってどこだっけ？」

「メアリーマウント」

「昇給は？」

「残念ながら」

「クソッ！仕方ない、それでも祝おう。出かけようぜ、ベロベロに酔わせてあげる」

「あなたが嫌なんじゃないかと、ローグ」

「なんで？」

「だって……最初に振られた仕事が——あなたのモンゴル記事だったから」

「つまりあのクソッタレ野郎ってのはきみ——？ それなのに、ぼくがコムに怒鳴ってるのを聞きちゃった？」 ウィンターは爆笑し、その子にキスした。彼女は真っ赤になった。

「ぼくの扱いについて最初のレッスンを受けたわけだ。ウーマンリブ審問もきみが編集するの？」

彼女はおずおずとうなずいた。「あなたの担当になったんです。スターンさんは、勉強になるからと言うんです」

「おやおや、それって一体どういう意味だろうね？ あれまあ。見てご覧、デミ・ジェルー、ディクシーランドからの悪魔が、いまやぼくの編集者とは」

女子は深く乱れた息を吸い込んで、会議室の椅子の一つにすわった。そこには決意と恐怖の魅惑的な混合物が見られた「別のものになりたいの」と彼女は柔らかい声で言う。

「え？」

「アイルランドのハウスパーティのお話をしてくれたの、覚えてる？」

「いや」

「あのコーシャー宇宙アホイ・シーフード・グロットにお昼ごはんに連れて行ってくれたとき」

「ご飯は覚えているが話は覚えてない」

「あそこで……みんなの足元を幼児がはいまわっていて、あなたが腹を立ててその子を蹴飛ばした話」

「おやまあギグ！」 ウィンターは笑った。「ダブリン・ドームでのことだった。集まったみんなの間に走ったショックと恐怖は忘れられない。確かにひどいことをしたが、本当に退屈なパーティーだったから」

「そしたら、幼児は愛をこめてあなたを見たって」

「その通り。そうなんだ。リアムは今頃八歳で、いまだにぼくを愛してるんだ。ゲール語で手紙を書いてくれるよ。まるで蹴飛ばされたいというイカれた情熱をもって生まれてきたみたいの子だ」

デミは言った。「ローグ。あなた、あたしも蹴ったの」

「ぼくが——？ 蹴った——？」

驚愕の身震いで鳥肌がたった。これまでも求愛されたことはあったが、こんなやり方は

初めてだった。

こっちから求めたっけ？

誘った？

ぼく自身が感じてもない相思相愛に気づいた？

ぼくはウソをついているのか？

ずっと求めていたものなのか？

こんなふうに呼応体たちがワイワイ騒ぐ中、彼は立ち上がり、会議室のドアを閉め、女子のところに戻り、椅子をぐるっとめぐるらせて膝をつき合わせると、彼女の手を取った。

「どうしたんだ、デミ？古くさい愛なのか？」

彼女はうなずき、泣き始めた。彼はハンカチを取りだして握らせた。

「なんと勇敢な発言だろう、ダーリン。いつからなの？」

「わかんない。とにかく……起きたの」

「たった今？」

「いいえ、とにかく、なんか起きたの」

「きみ、何歳？」

「23」

「これまで恋したことは？」

「あなたのような人とはないわ」

ウィンターは、このすすり泣くほっそりした巨乳娘を見てため息をついた。そして慎重に語った。「聞いてくれよ。まず、嬉しいよ。だれかが愛を提供してくれるのは、虹の果てのようなものだし、そんな宝物を見つけられる人はなかなかいない。2つ目に、すぐにきみを愛し返すこともできるんだが、その理由は理解して欲しいんだ、デミ。愛が与えられたら、その応答は愛だ。一種の美しい恫喝だね。当たり前のことを言って君の気を逸らせてるだけなんだけどね、ハンカチをびしょびしょにされないように」

「わかってる。あなたいつも正直ですもの」と彼女はささやいた。

「だから、きみのものにはなれる。ぼくは女性にはイカレてしまう——我が悪徳の一つだ——そしていつにも増していまは、ぼくは女性を必要としているんだ。だが——いまはこっちを見てくれ、デミ——ぼくの半分しか手に入れられない……いやそれ以下かも。ぼくのほとんどは仕事に没頭してるから」

「だからあなたは天才なのよ」

「崇拜するのはやめてくれ！」と彼はいきなり立ち上がり、部屋を横切って太陽系の巨大地図に向かうと、何ら気乗りせずにそれを眺めた。「いやはや、きみはどうあってもぼ

くを仕留めるつもりだろう、え？」

「ええログ。なんかいやだけど……ええ」

「なんとも無慈悲じゃないか。かの偉大なるログ・ウィンターが、メアリーマウントのつまらん子にモノにされちまって、またもやぼくがだれの言いなりにもならないのに、女相手なら意気地なしな道化師なのが証明されちまった」

「恐いの？」

「恐いとも、でもどうしようもない。わかったよ、こっちおいで」と腕を開くと、彼女はそこに飛び込んだ。二人はキスをした。彼のほうは、しっかり閉ざされた唇の接触のみ。

「この堅い口が大好き。それとこの手も硬いのね。ああログ……ログ……」

「それはぼくがマオリの土人だからだ」

「ちがうわ。あなたみたいな人はだれもないわ、ログ」

「その崇拜はジグ止しろって。ただでさえ虚栄心は強いんだ」

「すごい！あなたをモノにできるとは絶対思わなかった！」

「なんだって？ いやまったく！」ウィンターは天井を仰いだ。「おお、ウインタ王家の聖なるご先祖様、十五世代にわたりマオリ族を支配しいまやテ・ウニタの左眼に魂が宿る高貴なる王族の皆様……このブラックウィド―蜘蛛にぼくが喰われませんようお守りを！」

デミはクスクス笑い、喜びでシューッと音を立てた。

「女の子に見初められたら、高貴な野蛮人としてはどうしようもない。包囲され、呪われ、奪われるしかない」

「左眼なの？」とデミ。

「うん。魂はそこに宿るとマオリは信じてるんだ」と彼は右目を閉じると、左眼は彼女の喜びと期待の視線を返した。「ギグれたぜ、デミ。ここを出て外に出かけて祝おう。ただし今度はベロベロになるのはぼくのほうだ……苦痛を和らげるため」

「シューッ！」



**充分な世界と、時間があつたなら、ご婦人よ、このじらしぶりも罪はない<sup>3</sup>。**

まず彼女はアパートを検分し、あらゆる家具を調べ、ときには感心してみせねばならなかった。家具、あらゆる写真、あらゆる本とテープ、太陽系各地の出張で得たガラクタヤ

---

<sup>3</sup> アンドリュー・マーヴェル「じらす恋人に捧ぐ詩」

おみやげ。2メートルのバスタブには、古くさい驚きで眉をひそめ（正式には違法だ。こんな奢侈品はメタ時代以前はエネルギーを食い過ぎたから）、日本ベッドに目を傾けた。巨大な象牙のかたまりの上に、分厚い白いマットレスがあるだけのやつね。そしてワークショップの散らかりようには、ちょっとうめき声をあげた。

**私たちは腰を下ろし、どちらに歩こうかと考え、長き愛の一日を過ごす。汝はインドのガンジスのほとりでルビーを見つけ、私はハンバー川の潮のほとりで愚痴る。**

「あたしのどこが気に入ったの？」

「いつのこと？」

「初めて『ソーラー』に本社したとき」

「なんで気に入られたと思った？」

「お昼につれてってくれたじゃない」

「熱意だよ」

「具体的には何への熱意さ？」

「ヴァルカンに惑星仲間の適切な場所を認めようとする熱意」

「ヴァルカンなんてないじゃない」

「そこが気に入ったんだ」

「このお土産箱には何が入ってるの、ねえ」

「瀬戸物の人形の顔。火星のアンゲリア・ドムのゴミ箱で見つけて、一目惚れしたんだ」

「こっちは？」

「おいおいデミ、ぼくの過去すべてをほじくり返すつもりか？」

「そうじゃないけど、でも教えて、すごく奇妙だから」

「ガニメデのビルマ・ドームにある宝石タワーの涙なんだ」

「宝石タワー？」

「何世紀も前に銃弾タワーに弾丸を落としたのと同じやり方で、合成宝石を鑄造するんだ。赤いルビー溶液を鑄造したけど、タワーから落として球体にならなかったの、ぼくにくれたんだ」

「不思議ね。中に花があるみたい」

「うん、それが欠陥なんだ。ほしい？」

「いいえ。あなたからは欠陥ルビー以上のものがほしいわ」

「おーっとがっついてきたよ、この子」とウィンターは居間に向かって言った。「ぼくをモノにしたから、本性をあらわにしたな」

**洪水より十年先に君を愛そう、そしてお気に召せば君はそれを、ユダヤ人の会話まで**

**拒んでほしい。**

「で、『ソーラー』で初めて会ったとき、きみはぼくのどこが気に入ったんだい？」

「あなたの動悸」

「ぼくが疲れてたってこと？」

「まったくちがうわよ！ リズムよ」

「それはぼくが実は黒人だから。黒人はリズム感がいいんだ」

「いいえちがいます。あなた、本物のマオリ族ですらないわ」と彼女は優しい指先で彼の頬にふれた。「その傷がどうやってできたか、知ってるわよ」

彼はメガネを引き下ろした。彼女は続けた。

「あなた、すべてを何かビートに合わせてやるのね。コンボのリズムセクションみたい。歩くの、話すの、冗談言うのも……」

「なんだい、きみは。なんか音楽キチガイかなんか？」

「だからあなたのテンポに入り込みたかった」

ルビーの涙をお土産箱に戻す彼女を、ウィンターは見つめた。晩の光が彼女に奇妙な角度で当たり、いきなり彼女は一度だけややこしい関係を持った『ソーラー・メディア』の赤毛レイチェル・ストラウスに、いきなり一瞬だけそっくりとなった。

我が植物愛は帝国より広大に育ち、しかもゆっくりと。

ウィンターは彼女に不穏なものを感じ始めていた。彼にとっては新しい感覚だ。「こいつは何にせよとんでもないイカレた始まりだ」と彼は愚痴った。

「どうして？ 楽しみとゲームだらけじゃない？」

「だれが楽しんでるんだよ」

「あたし」

「だれが遊んでるんだよ」

「あたし」

「じゃあぼくの立場は？」

「耳からのノリに合わせてよ」

「左、それとも右の？」

「その真ん中。魂があるのはそこだから」

「きみはこれまで会った女子の中でいちばんとんでもないな」

「あなたよりマシな男に罵倒されてきましたからね、旦那」

「どんな男？」

「拒絶してきた男たち」

「本当かなあ」

「そう、疑惑がないとあなたをコントロールできないから」

「ちくしょう、格がちがうようだな」

**汝が目を讚えるのに百年かかる、そして汝の顔を愛でるのに。胸のそれぞれを慈しむのに二百年、だがその他の部分に三万年。あらゆる部分に少なくとも一時代、そして最後に時代があなたの心を示すはず。**

「あなたがそんなふうだとは夢にも思わなかった」と彼女は微笑んだ。

「そんなふうって？」

「おどおどするの」

「ぼくが？ おどおど？」彼はいきりたった。

「ええ、でも素敵よ。目はあれこれ見ているのに、身体の他の部分はためらってる」

「そんなはずはない」

「何が見えるか言って」

「狂った万華鏡」

「もっとはっきり言うത്？」

「つまり——」彼はためらった。「言えない。つまり——きみはいつも姿がちがう」

「どんなふうに？」

「えーと……髪の毛。ときには直毛、ときにはウェーブ、金髪、黒髪……」

「ああそれは『プリズマ』っていう新しい染料よ。波長に反応するの。APB 放送でどうなるかわかる？ オーロラみたいになっちゃうのよ」

「それと目も。とくには黒い目で切れ長、前妻みたいな感じ。ときには大きく開いて巨大なオパールに……昔知ったフラマン・ドームからの女の子みたいな」

彼女は笑った。「そんなのトリックよ。女の子ならみんな知ってる。稲妻みたいに男をひるませるのよ」。と彼女は男のメガネを外して自分でかけた。「ほら。これで安心？」

「それと——それとオッパイパイ」彼はどもる寸前だった。「はじめてうちの雑誌に出勤したときには確か……可愛くツンと出てるだけだった。それがいまや——いまや——ぼくが取材にでかけてるときに成長してたのか？」

「見てみましょうか」と彼女はブラウスを脱ぎ始めた。

**だが背後で常に時の翼ある馬車が駆け寄るのが聞こえる。そして私たちの前にずっと広がるは広大な永遠の砂漠。汝の美はもはや見つかからない。そしてその大理石の囲いの中にも、我がこだまする歌は響かない。そしてウジがその長く温存されたる処女性を味わい、その気取った榮譽は塵と化し、我が欲情もすべて灰となる。**



「よせ。頼むから」

「なぜ？まだおどおど？」

「いや、つまり——期待したものとちがう」

「もちろんよ。マッチョなマオリさん。でも決めるのはあたし」ブラウスが脱げた。

「いつまで女が待つと思うの？墓場まで？」

「ジグたまげた！船の舳先についてる女神像みたいだ」

「ええ、人呼んで中国のクリッパー船」

「きみは何者なんだ、なにやら処女開放運動の武闘派か？」

「じゃあそれを確かめてみませんか？」と彼女は笑った。「さあいらっしゃいよ、ローグ……」

彼女は片手だけでローグをソファから持ち上げると、ベッドルームに引きずりつつ、残った手で彼の服を破り開いた。

**我らの力と我らが優しさをすべて、一つのボールに丸め、荒い奮闘で喜びを引き裂いて人生の鉄門を抜けよう。かくて太陽を静止させることはできずとも、走らせ続けることはできるのだ。**

とはいえ彼女は、無窮の恋人の冥途の中で太陽を静止させはしなかった。暗闇の中で彼女は、百の手、口、秘部を持つ百人の女性さながら。彼をのみこむ分厚い唇の黒人女となり、固く高い尻が彼をはさみこむ。女王蜂の処女となり、仰向けで寄る辺なく、しかし喜びに打ち震える。

彼女は瑞々しく、彼の耳にあえぎつつ、その口が彼の肌からアルペジオを飲む。彼が彼女を獣とすると、外部世界の動物となり腹からの咆哮をたてる。彼女はふくらませた合成マネキンとなり、悲鳴をあげてピンボールマシンの音でうなりをあげる。タフで優しく、求めつつ譲り、常に予想を裏切る。

そして彼女は、ローグの中に明晰なファンタジーをインスパイアした。彼は鞭打たれ、十字架にかけられ、引きずられて四つ裂きにされ、灼熱の鉄で焼き印をおされる。自分たちがありえない形で絡み合っているのが、拡大鏡に映っているのを見たように思った。玄関が叩きつけられ、くぐもった声が脅しをかけるのを聞いてパニックした。股間は果てしない爆発の火山へとふくれあがったかのよう。だがこうしたすべてを通じてずっと、彼は自分がシャンペンとキャビアを味わいつつ、キラキラした会話を行っているかのような気持だった。それは初めて愛を交わすために暖炉の前でくつろぐプレリユードなのだ。

### 3. エネルギー

私はますます人間が危険な生き物だと確信しつつある。そしてその力は、それを持つのが多数だろうと少数だろうと、常に私をつかんで離さない。

——アビゲイル・アダムズ

ウィンターはゆっくりと日本式ベッドから出て、そっと居間へと歩き、ソファにすわって足をコーヒーテーブルに載せた。熟考し、パターンを整理していた。半時間後にデミが出てきた。しなやかで金髪、再び切れ長の目。彼のシャツを簡易版ナイトガウン代わりに着ている。コーヒーテーブルの反対側の床にしゃがむと、ウィンターを見上げた。

「愛してる」とささやく。「愛してる、愛してる、愛してるわ」

長いこと間をおいて、彼は身震いするほど息をのんだ「きみはチタニア人」それは質問ではなかった。

彼女はローグと同じくらい間をおいてから、うなずいた。「それで何か変わる？」

「わからん。つまり——会ったのはきみが初めてだから」

「ベッドで？」

「どこでも」

「絶対？」

「い、いや。たぶんわからない。だれもわからない」

「そうね」

「きみにはわかるのか？」

「なんか秘密のヒントがあるのかってこと、フリーメーソンの秘密の身ぶりみたいな？  
ないわ。でも——」

「でも何？」

「チタニア語をしゃべれば、お互いは見分けがつくけど」

「チタニア語ってのはどんな風に聞こえるんだ？ ぼくも聞いたことがあるだろうか？」

「かもね。これはちょっと難問。ほら、チタニア人は太陽系の他の生き物みたいなコミュニケーションじゃないのよ」

「ちがうの？」

「音や視覚では話さない」

「じゃあどうやって？ 超能力？」

「いいえ、化学で」

「何だって？」

「化学言語なのよ。香りや味や触覚や体内感覚」

「またまたぼくをジグろうとしてるだろ」

「いえいえ。きわめて高度な言語で、混合や強度の変調もあるの」

「信じられない」

「異質だから信じられないだけよ。ほら、化学語をしゃべってあげる。受信用意は？」

「やって」

まったくの沈黙数瞬の後、デミが尋ねた。「どう？」

「何も」

「何か匂いは？ 味は？ 何か感じた？」

「何も」

「どんな種類でも出力を受信した？」

「単に、これがインチキ詐欺だという確信だけで——いや。待った。正直に言おう。一瞬、なんだか太陽放射みたいなものを見たような気がした。ぼくの頬の傷みたいなやつだ」

彼女は顔を輝かせた。「ほら！ わかったでしょ？ あたしを受信できてたのよ。ただあまりに異質だったから、心がその入力を見慣れたシンボルに翻訳しなきゃならなかったの」

「つまり本当にきみが何かを語っていて、それをぼくが視覚的な太陽放射に翻訳したってこと？」

彼女はうなずいた。

「化学語で何を言ったの？」

「あなたがイカれて混乱したマオリのマッコで、そのあらゆる部分を慈しむし、その傷も含めて」

「そんなにいろいろ？」

「しかも本気よ、特に傷は。あなたがいぶん恥ずかしがってるから、可哀想に……」

「哀れまないでくれ。哀れまれるのは大嫌いだ」と彼はうなり、そして言った。「チタ

ニア人ってのはうろうろしてずっと化学語で放送してるのか？」

「いいえ」

「ここにはたくさんいるの？」

「知らないし、気にもしてない。あなたしか気にならない……そしてあなたちょっと恐  
い」

「わざとじゃないんだ」

「すごく冷たくて分析的で……アレの後は」

「許してくれ」と彼は作り笑いした。「なんとか整理しようとしてるんだ」

「話すんじゃないわ」

「話はしなかっただろう。示してくれた。これまでない驚異的な体験で——きみはなぜ  
地球にやってきたんだ？」

「ここで生まれたのよ。取替子なの」

「なんだって？ どうして？」

「実母がジェルー一家の親友だったの。一家のお医者さんだったのよ。その話には深入  
りできないわよ。永遠にかかっちゃう」

「わかった」

「一家の最初の赤ん坊が突然死したとき、あたしは生後一ヶ月だった。母は赤ちゃんの  
身体をあたしと入れ替えたの」

「いったいぜんたいどうして？」

「一家が大好きで、最初の赤ん坊が死んだら一家がショックで永遠に壊れるとわかって  
いたから。あたしは長女じゃなかった……チタニア人は豆みたいに次々に生まれるから…  
…」

「お父さんはテラ人？」

「いいえ。子どもはチタニア人同士でしかできない。あたしたちの卵子はそちらの精子  
を嫌うか、それとも逆なのかも、とにかく、立派な家族でテラ人として育てられたらあた  
しのためにもなると思ったのね。いつもチタニア人の目を向けておけるし、まさにそうし  
たわけ。おしまい」

「ならチタニア人は愛せるのか」

「ローグ、あなたはわかってるはずでしょう」

「でもわからないんだよ」と彼は途方にくれて手をふった。「あのプリズマ線量だの目  
つきの練習だの——あれはチタニア人のカモフラージュ、そうなんだろう？」

「ええ。あなたの求めるものになろうとはするけれど、あたしの愛はカモフラージュじ

やない」

「そしてきみは自分の姿を変えられるの？」

「ええ」

「でもきみのほんとうの姿は？」

「チタニア人のほんとうの姿ってどんなものだと思ってるの？」

「知るもんか」と彼女に向けた視線は困惑していた。「たとえば——燃えるエネルギーのかたまりとか、プラスチックのアメーバか、稲妻みたいな、え？」

彼女は爆笑した。「不安になるのも仕方ないか。一千ボルトにキスされたらたいへんよねえ。そういうあなたのほんとうの姿を教えてよ」

「自分で見ればいいだろう、見たままのものを信じられる」

彼女は微笑んだ。「Au contraire, m'sieur. あなたが本当にどんなふうかは、あなたが死ぬまで見られないわ」

「それはバカげているよ、デミ」

「いいえまったく」と彼女は真剣になった。「ほんとうのあなたって何、あたしが愛しているあなたというのは？ パターンについての天才ぶり？ シナジー審問者としての能力？ ウィット？ 魅力？ 洗練ぶり？ いいえ。あなたの現実、そうしたすばらしい性質であなたが何をするかにあるの……あなたが貢献して後に残すものすべて。そしてそれは、死んで消えるまではわからないでしょ」

「確かにそうだなあ」と彼は認めた。

「あたしたちだってそうよ。ええ、その場にあわせたり相手にあわせたりして、適応して姿を変えることはできる。でも、あらゆる場やあらゆる相手でそれができるわけじゃない。ほんとうのあたしは、何をするかという選択にあるのよ。そして死ぬときには、自分の内心奥深くが常に選んだ姿になっているわ。それがほんとうのあたしよ」

「神秘主義がかってきてない？」

「いいえまったく」と彼女はコーヒーテーブルを叩いたが、それは女教師が講義を印象づけるやり方とそっくりだった。そのテーブルは、サターン 6 に生えたユリノキの見事な断面だった。「この年輪を見て。どれもある変化、適応を示してるわよね？」

彼はうなずいた。

「でもユリノキにはちがいないでしょ？」

「うん」

「かよわいつぼみとして始まり、どんなものにでも成長できたはずなのに、宇宙の聖霊が『おまえはユリノキだ。必要に応じて変化し適応せよ、だがユリノキとして生きて死ぬ

のだ』と言ったわけよね。で、あたしたちでも同じこと。変化し適応はするけれど、それは常に奥底のほんとうの自分の制約内でなのよ」

ウィンターとしては、呆然としつつ首を振るしかなかった。

「あたしたちは多形変形生物よ、ええ。でも生きて、適応し、生き残るために戦い、恋に落ち——」

「そしてわれわれと、楽しい恋のゲームを遊ぶ、と」と彼が割り込んだ。

「別にいいでしょ？ 愛は楽しいものじゃないの？」と彼女はにらみつけた。「どうしちゃったのよ、ウィンター。愛は深く、暗く、陰気で、絶望的なものであるべきだとでも？ あの手の古いロシア演劇みたいに？ あなたがそんなに幼いとは思わなかった」

一瞬面食らってから、彼女のこの爆発に彼は身をふるわせて大笑いした。「ちくしょう、デミ！ また適応したな。でもいったい全体どうやってぼくが導師を必要としているのがわかったんだ？」

彼女もいっしょに笑い出した。「知らないわ、ダーリン。左眼で見たのかもね。半分くらいのときは、何が必要か感じとっているだけなのよ。結局のところ、あたしは半人間でしかないんだから。そして恋に落ちたのはこれが初めて。だから説明責任なんかないわ」

「ずっと変わらずそのままのきみでいてくれ」と彼はにっこりした。だがそこで「いや、オレはいま何を言ってるんだ？」

「あなたのためだけにしか変わるなってことよ」と彼女は相手の手を取った。「いらっしゃいな、星まみれさん」



こんどは二人一緒に居間に戻ってきた。今回彼女は、ソファにすわって脚を上げた。即席ナイトガウンなど着る手間はかけなかったし、いまや女子学生の陸上選手のようなようだった。向かいの床にあぐらをかいてすわったウィンターは、彼女を愛でつつ「フィールド・ホッケーチームの主将だ」と思った。

「近くにきてよ、ダーリン」

「いまはよす。そのソファはクソしゃべり過ぎるんだよ」

「しゃべりすぎる、ですって？」

彼はうなずいた。

「冗談でしょう、ローグ」

「本気だとも。すべてのものはぼくにしゃべる。でもいま聞きたいのはきみだけなんだ」

「すべてのもの？」

「うん、そうなんだ。家具、絵、機械、植物、花……なんでもいい。聞き耳をたてれば話が聞こえるんだ」

「ソファはどんな音をたてるの？」

「ええと……ほとんどは、口に綿をつめた、スローモーションのセイウチみたい。ブル——フー——グー——ムー——ヌー——辛抱強く、長く聞いていないと」

「花は？」

「クスクス笑う女の子たちみたいに気まぐれと思うかもしれないけれど、そうじゃないんだ。鼻にかかっている、下品で、C'est la Séductrice (これが蠱惑の女) という香水のコーナーシャルみたいなんだ」

「宇宙すべてと話ができるってことね」と彼女は笑った。「あたしもそれで惚れたのかな」と彼を見下ろす。「『愛してる』って言ってくれるものはあるの？」

「そういう考え方はしないんだよ。みんな独善のかたまりだ」

「あたしはするわよ。愛・し・て・る」

彼は視線をあげて彼女と目をあわせた。「その一枚上を行ってやろう。きみを信用してる」

「なぜそれが一枚上なの？」

「きみに秘密をうちあけられるからだよ。きみといっしょに考えたいことがあるんだ」

「いつも考えてばかり」

「悪いクセでね。ねえきみ、ぼくに起こったことがあるんだ……ひどいことがね」

「今夜？」

「ヴェヌーチで。これから話すことは、他言無用だよ。その点はあてにできるのはわかっているんだが、でもきみはチタニア人とはいえ、ヴァージニア出身のガキだから、だまされて口を滑らせかねない」

「何も明かさないわよ」いきなり、フィールド・ホッケーチームの主将はアーサー王伝説の魔女モーガン・ル・フェイそっくりとなった。

「怨霊退散！」と叫んで、彼は顔の前で腕を交差させた。

「現行犯ね」と魔女はニヤリとすると、燃えるようなシエラ・オノーランの姿に変身した。

「それはやめてくれ！」とウィンターは、怒鳴りあいのけんかを思い出して叫んだ。

「頼むから、デミ……」そして、彼女がその上演をやめると、彼はブツブツ言った。「するときみたちチタニア人も完全無欠ではないようだね」

「もちろん。そんな人がいるの？」と彼女はかしこまって言った。「それと、『きみたちチタニア人』はやめてくれない？「きみたち」「自分たち」の話じゃないでしょう。あたしたちみんな、宇宙的陰謀の中で同じジョークの一部なんだから」

彼はうなずいた。「でもね、愛しい人。とらえどころのない愛と対処するのが厳しいのはわかってくれよ」

「あらそう？ ねえローグ、その淫らな私生活で女優とやったことはある？」と彼女はサラ・ベルナルの姿を採り始めた。

「残念ながら、ある」

「そしてその人、舞台でもそうでないときでも、いくつくらい役柄をこなしてた？」

「百億兆くらいかね」

「あたしたちもまったく同じことでしょ」

「でもきみは物理的に変われる」

「メーキャップってまったく同じでしょ」

「そうだな、ぼくの負けだ」と彼は譲った。「自分がだれ (Who) と恋に落ちているのか、ついにわからずじまいらしいな。Who? Whom が正しいのか？ 高等学校 (Hohere Schule) では形容詞がありすぎて文法は落第したんだ」

「あなた、天才ではあるから」と彼女は満面の笑みを浮かべた。「あなたにはいろいろ教わるつもり」

「きみにとっての父親がわりってわけか」

「じゃあこれは近親相姦？」

「十戒のほとんどは破ったし、もう一つ破ったところでどうなる？ ブランデーでも？」

「いまはいいわ」

ウィンターは、コニャックのボトルとクラレットグラス二つを持ってきて、脚つきグラスをコーヒーテーブルに下ろし、ボトルを開けて、そこからがぶ飲みした。

「これで別の戒律にも違反した」

「どれ？」

「メアリーマウントって、カトリック系の大学じゃなかったっけ？」

「おおむねそうね」

「ジェル一家は、その取り替え子をカトリックとして育てた？」

「おおむねそうね」

「だったらちょっと衝撃かも。第6戒」

「汝殺すなかれ——？ ウソ！」



「そうなんだ」

「またまた人を騙そうとして」

ウィンターは首を振った。「ボローニャ・ドームでの最終日に起きたんだ」

「でも——でも——」彼女は飛び上がり、復讐の女神のような姿になったので、ウィンターはその髪にヘビが絡みついている様子が想像できた。「ローグ・ウィンター、あたしをジグってるんなら、ただじゃ——」

「いやいやいや」と彼はわりこんだ。「こんな話を冗談にはしないよ」

「するでしょう。邪悪なウソつきなんだから」

彼はソファを叩いた。「すわってくれ、愛する人。お話ではあるんだが、でっち上げじゃない。ほんとうに起こったし、信用できるだれかに相談したいんだ」

彼女は、まだいぶかりつつもすわった。「で？ 話して」

「ボローニャで、奇妙なパターンのいちばん最後のところにやってきて、それがメタ・マフィアがらみだったんだ。トリトンのジンクどもがメタ独占をかけていて、連中はタフだろ。価格も輸出枠も消えて、太陽系内部の野蛮人どもがどんな理由であれ気に食わなければ、そいつらへの輸出枠も削る。だから当然ながら、トリトンからそれを密輸するメタ・マフィアがいる。とんでもない価格だが、相手が誰だろうと何だろうと、きちんと配達してくれる。一種の親切な泥棒みたいな連中だ。ここまではいい？」

彼女はゆっくり答えた。「メタ以外は。それがメタスタシス(転移)の略なのは知ってて、それがエネルギーを生み出すのはわかるけど、どうやって？」

「ちょっとややこしいな」

「聞くだけ聞かせて」

「まず、原子と荷電粒子から始めよう。メタを使うと、通常の状態から励起状態にもっていける。これはメタからエネルギーを吸収する。そして通常状態に戻るときにそのエネルギーを放出する。それが転移プロセスだ。ディグれた？」

「いいえ、科学的すぎるし、マリー・キュリーに変身したりはしないからね」

「どのみち彼女はそんなに見目麗しくはなかったよ。わかった。きみは化学でぼくにしゃべろうとしたね。ぼくはきみにパターンでしゃべってみよう。鋼鉄に穴を開け空間を横切ってメッセージを送れるレーザー光線を考えてほしい」

---

「わかった？」

「パターンはないわ。ただの直線」

「うん、でもその直線はどうやってできた？ 通常の休んだ状態にある粒子の雲を考えてほしい……何かジェリーの群れみたいな……」



「さてこの群れを刺激して、エネルギーを注ぎ込むと励起状態になる。するといまのが粒子プラスになる……」



「でもそれは自然の安定状態じゃない。一種の原子ヒステリーみたいなもので、やめてもとの通常の快適なジェリーの安楽椅子に戻りたがる……パターン見えた？」

「Continuez. Continuez lentement」(続けて。ゆっくり続けて)

「こいつらはただ食いはしないので、受け取ったエネルギーを放出する。すると仲間のもういくつかは通常の休息状態に戻り、そいつらのエネルギーを放出し、するとさらに4つ、すると次の8つもその気になって、さらに16、32、64、そしてそれがたまと、そのエネルギーすべてが光線になって出てくるまでそれが続く」



「それがものの数ナノ秒で、同じ位相で起こるんだ。だから強力なものになる。この図式はわかる？」

「ええ、でもメタはどこで出てくるの？」

「うん、原子や粒子を励起状態へと刺激するにはさまじいエネルギーがいるんだ。戻ってくるエネルギーより多くのね。だから損益計算をすると、赤字になってしまう。でも励起にメタを使うと、黒字なんだ。1使って100返ってくる」

「なぜ？ どうやって？」

「あのイカレた触媒が、出ようとして頑張る貯蔵エネルギーの宝庫だからなんだ。デミ、あらゆるものには貯蔵エネルギーがあるし、それを放出するには電子を遷移させればいいだけだ。マッチを考えてくれ。カリウムと、アンチモンといろいろあって、放出されるのを待っているエネルギーだらけだ。マッチなら摩擦でそれが放出される。だがメタがエネルギーを励起して放出させると、マッチに比べてダイナマイトみたいなものだ。あのチェスの伝説を実地にやっているようなものだ」

「チェスの伝説って？」

「ああ、そのお話では、ある哲学者がインドのラジャの娯楽に供するためチェスを発明したそう。王様は大喜びして、望みのほうびを何なりと言え、まちがいなくそれを遣わずぞ、と言った。哲学者は、チェス盤の最初のマスに米を一粒、次のマスには2粒、次は4粒という具合に、64マスまで倍々にしていって、と要求した」

「大した量じゃなさそうね」

「ラジャもそう言った。黄金だの宝石だのを要求されると思ってたからね。この願いはあまりに慎ましいと思ったんだが、その最後の1マスを埋めるには、インドと中国のすべての米をあわせても足りないことがわかったんだ。幾何級数ってやつだよ。メタがエネルギーについてやるのも同じこと」

「どうしてそんな具合になったの？」

「さあね。前からこれについて、全面特集をやりたいと思っていたんだが、足がかりがないんだよ、トリトンのジックスどもが協力を拒否するもんだから。ここの物理学者が教えて暮れる唯一のことは、それがエントロピーを逆転させるということだけ。せいぜいがんばってほしいね」

「エントロピーって？」

「あんたのお上品なお大逆では何も学習しちゃうのかいな」

「外国語学部は、エントロピーの講義は何もなかったわよ」

「言語じゃないよ。デカダンス入門講義だ。エントロピーは劣化なんだ。物理系を放置するとエントロピーが高まり、つまりはそれがボロボロになって崩れて仕事に使えるエネルギーが目張りするってことだ。メタに保存された力は、腕にすげえ一発くらわしてそれ

を逆転させる」

「ジグ！ うわあ！ 確かに複雑ね！」

「ああ、まったく天と地の開き」

「メタってどんな形なの？」

「見たことないんだ。エンジニアたちは、ハーレムを守る宦官みたいにそれを死守してる。訪問者なし。見学なし。危険すぎるんだって——デミ、やめろよ！——まあそれも無理はないかな。過去にあまりにバカげた事故が多すぎた」

デミは裸の寵姫への変身を中断した。「じゃあ第六戒の話に進みましょう」

「いま？」

「お願い」

「でもぼくたちの間におきたすばらしいできごとの話をしたいのに？」

「後で」

「手遅れになるかも。愛は蛇口じゃないんだ〜、止めたり出したりはできない〜」と惨めに歌い出す。

「はいはい、ずいぶん美しくもエントロピー的な声ね、フラット 4 つ。で、六戒はどうなったの？ お願いログ。二人の間の障害になってるんだから」

「そうなの？」

彼女はうなずいた。「あなたに愛されるときに感じるの……小さな雷雲があなたの上にかかっている……」

「いやはや」と彼はささやいたが、半ば自分に語りかけていた。「すばらしいね……あれを感じられるのか……ぼくをあんなにがついているときにさえ……」

「ねえちょっと、まじめにやってよ」

「少しギヤシフトしようとしているだけ。待ってくれ」と彼は落ち着いたように言った。

デミは同情するような沈黙に陥った。彼はゆっくりと指でソファを叩き、過去を見つめ、一度「いまは邪魔するな」とつぶやいた。それは可聴域下の独語で割り込んで来る何やら絵だか家具だかに向かってのものだった。そしてやっと顔を上げてデミを見た。

「ヴェヌッチが完全にイタリアだけじゃないのは知ってるよね。むしろ地中海的なところだ。ギリシャ、ポルトガル、アルジェリア、アルバニア等々。みんな自分の伝統や生活様式にしがみついている。シチリア、ナポリタン、ヴェネチア、ニューヨークのリトル・イタリーまで。そいつらはスラム＝イタリア系英語をしゃべるし、マルベリー・ウッドームの聖人の日フェスティバルときたら大騒ぎ」

彼女はうなずいたがまだ沈黙を守り、この話がどこへ向かうのかと思案した。

すばやい目が彼女の表情をとらえ、彼はにっこりした。「もう少しの辛抱だから我慢して。かつてスープ＝クイック社が、なぜイタリアのドームで自分たちの製品を買うのがポローニャだけなのか尋ねたんだ。だから、イタリアの妻は伝統的な主婦で、自分で作るスープを誇りにしていんだと説明することになった。ポロネーゼは例外だ。その女性はキャリアが好きで、打倒 Kinder (子ども)、Kirche (教会)、Kuche (料理)、みんな帰宅して出来合のディナーを用意するだけ」

「あたしはそっちの味方」

「ぼくも別に反対してないよ。ポローニャはヴェヌッチ女性運動の爆心地なんだ。その polizia (警察) のほとんどは女性だ。デッカいタフなイタ公の男役で、ちょっともめごとを起こしたくはない相手ばかりなんだが、すばらしい例外が一人、すっごく繊細で小さな女性がいて——ここが肝心——それがジंकだったんだ」

「ええっ？ ヴェヌッチに？」

「ポローニャ・ドームでね。おかげでぼくはすさまじくシナジることになった。特に彼女がずいぶんと金浸りだったから——高価な仕立ての制服、高級レストラン、豪華な交通手段、その手の代物だよ——だからぼくが何をシンセってたかはわかるだろう」

「マフィアの代表だったのね」

「そしてトリトンでの連中の活動についての糸口にもなるかなと思ったんだ。それがぼくの暴きたくてたまらないパターンだからね。これがまちがった糸口とは感じなかった。そこで魅力を全開にして、やっとデートをとりつけて、仕事が終わってから中央庭園で会おうということになったんだ。それがポローニャ・ドームでの最後の夜だった」

「じゃあ彼女を殺したの？」 デミは青ざめた。

「早めについて、庭園を検分したんだ——野郎系女子を求めてクルージングするリブ女性の激しい遊び場だからね。暗くて湿度が高くて物陰ばかり——そして落ち合うと約束したまさにその場所で、茂みからこんなゴリラが飛びだしてきて、全力でぼくを攻撃したんだ」

「なんとマントかんと！ それで……？」

「それで第六戒を犯したんだ」

「で、でも——どんなふう？」

「デミ、詳細は省くが、マオリが将来の王様に叩き込むことの一つは、取っ組み合いで自衛して相手を殺す方法なんだ」

「だれだったの、そいつ？ だって、なんかのまちがいじゃなかったの？」

「絶対にまちがいなんかじゃない、だからこうしてとち狂っておるわけで……というの

もそいつはスライスナイフを持ってたんだ——これはマオリ族が勇敢な敵の心臓をくりぬいて、その勇気のために喰うのに使うナイフなんだ——」

「うげっ」

「そう、そしてその ID 書類にはこうあった：ケア・オラ——ガニメデ。マオリの殺し屋だ」

「なんですって、なんですって！それでマフィアの女子はきたの？」

「それを待って確かめる気はなかった。ナイフを取って、死体は茂みの下に残して姿を消したよ。これでぼくをジグでザグらせてるものがわかっただろう。考えてもみてよ。なんかへまをして、ジंक娘に本当の魂胆を悟らせたのか？彼女のマフィアがぼくを殺し屋に任せたのか？それに、なぜマオリ兵、ぼくの部族の一人を選んだんだ、そもそもそいつがヴェヌッチなんかで何をしてたんだ？連中のポリツィアが、下手人候補がぼくだとつきとめて追いかけてくるだろうか？マフィアはまだぼくの首に賞金かけてるのか？オイヴェー！シュログ・コプ・インヴァント！（いやはや、頭を壁にぶつけたくなる！）」

ウィンターが頭をぶつける様子を精一杯見て取ってから、デミは尋ねた。「そのマオリのスライスナイフは持ってるの？」

「まだ旅行用トートバッグに入ってる」

「見てもいい？」

彼が持ってきたナイフを、デミは慎重に検分した。とがたまっすぐな剃刀のようで、ホロー・グラインドされており、ガードはない。柄は天然の櫟の木で、使い込まれてかなりすり減っており、赤い染みがたくさんある。

「それでヤツを殺したんだ。だから持ってくるしかなかった。指紋がね」

「じゃあ本当なのね、話してくれたことは」と彼女はナイフをきわめて慎重に降ろした。

「すべて」

「さっきのブランデー、やっぱりもらうわね」

彼はクラレットグラスを両方満たし、二人は長々と沈黙考しつつそれを飲んだ。するとコニャックが彼の気分を浮き立たせたらしい。「元気出せよ、愛しい人。ぼくはこの事態を爽快に乗り切ってみせるよ。まあ見ててごらん」とニヤリとしてみせた。

「あたしだけじゃなく、いっしょに見ましょうよ。二人で乗り切るの」と彼女は誠意をこめて言った。

「ありがとう。即座のまぬけな忠誠。まったくもってチタニア人そのものだねかわいちゃん」

デミは笑わずにはいられなかった。「まったくもう、ウィンター！棺桶に入っても冗談

ばっかり。とんでもないことばかりが起こる人ね。なぜかしら」

彼は二人のグラスを再び満たした。「さあねえ。その気がなくてもこっちから招き入れるのかも。結局のところ、きみだってぼくに起きたとんでもないことだし、ぼくから招き入れたことはないと言えよ」

彼女はコニャックを飲み干して宣言した。「告白する」と言いつつ聖ジャンヌ・ダルクのような姿になりはじめた。「まったく偶然なんかじゃないのよ。あなたが欲しいと気がついたとき、こっちからそう仕掛けたの。あなたのすべてを調べ、あなたのことを知ってる人と話をして、何日もかけてあなたの書いたものすべてに目を通した……あなたに逃げ道はなかったのよ。恨まないでね」

「後光が見えてきてるぜ」と彼はつぶやいた。

デミはまたグラスにコニャックを注いだ。「なぜ女がいるなんて言ったの？ もう何百人もモノにしてるでしょうに」と問い詰める。

「そんなにないよ」

「何人？」

「ろくでもない質問をするなあ。デミは何の略？ デーモン？」

「いえいえいえいえいえいえ。憲法修正第五条」（訳注：自分に不利な証言を強いられない）

「おいデミ……」

「絶対いや」

「給与部に電話したら一巻の終わりだろうに」

「やめてよ！」

「もうきみは逃げられない」

「バカにしたりしない？」

「修正第2条」

「何それ」

「武器を持つ権利」

「えーと……南部育ちだって話したでしょう。典型的な立派なバージニア一家。だからあたしは典型的な立派なヴァージニア娘で……」と、ゴクリとツバをのむ。「だ、だから名前も典型的な立派なヴァージニア名前なの」

「して、それは？」

「デミユア」（お上品）と彼女はささやいた。

「何と！」彼は爆笑しはじめた。

彼女は尊大に答えた「あちきのフルネームはですね、だんなさん、デミユア・レカミエ・ジェルーでございますのよ、そしてあんたらみんな軽蔑してやる」

「レカミエってのは？」彼はやっとの思いで尋ねた。

「マダム・レカミエをママが崇拜してたの」

「なるほど。さて聞いてくれ、わがヤクづけ妖精よ、きみはぼくがカサノヴァで、言いなりになる女軍団を従えてるといふガキじみた考えを持ってるね。そんなのは、ぼくだろうとどんな男だろうと、まったくあり得ない。いつも主導権は女にあり、女が決断をするんだ」

「つまりあたしのほうが誘惑したってことね。恨まれるのはわかってた」

「当然だろうに。さあいまやぼくをチタニア人の意のままにして、それでどうする？」

「会議室であたしが迫ったとき、女性を必要としてると言った理由をまだ知りたいのよ」

彼はながい間をおいて、それから言った。「言わずもがなだろう？ ぼくはいつも、何があっても元気いっぱい陽気ってわけじゃないんだぜ。『魚雷なんか知るか、全速前進』『好きに打て、グリドレー』。冷静さを失って、頭に血がのぼって混乱してこわくなることもあるんだ、いま見たいに。するとあらゆる本能が、慰めと支えのために女性に向かわせようとするんだ」

「シューッ」

「何をシューシュー言ってる？」

「あたしがあなたの母親像だからよ。二重の近親相姦ね」と彼女は嬉々として言った。

「きみたち南部の連中はみんな、顔癩が大好きだなあ。それともチタニア人の部分のせいか」

「あら純粹でしたのよ、マオリ族に飽食して墮落させられるまでは」

「ぼくの血族ラインを盗むとは何たるやつだ」

彼女はグラスをしっかりと置いた。「今何時？」

「四時くらい」

「着替えないと」

「何を慌てて？ どこ行くの？」

「家よ、バカね」と彼女はソファから立ち上がった。「オフィスでのゴシップ阻止に着替えないと。ただでさえ噂がとんでもないことになるし。それにネコのエサもやらないと」

「ネコ！ きみのような立派なヴァージニア娘がネコなんか身に捧げてるとは！」

「特別なのよ。こちらの目の前に見える点を追いかけるの。超心理ネコで大好きなのよ」

「なんとまあ。もちろん送ってくよ」



「ありがと。あなたのほうの問題については、**あたしたち**どうしましょう？」

「冷静になって次の動きを待つ」

「なにか危険にさらされたりしてる？」彼女は心配そうに尋ねた。

「いや、別に」と彼女は愛を込めて見上げ、抱き寄せると腹に鼻面を埋めた。

「ずるい」と彼女は笑った。「くすぐらないでよ。立って、星うんこさん。着替えましょう」

「それ、嫌がらせで言った？」

「そうよ、男らしさをもう奪ったから、あんたなんかには用はないわ。それがチタニア流」



「あたし O 脚なの」と彼女は着替え室から言ったが、別にそれを恥じているようではなかった。「あなたっていつもこんなに情熱的ななの？」

「最初るときだけだよ。ひけらかし。男ってみんなそうだよ」

「いつも最初るときになるようにするわね」と言いつつ顔をのぞかせる。「それと、なぜ疲れてないの？」

「さあね。きみのチタニア人エッセンスを盗んだのかも。人呼んで吸血鬼ローグ」

「いったいぜんたい、なぜ、そんなまばたきを？」

「きみのサイキョットなるものが追いかけられるよう、目の前に斑点を出そうとしてるんだ」彼はそのペットを愛玩した。土星の雑種で、シャムとコアラの奇妙な混血だ。「確かにすごい美ネコだね。自分の斑点も追いかけるの？」

「そんなの当然でしょう。ネコはみんなそうよ。着替えはすんだから、行きましょう」

「オフィスまで送ろう」

「角までにして。お願い。朝一でエントランスでいっしょのところを見られたら……で、連絡はあたしから？あなたから？」

「そっちから。それと頼むからいつものヴァージニアの声を使ってくれ。マタハリみたいに飛びかかってこないで」

「セ・マグニフィーク」と彼女は脈打つようなスパイじみた甘い口調で答えた「メ・セ・ネスパ・ラ・ゲール。さあいらっしゃい、星野郎さん」

「きみの秘密の隷属から出して暮れさえしたら、秘密侵略計画だってお教えしますぜ」と彼は泣き言を言うのだった。

## 4. 戴冠

王の門ではコケが灰色にのび

王は来たらず、死んだと言われた

そしてある日その長男を

父にかわって奴隷とした

——ヘレン・ハント・ジャクソン

デミに（ゴシップに見つからないように）キスしてから、ウィンターはボザール・ロタンダのほうに歩いていった。しゃれたニューヨーク、ジャングル母での実にすばらしい朝で、WASP 世界すべてが彼自身の高揚ぶりを反映しているようだった。店頭ウィンドウには時代錯誤なクリスマスのディスプレイ：!!火星ではクリスマス!!大切なあの人に贈り物を!!ポルノ・バレンタインの飾り付けが、支援を求めるスト中の売春婦たちにより掲示されている。白いリネンが窓辺からぶら下げられ、ガニメデのドーム建設を求めるクラクション運動への共感を示している。

ちょうど何やら広告パレードがロタンダの主要放射路をやってきた。鼓笛隊に、ドラムと同じくらいバトントワラーがいて、大騒ぎをしており、それが若いフード姿のストリートギャング「タイタン・デュークス」の騒ぎでさらに増幅。デュークスはジャケットにネオンが輝き、バトントワラーたちへ下卑たナンパをしかけつつ、飛び跳ねて騒いで見せる。それに続いて、売らんがなの P+L+A+Z+M+I+L+K 宣伝フロートがやってきて、そこではホルスタイン 8 頭(プラスチック)を農場娘 8 人(生物)が乳搾りしている。

シナジストは突如歩みを止めた。まるでまだ発明もされていない謎のレーザー銃で麻痺させられたかのような感覚があった。「8！」と叫んでふりむき、パレードの先頭に追いついて、ドラマーを数えた。「うん 12！」そしてタイタン・デュークス、笛、バトントワラーたちを数えた。「11, 10, 9, なんとジグジーズ！」

再びロタンダへの歩みを債買いしたが、あらゆるシナジー的知覚がチクチクして探究している。そのパターンをさらに見つけた。あるアーケードの入り口にあるオモチャ屋だ。そのウィンドウには壮大な人形の家が飾られていた。実物大のミニチュア公園の中に置かれている。小さな池には白鳥が7羽浮かんでいる。ウィンターはうなずいてアーケードに入った。陳列ケースの細かい氷の上にガンが6羽並んだグルメショップを見つけて角を曲がったときにも、まったく驚きはしなかった。

「ギグ。デュークスは伯爵のことだから貴族だ。ガンはがちょうだ<sup>4</sup>。次はなんだ？」

ロタンダに戻るなどという考えは完全に消えていた。彼は探索し、感じ、探し、そしてようやく石段のふもとに、花の展示会のポスターを見つけた。そこには様式化された黄金のケシの花が描かれ、花びらが4つの輪、そして花心がもう1つの輪となっていた。

「はいはい、5つの金の輪ね」

その石段を登り、別のアーケードにやってきて、小犬がたくさんいるウィンドウを持つペットショップの前を通り過ぎて進もうとして、立ち止まって首を振った。「星のひらめきよ！」とつぶやいて引き返し、ペットショップに戻った。中をのぞいた。やっと見えた。いちばん奥に大きなかごがある。そこに九官鳥が4羽。中に入ってよく見た。

「こいつら、しゃべりますか？」と店主に尋ねる。

「ひっきりなしですよ。ただ困ったことに、奴隷みたいなガラ訛り英語でわめくんです。だからこんなに安いわけで」

「なるほど。どうも」

ウィンターは裏口から出て、フランスめんどりはどんな具合に出てくるのかと思案した。それを引き受けたのは、レストラン店頭の黒板だった。そこにチョークでこうある。

#### 本日のメニュー

Poulet Gras Poularde

Poulet de l'Annee

Vieille Poule Coq

w. Sauce Indienne

or Sauce Paprika

---

<sup>4</sup> 訳注：これは英語圏の「On the first day of Xmas」の歌に基づくネタ。この歌では、クリスマスの12日目に恋人が「12人の踊る娘、11人の跳ねる貴族、10人の太鼓叩き、9人の笛吹き、8人の乳搾り娘、7羽の泳ぐ白鳥、6羽の横たわるがちょう、5つの金の輪、4羽の歌う鳥、3羽のフランスめんどり、2羽のハト、そして梨(ペア)の木のパートリッジ(うずら)が1羽」をくれると歌われる。ローグはそれを次々に見つけている。

or Sauce Estragon

ブルゴーニュ、ボルドー、コート・デュ・ローヌ

ウィンターが、ハト二羽を探し始める間もなく、そこから若い淑女二人が出てきた。最新のトレンドな高級ファッションに身を包んでおり、当然巨大なウジェニー風の帽子もかぶっていた。そのどちらのツバにも、小さい赤い宝石のシャコがついている。

「ナテューリッヒ」とウィンターはつぶやいた。「シギか。ハトの一種でもあるな。それが2羽」

その女子二人を少し距離をおいて尾行しつつ、いまや何かの木を探してキョロキョロ見回した。巨大メトロポのそのあたりには、木はない。だが女子たちは巨大なオフィスビルに入っていった。そのカテドラルじみた入り口の上にはイギリスのゴシック文字でこう書かれている。「ペア・バンク・アルザシエン・ビル」。ウィンターはクスクス笑い出した。このパターンはふざけた宝探しになりつつあり、その終点でどんなばかげた賞品が待っているのかと思案し始めたのだ。

そこを入り、すぐにテナント一覧のところにでかけて、時間を一切無駄にすることなく「P」を見て、「オデッサ・パトリッジ——3030」というのを見ると、急行エレベータで30階に上がり、するとそこに見事な木のパネルのドアがあって「パトリッジ」と名札が出ている。ウィンターはそこに入った。

すると、交響楽団の全員が、演奏家の登場を待っているかのように見えるところに入り込んだ。あらゆる楽器がまわりを囲んでいる。弦楽器、金管、木管、打楽器。魅力的な若い女性が、もはやウジェニー帽をぬいで、ウィンターに近づいて歓迎した。「おはようございます、ウィンターさん。約束通りいらしてくれてありがとうございます。スピネットの検査の用意はできていますよ。フランス！」

「スピネット？」ウィンターは弱々しく繰り返した。

「まあ実際はバージナルですが。ほら、ひざにのせるスピネットで脚のないやつ。フランス、ウィンターさんをスタジオにお連れして」

二人目の魅力的な女性が、これまた帽子なしで登場、交響楽団の間をウィンターを案内した。「コンサート用のピッチまで上げるのに苦労したんです。439A にあまりこだわらないでいただけるとありがたいんですけど。435本の弦が精一杯で。こちらです、ウィンターさん」彼女はスタジオのドアを開き、困惑したウィンターを優しく中へと押し込んだ。

「おはようございます、Rオグ王」と私。

たぶん耳に入らなかったと思った。そのときはこっちを見つめるだけだった。「でもあ

あなたは、あのヤエル博士のトークインにいらした素敵な女性じゃないですか。ディーヴァ女性。あなたがブリュンヒルデを歌うべきだと思ったのに」

「初耳ですね」と私。「オデッサ・パトリッジです。音楽業界にはいますが歌手じゃありません」

彼はすばやくあたりを見回した。分厚い防音壁、二重ガラスの窓、積み上がった楽譜や原稿、金張りのハプシコード、バージナル、コンサート用のグランドピアノ。そこにはジェイ・ヤエルが向かっていて、人畜無害そうにニコリしている。

「そしてヤエル博士は？」

「おはよう、息子よ」

「もうおなかいっぱい」

「いやいや坊主。すわんなさい。落ち込むのはいつも一瞬だけじゃないか。立ち直るよ」  
ウィンターは後ずさりしていすにすわり、首を振った。それから深く息を吸い込むと唇を硬く閉ざし、こちらをにらみつけた。「で、これが宝探し終点の賞品？」

「ほら、言った通りだろう。五秒とかからなかったぞ、ログ」とヤエルが叫ぶ。

「でもなんでこんな、バカげたログなぞなぞを？」

「超極秘事項を伝えねばならなかったんですよ」と私は告げた。

「なら、電話でもすれば？」

「『極秘』と言ったでしょう。電話は盗聴される。メッセージも。伝言も。問題は、誰にも気がつかれずにどうやってここに来てもらうか、ということでした。だからあなたのパターン感覚に頼ったんですよ。あれはユニークで、他のだれにもないものですから」

「ブリュンヒルデ様、お許しを。でも X 指定のスパイ映画かなんかみたいなんですが」

「昨日は丸一夜かけて、あなたが——他の用事にかまけてる間に『クリスマスの十二日』を仕込んだんですよ」

「まあそうでしょうねえ、お名前がパトリッジなら。でもカッリカクという名前だったら？」

「このパターンを読み取れるのはあなただけだとわかっていたし、尾行されても道筋があまりに異様だから、まちがいなく振り払えたでしょう」

「尾行？ ああもちろん。人呼んで、ログ・モリアーティですからね」とウィンターは笑った。「シャーロック・ホームズさん、お呼びですよー」

「まじめな話なんだぞ、息子よ」とヤエル。

「なぜ R オグ『王』と言ったんです？」ウィンターは私を問い詰めた。

「なんと聡明な」と私は本気で感嘆した。「というのもそれが核心で、あなたはすでに」

それをシナジったわけだ。テ・ウインタの魂はいまや、あなたの左眼にいるのです」

「いつ？なぜ？」雷のような追求。

「一週間前。狩りでの事故。キバで宇宙服が破れた。実際、嫌気性マンモスに一人で立ち向かうにはすでにお年を召しすぎていたんです」

ウィンターは大きく息を吸った。「自分の力を証明しなければいけなかったんだ。年に一度。マオリ族の忠誠を得るためのの伝統なんです」

「そしていまや、あなたもですよ。しっかり聞いて。途中でザグリこまないで。ギグ？」彼はうなずいた。

「あなたの知らないうちに、私たちはあなたを長年利用してきました。実に役に立ってくれましたよ。あなたは監視され、尾行されていたんです。コード ID は『ポインター』です」そしてペルト作戦や彼がそこで果たした無意識の役割についても説明した。彼は割り込むことなく熱心に耳を傾けた。頭の回転がはやく、理解力も高く、「我々」というのがだれか、とといったわかりきった質問を浴びせたりもしない。だが一度だけ、ヤエルに視線を投げかけ、ヤエルは肩をすくめて応えた。

「いよいよ核心。あのボローニヤ庭園での兵士がスライスナイフを持っていた理由は2つ。まずは当然、殺すため。でももう一つはあなたのほっぺたをガニメデに持ち帰るため」

「おお」

「そう。トリトンのジंक娘やその組織とはまったく関係なし。あなたを単なる R オグ・ウインタ、王の継承者としてつけまわしていただけ」

「なんと！」

「まさになんと。あなたが邪魔だと思ってる、小さくタフなテロ集団がいる。あなたはマオリ族じゃない。ドーム育ちでもない。ホンク墮落してる。軟弱。信用できない。その他その他。やつらの答？あなたを一掃。そしていまその一掃作業中。この殺し屋たちは訓練も受けていて賢いし、だからここに連れてくるのも『十二日』陰謀に頼らなきゃならなかったわけ」

「そいつら、時間を無駄にしてるだけです。ぼくはそんな王様稼業なんかにはまるで興味はないんだから」とウィンター。

「やつらにはそんなことはどうでもいいの。かわりにだれを王位につけるにしても、あなたは常に、そこにある危険であり続ける。ドームの大半は永遠にあなたのほっぺたに忠義を捧げる。やつらの唯一の答は、殺しの賞品としてあなたのほっぺたを持って帰ること」

「正式に王位を譲る」

「やつらはそれじゃ納得しないわ。譲位したままでいるとは信用しないでしょう。あな

たが消えるまで掃討を続ける」

「ジグジーゼ！ こんなすてきでおしとやかなボクちゃんに、何てろくでもないインチキなんだ。しかもいまやデミとぼくが——」そこで彼は口を止めた。そして「でもこんなところまで紙をおいかけさせたのは、ガニメデからの凶報をテラに伝えるためだけじゃないんでしょう。他にも何か魂胆ありますね。何です？」

「ガニメデに行って王様になって」

「またまた人をジグって」

「ヤエルも同行する」

「医者に関係があるんです？」

「いままで黙っていたが、テ・ウインタはきみの育成教育の費用を出していたんだ。私たちのやり方になじみがある王が率いれば、マオリにも有利だと考えていたんだよ」

「はいはい、デミのチタニア人ご母堂と同じですな」とウインタはつぶやいた。

「だからおまえがこの危機を乗り越えさせないと、テへの顔が立たない。どうしてもやらねば。そうでないと、これまでの育成がすべて無駄になる」とヤエルは続けた。

「すでに無駄ですよ。ぼくは王様タイプじゃないし、今後もないでしょう」

「でも命は助かります。やつらだって、正式に戴冠すればあなたに手は出さないでしょう。そうなったらやつらも大衆に完全にそっぽを向けられますから」

「何をしたいんですか、オデッサ。ぼくを守ってくれる気ですか？ こうして警告も受けだし、自分で自衛できますよ。神もご存じの通り、ヴェヌッチでそれは証明してみせた」

「あなたなんか守る気はありませんよ。あなたがやってくれてる仕事を守りたいんです。殺しを避けてビクビクして暮らすようなら、あなたはもう使い物にならない。あなたの認識できるパターンは、潜在的な鉄砲玉だけになっちゃいますから」

彼はうなり声をたてた。

「でも王位につけば、安全になって、通常営業に戻り、いつもの状態が続く」私はそれが彼の腹に落ちるのを待った。そして付け加えた。「そしてあなたの彼女も安全になる」

彼はこちらをにらみつけた。「このクソ女。まじりっけなしの、天然有機クソ女。人をねじり上げるやり方は心得てますね」

「それが仕事なもので」

「だろうよ。音楽みたいに、『恐怖の音楽』。留守中のデミを保護してくれないと」

「それは任せて」

「ギグ。いつ？」

それを聞いて、一層彼が気に入った。いったん決断したら、面倒なしにすぐ行動に移る。

「今日、昼のジェット。ヤエルがすべて手配済」

「それほどヴィグってわけ？」

「最高で最安全」

「そしてぼくが言うこときくのもわかってた、と。デミには説明しといてくれますね？」

「彼女が知っておくほうが身のためな話はすべて。任せなさい」

「信じるしかない。アヴァンティ、ドットーレ(ドクトル、行こう!)」ウィンターは立ち上がりすぐに動き出した。「宝石店強盗をしたマンモスの話はしましたっけ？」



メタパワーの助けと快適さで、ジェット旅行はものの数日数週間ですむ。おかげでジャップ=チンクどもはさらに強気に出ている。孤立した辺境星を、言い争う惑星や衛星の密接なコミュニティに仕立てるためには、太陽系はその代償を支払わざるを得ない。そのおかげでメタ・マフィアは密輸の善玉になってしまっている(低く見積もっても、メタの分析と合成の研究には 5,271,009 時間ほどが費やされている。まったくろくでもない。が、それを非難する気はない。古代人は賢者の石を求めて同じくらい時間を無駄にしている)。

ウィンターとヤエルは、マオリドームの主エアロックに、テラフォイル(ガニメデだからガニフォイルと言うべきか?)でやってきた。直射日光がくる三日のうち二日目で、かなり明るく快適ではあった。ドームの内部が何かに似ているとすれば、それはラパ・ヌイ、つまり「大ラパ」またの名をイースター諸島だ。

もちろん違いはある。三角形よりは丸い。茅葺きの小屋はない。小さな家屋は石膏板でできている。巨大な石像もない。かわりに各家屋群の前には巨大な彫刻による部族のトーテムがある(その左眼には雲母がはめこまれている)。すべて嬉々として原始的だが、マオリ族が集まって運動、競技、口論、ゴシップ、儀式を開く<sup>ウムゾー・ヴァイター</sup>等々をする中央集落は、超近代的なドームの維持システムを擁する。そこは水星のジョーンズドームの惨劇以来、認定技術者以外の立ち入りはすべてデスシティ的タブーとなっている。

ヤエルは行きのジェットで大活躍だった。ウィンターをセピア染料で染めてマオリの茶色い肌に仕立て、ウィンターの猛反対にも耳を貸さなかった(その染料草はインポをもたらずと信じられている)。「広報は重要だよ、息子や。インポ説はまったく確認されていないし、どのみち染料は彼女のところに帰るころにははげてるから」

「ぼくもその頃には心配でハゲそうです」

「おまえはマンモスのことだけ心配してればよろし」



二人はエアロックを通過してドームに入り、大騒動を覚悟していた——ヤエルは自分たちの到着を前もってレーザー通達してあった——が、待っていたのは荘厳な儀式だった。十二部族の酋長たちが、羽と真珠と首輪と腕輪と足首輪を身につけて半円になっている。片膝をつき、進み出て、おごそかにウィンターを裸にむいた。

「オパロ、おまえか？」とウィンターはおずおずと言った。半分はポリネシア語、半分は英語だ。「もうずいぶん留守にしてたから。トゥバイか？ 昔は相撲をとったよな。いつもぼくが負けてた。ワイフ？ 二人できみんとこのトーテムに登ろうとしてぶちのめされたよな？ テアピ？ チンチャ？」だれも答えず。

ウィンターのこれまでの生涯で戴冠式などなかったから、何が起こるか見当もつかなかったが、予想がすべて外れていたのがわかった。熱狂する群集もなし、歓声もなし、太鼓も歌もなし。かわりに、すっぱだかで、無人の集落の中を、荘厳に沈黙したまま案内され、そして想い出深いテ・ウインタの王宮に一人でうやうやしく残されたのだった。

マオリの基準からすれば巨大なところだ。十室もある。そのすべていまや空っぽだ。家のすべてがはぎとられていた。ただの四つの壁だけ。ウィンターは大広間の真ん中にしゃがんだ。これはマオリとして精一杯の玉座室だった。そのままウィンターは待ち続けた。何もなかった。それでも待ち、待ち、待った。

「博士も同じ目にあってるのかな」と思案しつつ、かれは床に転がった。

(ヤエルは大歓待を受けていた。みんな彼については良い思い出ばかり立ったのだ)。

「どうもぼくは、重々しく瞑想しているべきなんだろうな。自分が直面するすんげえ責任のこととか。自分をご先祖様やマオリの人々に何を負っているかとか。だから名誉にかけて、神と国への責務を果たしてボーイスカウトの規則に則ると誓います……

そこへ彼の宝石店に男がある朝やってきて、溜まった書類作業を終えようとした。ちょうど店についたとき、トラックがバックして店につけている。その後部が開いて、毛むくじゃらマンモスが出てきて店のウィンドウの前にくると、それをキバで叩き割り、鼻で宝石をすべてすくいあげた。それからトランクに戻り、そのトラックは走り去った……」

何かがこすれ、かち合う音がした。ウィンターがその音のほうを見ると、茶色い少女が部屋に忍び込んでいた。典型的な波打つ黒髪だ——マオリ族の髪はストレートか波打っており、決してチリチリにはならない——魅力的なポリネシアの顔つきと思春期の肉体。それがわかったのは、腰のまわりにかち合う銀のホタテ貝殻の連鎖をまいている以外、何も身につけていなかったからだ。

「こりゃいったい何だ？ 儀式の一環？ 将来の寵姫にして女王？ それなら自分で選びたいなあ」

少女はまったく時間を無駄にしなかった。一瞬でウィンターにまとわりつき、だまって身を絡めて煽りたて、寵姫役のオーディションをすさまじく頑張っているように思えたが、そこで膝の裏に最初の切り傷を感じた。訓練されたウィンターの反射神経は、稲妻同然だった。すぐに膝を彼女の股間に蹴り入れ、剃刀のように鋭いホタテ貝殻を彼女の手からたたき落とした。娘が苦悶で身体を二つに折ると、彼はつぶやいた。「アキレス腱を狙うわけかい？ オデッサの言う通りだ。このネコどもは半端じゃないな。マンモス狩りは、アキレス腱をやられていたら、本当にひでえお楽しみになってただろう」

ウィンターは、無力な娘を抱え上げ、そのケツに思いっきり噛みついて血を流させるといふ満足を得てから、ゴミのように玄関から放り出した。それからドアを叩きつけて閉め、なんでもこいと知らしめてから、またもや玉座室の床にすわって、他に何か動きがないか警戒した。いまの攻撃と反応で、未来の王として受けた訓練による残虐さへと自分が立ち戻っているのを、彼はまだ認識していなかった。

半時間もの静寂の後で、彼はいつもの内的対話へと立ち戻った。「それで、あんなひどい邪魔が入る前に言っていた話だけれど、その男はトラックが走り去るのを見て、まったくあっけにとられ、やっと我にかえて警察を呼んだんだ。警察がきて、事情を話すと、すごく専門的。『何か手がかりが必要です。ナンバープレートは見ましたか？』『いや、毛むくじゃらのゾウだけしか目に入らなかった』『どんなトラックでした？』『さあ。とにかくあのマンモスしか目に入らなかった』『わかりました。どんなマンモスでした？』『どんなって、種類があるんですか？』『いやそりゃありますよ。アジアマンモスは耳がひらひらででかい。アメリカマンモスは耳が小さくて硬い。そいつはどんな耳でしたか？』

その質問と共に彼はねてしまった。

騒がしくて目が覚めた。はっと立ち上がり、宮廷のドアを開けて外を見た。集落はマオリだらけだった。叫び、歌い、足を踏みならし、太鼓を叩いている。十二人の部族長が進み出て、テ・ウインタの180センチの王家の盾と王家の槍を持ってきた。どちらもウィンターにはすぐにわかった。

「耳！ 耳だって！ そんなのわかるはずないでしょう！ あのくそマンモスは頭からマスクをかぶってたんですから！」とウィンターはつぶやいた。

それが太陽系英語の最後の手がかりだった。いまや彼は完全に戻り、考えも行動もマオリになった。ドアの外に、裸で雄々しく出て、代表たちがやってくると、それぞれの酋長の心臓に触れ、公式の歓迎をつぶやいた。彼らは盾を肩にかつぎ、そしてウィンターはみんながその上に抱え上げるのを許し、立ちはだかって全員の視線を集めた。

集落を丸々三周運ばれたが、その興奮は耳をつんざくようだった。神官——というかシ

チャーマン——が塗油のためにあらわれた。油壺を持っている。長く埋もれていた記憶が揺らぎ、ウィンターはそれが養父の死体から取られた脂肪だとわかった。彼はその油を受けた。頭のとっぺん、目、太陽バーストの刺青入り頬、胸、手のひら、股間。

「七戦カヌーの王がこれで戴冠せり」とチャーマンは叫んだ。「ハワイキ、アパイ、エヴァヴァ、マオリの王。アールオグ・ウインタ、他界し最後の王の息子にして後継者」

テ・ウインタの冠鉢巻き、幅の広い銀糸と黒玉の帯がログの頭に巻かれた。

「この方にして他になし！」とチャーマンが呼びかける。

だれも挑む者はない。

酋長たちは前に進み、テ・ウインタの王家の戦闘槍をログの手に笏のように持たせ、そして大騒ぎが持ち上がった。いまや彼は外に出てマンモスを一人で倒し、王としての統治権を証明せねばならないのだ。



ガニメデマンモスは、またもや宇宙的なエキセントリックさの例で（デミ・ジェルーはそれを宇宙的継母<sup>マザー</sup>と呼びたがる）、やはり人間が支援し補うことで生まれたものだ。

太陽系で最も気に入られた食べ物の一つ（変態宗教宗派は除く）はブタ肉だ。さて豚は素晴らしい連中だ。賢く活発で、すばらしく適応力がある。実はぼんやり横たわって臭いままにいるのが嫌いなのだ。そんなことをしたがるのは、ゴミを喰い漁り、泥だらけの仕切りの中で太る連中だけだ。野原を楽しげにかけまわる、清潔で活発なメスブタが、遊び好きな子ぶたたちに取り巻かれている様子を見た人はみんな知っていることだ。不幸なことに、ブタ肉がその重さのために飼育されると、その巨体を支えるために泥の中で漂うしかなく、ブウブウ言ってすさまじい臭さとなる。みんなが見る豚はそれだ。

だがドームは動物の臭気には対応できない（人間への対応だけでも苦労しているのだ）ので、飼育業者や肉屋たちは、遺伝名人たちに訴え、ほとんど空気がない殺人的なガニメデのドーム街環境の過去の中でも生き延びられる、ブタ品種をつくり出すよう頼んだ。

遺伝子工学者たちはその奇妙な課題に大喜びで、最高の候補としてブタの中でも最も古い品種のタムワースを選んだ。タムワースは頑強で、活発で多産であり、イノシシときわめて近い。頭、身体、脚は長く、あばらは深く平らだ。この体つきはいろいろ改良の余地がある。

遺伝屋たちはタムワースをバックブリーディングした。つまり、そのブタの発達を選択的繁殖により、野生の起源へと戻しつつ、嫌気的な条件にも耐性があるよう進化させ、酸

素など各種のニーズを補えるようにしたのだ。その結果がガニメデ「アストロイノシシ」で、飼育費用は最低限だが、太陽系にすばらしい価格で販売された。その広告は以下の通り。

**宴会を台無しにしないこと！**  
**アストロイノシシで主催者も英雄扱い！**

さらに

**脂肪なし**

**塩なし**

**コレステロールもなし**

**ブタで長く生きよう**

**アストロイノシシで派手に生きよう**

たまにブタが囲いから脱走して裂溝へと向かったが、飼育者は肩をすくめるだけだった。追いかけるほどの価値はないし、どのみち死ぬだろうと思ったのだ。だがここで宇宙陰謀が一枚噛んだ。原始的な魚が、引き潮で浜辺に取り残されつつ、それでもなぜか生き延びたように、凍った地面を地下のコケや地衣類を求めて掘り起こしつつ、この珍しい独立生命体たちは生き残ったのだった。貧しい生き方をしつつもお互いに出会い、交合し、多くは死んだが、最も適応力あるものは、ガニメデ人がマンモスと呼ぶ奇妙な種へと進化したのだった。

実のところ、それはゾウというより巨大イノシシだった。肩まで二メートル近くの高さだが、本物のマンモスは4メートルあった。その耳はゾウのようになって、できる限りの日光を吸収する。毛むくじゃらのマンモスのように毛深い。上に曲がったキバは、凍った土の中で根を掘るために巨大になっている。

もとのタムワース種は雑食性で、ガニメデマンモスも同様だった。さらに生存のために必死だったこのマンモスは、人肉食もするようになった。気質面では完全に猪だ。短気、獰猛、攻撃的。彼らにかかると生存は、食うか食われるかの死闘となる。

ウィンターが見つけて殺さねばならないのは、半トンもあるそういう生物なのだった。「ぼくはブタ肉だって好きじゃないのに」と彼は思った。

真空スーツ、ヘルメット、空気タンクを身につけ、長い刃の狩猟用槍を持ち、スライス

ナイフをベルトに刺して、獲物の心臓を持ち帰れるようにした。持ち帰った心臓はその共感魔法のために喰うのだ。マオリは、支配者がマンモスの野生の獰猛さを身につけるよう求めており、だから年に一度それを殺すのが伝統となっていた。

「そして、そこがぼくにとってバカげているところだよ。ぼくは弱虫太陽系人間なんだから」とウィンターは主張した。だがそれもマオリ語での独白だった。

地面は月面上でギザギザだった。マントル岩、頁岩、スレート、土着の噴出、黒曜石——ガニメデが火山性だった頃のガラスめいたおみやげ——ひびわれた裂け目が、鉋物嫌気性キノコの粘つく白い残滓を見せている。これはマンモスが自分たち自身に加えて食べる食物の一つなのだ（生命に千分の一の可能性を与えたら、それをつかんで決して離そうとはしない）。

ドームから出て1時間、ウィンターは初のマンモスの痕跡に出くわした。円錐状の糞となった排泄物だ。マンモスは絶えず食べては排泄している。ウィンターはその痕を慎重にたどり、それが他のマンモスの痕跡と合流するのを見て、そして最後に糞だらけの浅いクレーターにたどりついた。

彼はうめいた。「マンモス集落か」

そこで狩人の意識が目覚めた。「テ・ウインタのまちがい。みんなのやるまちがい。それで殺される。マンモスの後を追いかけてりするな。向こうの土俵で戦うことになる。向こうにこちらを追わせ、自分の土俵で戦え。そうとも」

沈みゆくスポットライトめいた太陽を一瞥し、木星の巨大な幹が地平線から出ているのを見た。三日にわたる夜が始まるまであと一時間。この夜行性に近い生き物たちがエサを探しに出てくるには十分な時間だ。

彼は後ずさりして、探し、高さ3メートルの縁を持つ小クレーターを見つけた。たぶん隕石の痕だろう。クレーター孔はひびわれ、荒れ果てた片岩だった。彼はうなずき、通り過ぎた黒曜石の露出に飛び移り、真空スーツに穴を開けないよう気をつけながら、長いガラスの破片を集めた。金属の靴底で黒曜石を蹴飛ばし、さらに長い石刃を砕き落とした。それを高さ3メートルの縁に近いクレーター床のギザギザのひび割れに植えこんだ。苦行層を待つ釘のベッドだ。

彼は直立し、激しく呼吸するとツバを飲み込んで、付属の尿袋を見たそうとした。肩越しに手を伸ばし、タンクのバルブを全開にして、真空スーツをサンタクロースじみてふくれあがらせた。前屈みになり、テープ留めしたアナルフラップから手をつっこんで、尿袋を脚の間から取り出した。そのフラップを再び封印して空気圧を調整する頃には、尿はすでに凍っていた。

ウィンターは高さ3メートルのクレーター縁を越えて、マンモス集落へと歩き戻りつつ、尿のかけらをスライスナイフで欠いて落としていった。集落にはまだマンモスはいなかったが、日は暮れ、星が輝き、土星が空いっぱいに広がり、まるで欠けた電球のようで、その輪は肉眼でははっきり見分けられなかった。ウィンターは尿の残りをばらまき、それを踏みつけて、クレーター縁の外側に戻る航跡をもっと作った。そこで槍とナイフを持って待ち構えた。

立つしかなかった。さっき少し曝したことで、尻が凍傷で痛くなっていたのだ。

待ち続けた。異生物の尿という縄張りへの挑戦を信じるしかなかった。

槍の柄を確かめた。ガラス繊維で、棒高跳びの棒に匹敵する強さと復元力を持つ。

待った。

手袋を破らない丸石の小さな山を集めた。

待った。

待った。

ついに雄イノシシがやってきた。尿の挑戦を黙って嗅ぎ、氷めいた鉄のような毛を逆立て、血走ったヤニだらけの目をギョロつかせつつ、はためく耳をふるわせ、巨大なキバが星明かりにきらめく、半トンの恐ろしげなマンモス。ウィンターは石を取って思いっきり投げつけたが、外した。さらに三つ投げてやっと獣に当てて、その怒りの注目を捕らえた。ウィンターは跳び上がり、手を振り、また石を投げ、突進し、槍を振って、また駆け戻り、さらに石を投げると、今度はそれが鼻面に真正面から当たった。

獣はやっと、その怒りのできごとを頭の中で結びつけ、尻尾を掲げ、頭を下げて突進してきた。キバで股間から首まで切り裂こうとしている。ウィンターは全力で自分の神経を押さえ、その場に凍り付いて、敵のスピードを見極める闘牛士のように攻撃を観察した。ギリギリの最後の瞬間に、彼は背を向けて三步駆け出し、クレーターの縁を棒高跳びで越えて、ガラスの針のむしろのすぐ向こうに着地した。そして膝をついて振り向いた。マンモスは彼を追いかけ、縁を駆け上り、そしてガラスを植えたところに飛び込んだ。柔らかい腹を何十もの黒曜石片に貫かれて、苦悶して暴れ回っている。その血は、流れ出る端から凍結していった。

ウィンターは立ち上がり、槍を探したが、棒高跳びに使ったのでクレーター縁の外側に落ちているのだということ思い出した。自分が冒した危険に気がついて、ちょっと身震いした。あの獣がガラス片の上に落ちなかったら……！ とにかく、とどめを刺す必要はなかった。マンモスはものの数分で死ぬだろう。

彼はその荒々しい死を眺めていた。そのとき、その鋭い警戒心が飛んでくる石のかけら

を捕らえた。そちらを見る。雄イノシシの伴侶が、クレーターの縁を苦勞して越えつつあった。もっとゆっくりしたペースで後を追ってきたのだ。

雌ブタは内壁をすべり降り、最後に残ったガラス片に横から転がってそれを平らに潰し、そして立ち上がった。これまた半トンもの怒りの塊。ウィンターはみぞおちに思い蠢きを感じた。これは本当の正面对決、真の試練、しかも相手は最も恐るべき敵、雌ブタなのだ。

獣は突進してきた。先割れした蹄で、雄イノシシのひくつく死体を踏みじって跳ね飛ばす。その口は開かれ、岩をも砕く巨大なギザギザの歯をのぞかせている。ウィンターは半歩ずつ前進と後退を繰り返し、相手の突撃の勢いを見極めようとした。腕を高く掲げ、そのアゴが30センチのところに来た瞬間に卸してその重い耳をつかみ、クレタ島の牛ダンサーのような半前逆飛びで鼻面を跳び越えて、自分の身体を持ち上げると雌ブタの背中に飛び乗り、その分厚い毛をつかんだ。

雌ブタは軽い重力の中で跳ね上がり、身をゆすり、高く飛び上がった。ウィンターは両脚と片手でしっかりしがみつikitつ、もう片手でスライスナイフを抜いた。そして彼女ののどを切り裂いた。

彼は2匹の心臓を、テ・ウインタの刃に突き刺してマオリドームに持ち帰った。



大喜びの祝宴となった。ウィンターは2頭をも仕留めた史上初の王であり、これは栄光の前兆として歓迎された。彼はまさに二重の王 R オグなのであり、その証拠が火の上でローストされている二つの心臓なのだ。

太鼓が叩かれている。古典的なテラの2/4、3/4、4/4のリズムではなく、伝統的なマオリの様式だった。そこには規則的なビートはない。その区切り、ポーズ、コメントや展開を通じて物語を語るものだからだ。

娘や女性が踊っている。これまた構造化されたテラのステップではない。彼女たちも古代マオリのサーガを、象徴的な身ぶりで演じているのだ。勝った戦争、征服した敵、英雄たちの交合と強力な男児出産、そしてそれがいつの日かマオリをさらなる偉大な勝利へと導く物語だ。

料理もある。若いワニは、おそらくアフロドームから盗んできたものだろう。アナコンダ、5キロもあるカエル、輸入したワニ、ラバ、バーベキューしたマンモス。あの二頭の死体を、お仲間たちや親戚たちが食い荒らすに任せておく道理はない。そしてトルコドームからの阿片や大麻もあった。

その祝宴が混乱に陥る前の見事なタイミングで、シャーマンはウィンターを父親の盾に立たせ、戴冠した演台の上へと導いた。いまや二つのマンモス心臓がそこで焼かれている。これがクライマックスだ。

シャーマンはお辞儀をして大からおり、土を盛った演台を取り巻く部族酋長たちに加わった。ウィンターは焼き串をつかんだ。手にヤケドをしたが、自分の民の前でひるんだりはしなかった。そして最初の心臓を大きくかじり、こげる肉をこれまたためらわずに噛みしめ、そして飲み込んだ。煉獄のような大騒ぎ！そしてその儀式を二番目の心臓でも繰り返したが、今回は歓びの叫びが半ばで途絶えた。かれは自分の民を驚いて見回し、さらに怯えて演台から後ずさっているシャーマンと酋長たちを見つめた。

「どうした？」と呼びかけた。

シャーマンは口もきけずにローグの足下を指さすだけだった。

見下ろした。その台は、地面から出てくる小さな生き物だらけとなっていた。はっきりした形はない。灰色の毛深い塊で、あてどなく何かを探してうろついているようだった。

群集から怯えた声が叫んだ。「マンモスの魂！マンモスの魂。王の獲物の魂だ！」

ウィンターもひどく動揺したが、それを表に出すわけにはいかなかった。王が怯えて後ずさるなどありえない。その重たい沈黙の中で、彼は心臓を食べる儀式を繰り返し、焼き串を戻して、ふり返るとゆっくり誇り高く台座を下り、足下を這い回る謎を敢えて見下ろそうともしなかった。ヤエルは、見事な演じぶりだったと言い、王宮に戻ってからかれはローグを讃えた。

「ありがとう、ジェイ。いやあ、おっかなかった」

「私もだよ」

「死後の生とか信じてる？幽霊とか？怨霊とか？その手のオカルトを？」

「動物については絶対ないね」

「ぼくもだ。ならば足下を這いずってたあれは何なんだ？マンモスの魂じゃないぞ」

「確かめようか。一つ持ってる」とヤエル。

「なんだって？」

「王宮にもどりしな、その『魂』を一つつかんできたんだ」

「どこにある」

「ここに」

ヤエルは儀式用のマントを開いて、その折り目を揺ると、小さな灰色の毛深い塊がポトリと落ちて、要領を得ない這いずりを開始した。「マンモスの皮みたいだな」とヤエルはつぶやき、その蠢く塊のてっぺんに触れ、慎重に検討し、一回ひねると持ち上げ、その



下にあるものをあらわにした。

「なんだ、カブトガニの赤ちゃんにマンモスの毛皮をかぶせただけか」と彼。

ウィンターがピシャリと言った。「触るな。カブトガニなんかじゃない。甲羅つきのクリングむかでの成虫だ。致死性の毒を持ってる」

ヤエルは飛び上がって危険から遠ざかった。ウィンターはたちあがると、靴を履いた足で力強くその生き物を踏み潰した。それから歩き回り始めた。

「そうか、そういうことか」とついに言う。

「どういうことだね、息子や」

「ご覧よ、ジェイ。クリングむかでは地下の生き物だ。この集落と演台の下にあるのは？」

「ドームの発電所」

「だからこいつらはそこから上がってきた」

「なるほどね」

「そこで捕まえ、謎めいた仮装をほどこされて、うまく操って演台のぼくのところまで掘り上がってくるようにされたんだ」

「そりゃ考えすぎでは？」

「ジェイ、戴冠する前のぼくに露骨な暗殺未遂があったんだ。ヤツらはいまもぼくを始末したいが、公式に王になったので、もう公然とはできない。そんなことをしたら、ひどい代償を払うことになるからね」

「確かに」

「じゃあ死霊に毒を盛られたら？ R オグ王は神を怒らせ罰を受けたというわけ。迷信深いマオリはそれなら信じるし、その後継者への反対も起きない」

「またあのテロリスト集団か？」

「いまだにね、ジェイ。いまだに」と彼は苦々しげに首を振った。「こいつにケリをつけないと、いつまでも落ち着けない」

「相手がだれか見当はつくのか、ローグ？」

「いいや、まったく」

「じゃあどうやってケリをつける？」

「ヤツらを追って発電所に入る。立ち入り厳禁だから、そこが連中の本拠だろう。まちがいなくこの神の災厄はそこから送りこまれたんだから。じゃあ後で、ジェイ」と彼は姿を消した。

発電所は巨大な暗い地下室で、縦にした鋼鉄ボイラーがお互いの肩に仲良く腕をまわし

ているように見えるものだらけだった。実はそれは、連結エネルギーユニットで、すべて嗅ぎのついた装甲容器に入り、損傷や改変から保護されている。ランプの明かりがその工場を中心近くで輝いていたが、ウィンターの視界は影になったボイラーユニットで遮られていた。彼はゆっくり全身し、くねる迷路の中を身をよじりながら進み、片手はまだ身につけていた儀式用スライスナイフの柄に置いている。低い声が聞こえてきて、そしてすべてが視界に入った。

女性三人と男性二人がランプを囲んで秘密会議の最中だった。心が千々に乱れ、彼は再び首を振った。「そうか、予想できたはずだ」と思った。その女性たちは義理の姉たちだった。ウィンターはランプの明かりの中に進み出た。音をたてない配慮などしなかった。五人は顔を上げ、やってきた人物を見た。長い対峙の一瞬が続いた。みんな理解した。

ウィンターは男たちに身ぶりをした。「行け。これは家族の問題だ」

男たちはためらったが、姉たちがうなずいた。ウィンターと女性たちだけが残された。

しばし沈黙の後、彼は言った。「戴冠式に姿が見えなかったときに気がつくべきだったが、いろいろ目新しいことで気を取られていた」

答はなし。

「クイティ、タバヌ、パテア、元気そうだな」

その通りだった。背が高く、精悍な女性たち、40代末、白髪が見え始めているがまだ太りはじめてはいない。

「だがなぜ？ どうして？」

「真の血筋は私たちだけ」

「そしてぼくはただの養子の孤児。その通りだが、クティ、それは前からわかっていただろう」

「そして前から我慢ならなかった」とタバヌ。

「それは無理もない。自分が部外者なのは知っている。闖入者だ。だが自分で願ったわけじゃない。父の願いだったんだ」

「父にあんな権利はなかった」

「父にはその全権があっただろう、パテア。女性はだれも玉座にはつけないんだ」

「私たちには夫がいる」

「そうか、そして息子は？」

沈黙が答えだった。

「そうか。それは残念。ウインタ直系の血筋は絶えたのか。ご愁傷様だが、王家の血筋にはよくあることだ。だから夫のだれかを玉座につけて、その背後で操ろうというわけか。」

だが言うことをきかなかつたら？ そしたらどうする？」

「言うことを聞かせる。わたしたちは三人、テ・ウインタの真の子ども」

「もちろん。だがだれの夫をつける？ クイティ、きみの夫か？ きみが長女だし」

「おまえが夫を殺した」とクイティは叫んだ。

「殺した？ バカな」

「ヴェヌッチで」

「ヴェヌ——？ え、つまり……名前は何だっけ、ケア・オラ？ ただの鉄砲玉だと思った」

「かれが次の王のはずだった」

ウィンターは驚愕した。「なんと！ なんと！ なんとひどいことに！ 姉の夫を……」

「姉などではない、昔から」

「そしていまや王にもなれない。いまここにいた男たちは？ あれも夫たちか？」

「ちがう」

「兵士？」

「そう」

「そんな感じだった。一味は何人いる？」

「こちらの用意が整えばお前にもわかる」

ローグはゆっくり答えた。「いいや、クイティ。お前たちは決して用意など整わない。いまやぼくが知っており、何がぼくに起ころうともお前たちの責任を問えるのだから。親愛なる姉上たち、愛しい姉上たち、クイティ、タパヌ、パテア、お前たちはおしまいだ」

「そうはさせぬ！」

「おしまいだ」と繰り返し、かれはスライスナイフを引き抜いた。女たちはまったくひるまなかった。「ぼくや身内に何かがあれば、お前たちの責任となる。我が聖なる血の誓いにかけて」そして腕に切り傷をつけて、女たちがかわすより早く、その顔に自分の血を塗りつけた。

「我が誓いの血がお前たちの頭についた。お前たちの宿怨はこれで終わりだ。我々が二度と会うことはない」

彼はきびすを返し、姉たちを後にした。だが暗闇の中に消える前にこう言い残した「ぼくの名前すら一度も呼んでくれなかったね」

## 5. 恋に破れて

不在が愛を制すると言うけれど

ああ！信じるなかれ

私も試してみたけれど、ああ！その力を証明しよう

でも忘れられはしない。

——フレデリック・ウィリアム・トーマス

またまたオデッサ・パートリッジですよん、テラの北東地域で。これを全部時系列にまとめるのは私だっけのをお忘れなく、ずっと後になってから主要登場人物からの告白をもとにして。イディッシュ系のかあちゃんみたいな気分になっちゃって、ホント最高。

R モゴモゴ OG がガニメデで運命に立ち向かってる間に、une crise se prépare（「生じつつある事態」）がニューヨーク・ジャングルのデミ・ジェルーをタコ殴りにしてた。ローグの突然の出発がいかにか緊急事態だったかは、私が説明して、この子はよい子らしくそれを文句も言わずに受け入れた。いまや彼の帰還を待つ間に、ミイラ取りがミイラになる前の人生を形ばかり続けようとしてたわけ。

でも今朝目をさますと、再び全方位的に嘔吐しまくり、またもそれを恋わずらいの腹のせいだと一蹴した。目覚めたばかりの基本的チタニア現実を鏡で検分すると、そこにウィンターの理想像が登場したので再び驚愕。細身で処女っぽく、でっかいオッパイにつんと上がった尻。澄んだ肌と金褐色の髪で、『ヴィーナス誕生』のボッティチェルリのモデルになれそうなくらい、ただしサンドロが自分のビジョンから性的な要素を抜いていなければだけど。

彼女はつぶやいた。「ローグったら、あたしをこんな目にあわせて。カエルの王女様なんという話は聞いたことがない」とサイキャットに向き直る。「すごい発見をしたわ、女が本物になるには、男がいるのよ」

チタニア人としての制約で、太陽系のキャリア女性が理解できるような彼女の服装は決

められてしまっていた。仕事に変身せざるを得ないときにも、それと衝突しないような服を着なければならない。有能、途方にくれる、狡猾、人を操作したがる、夜郎自大、チームプレーヤー等々。色の濃い目立たないスーツを選び、大人しいボタン留めのブラウス、実用的な靴、装飾品なし、でもトートバッグには万が一に備えて宝飾品とイブニング用ハンドバッグとイブニングサンダルを入れた。スポットを追いかけるサイキヤットの娯楽用に万華鏡投影機のスイッチを入れて、『メディア』事務所に向かった。

デミは今月は「ソフトシフト」勤務、つまり昼から6時までだったが、熱心だったのでしばしば追加で朝に勤務を入れていた。今日も早番が必要だったのは、ヌースピーク、中世フランス語、モザンビーク語、秘教英語、色彩語での記事に対応して、それを『メディア』オーナーで編集長アウグストス・(チング)・スターンに、しっかりした説明とはっきりした提言を添えて提出しなければならなかったからだ。特に「悪魔ラブレー」のイカレっぷりには興をそそられた。これはフランソワ・ラブレーが実はサタンの化身だったと証明するものだ(彼女はこの偉大な中世戯作者がチタニア人だったのを知っていた)が、チングはまったくおもしろがってくれなかった。

5時半には、一晩街遊びをすればしばらくログのことも忘れられるだろうと思い、ガールガードに電話して、コンピュータが彼女の与信残高をチェックするのを待ち、ウィンターとは正反対のエスコート役を注文。これでオフィスのゴシップも止まるだろう、と彼女は思ったわけ。決定的な注文項目「セックスは？」には力こぶをこめて「いいえ」を叩きつけたが、これはもちろんオフィスの知るところとなり、噂談義をさらに裏付けるだけの結果となった。

その男は『メディア』にふらりとやってきた。小柄で力強く攻撃的——その尊大ぶりが目に見えるほど——で、自分が太陽系への神からの贈り物であり異論は認めないとでも言うような態度。「ミズ・ジェルー？」と挑みかかる。「ミズ・デミ・ジェルー？」

「ここです」とデミは答えたが心は沈んだ。

「ガールガードからきたサムソンです」とコマーシャル風に言う間、その目はフロアの他の女性を値踏みしていた。「ヘラク・サムソン」

「ヘラクレスのヘラク？」隅から小さな声。

「大正解だぜ、ベイビー」とサムソンは肩越しに答えてみせた。そしてデミの肘を取った。「最高ヒットしたけりやまかしときな、ハニー」とにやつく。「あんたの残高は美しいまでに底を尽くだろうけど、心配すんな。ヘラクがそれだけの価値あるものにしてやるから」と言って彼女を診断。「いまのネガなモノ言いはすまんね、ベイビー。きみ、ヘラクがお役にたてそうな顔してるぜ。最高なんだ。ヘラクがハタラク」

デミはお馴染みの洗練された娯楽とはちがったものを求めていたので、サムソンは北東部地下世界の荒っぽいツアーを提供。クラック連中や故買屋、詐欺師、泥棒、インチキ屋、紳士偽装スリ集団、派手な博打打ち、その胴元、地下世界の要塞とツーカーだった。「オレは最高だぜ、ハニー。ガールガード保証つきだから、ご心配なく。ヘラクがハタラク」

スポーツ系賭博の娯楽に彼女は縮み上がった。最初は闘犬小屋。

一級の闘犬を育てるのは並大抵のことじゃない。マスティフ、ブルドッグ、テリア、ハウンド、ハスキー、セッター、エアデール、サヴェッジの交配種が太陽系全域から輸入され、そのほとんどは盗まれてきた犬たち。体重別に戦うし、最高でも 20-30 キロだから、ピットに十匹入れても 250 キロに満たない。

慎重な食餌と訓練が不可欠だ。練習遭遇で犬はその仕事に紹介される。「味見要員」、貧しい契約労働者が、強さと気力を与えるためにたくさん食事を与えられ(ときには奴隷奉公からの解放の約束も)利用される。練習ピットに入れられる前に味見要員は、身体の急所の毛を剃られ、犬がその部位を攻撃するよう学ばせられる。

デミはピットパーラーに連れてこられると目を丸くしてあたりを見回した。中心には丸く深いサーカスがあり、床は砂敷き、まわりは野外觀客席の大群衆。スポーツポスターが壁に掛かっている。往事には有名だった犬の剥製が入ったガラスケースもある。その真ん中には、どうやら黒人ムーア人ジョッキーのヌードらしき大肖像がかかっている。「驚異のティミー」との名札。

サムソンがデミに説明する。「体重百ポンドいつも首に女物のブレスレットを巻いてる。ティミーはメイン試合を三連ちゃんて戦ったこともあるんだ。史上最高の殺し屋だったが、最後にはやられたよ」

ピットの片方には、半ダースの裸で毛を剃られた男たちが、とんでもない筋トレ運動でウォーミングアップしつつ、怒鳴り叫ぶギャンブラーたちがお気に入りに賭け金を出している。最初のメインが呼ばれ「ベンディーゴ・ベニー」と発表された。ベニーは激しく跳躍してピットに入り、中をぐるりと胸を張って歩き、彼に賭けた人々は声援し喝采する。ピット中央に陣取ると MC にうなずいた。シュートが一つ開き、うなりヨダレを垂らす闘犬 10 匹がサーカスへと突入し、ベディンゴ・ベニーにくらいつくが、ベニーはそいつらを蹴飛ばし、殴りつけて殺してゆく。

「もう出ましょう、お願い」とデミがささやいた。

「ペットがこわいみたいだねえ、ハニー」とサムソンは笑った。「まあいいよ、ヘラクならすべてアカルク。そうだな、じゃあ撃ちまくり行ってみるか。犬はなし」

BBOH(アウトロー史のスペタにロクデナシ)は、西部酒場のレプリカでその娯楽を上演。

メンバーたちは、伝説の20世紀ウェスタンスターを再現する。ゲーリー・クーパー、ジミー・スチュアート、「デューク」ことジョン・ウェイン、マレーネ・ディートリッヒ、メイ・ウェスト等々。コスチュームはかなり手が込んでいて、男たちは六連発拳銃で早撃ちの連中をするが、女性はタフな誘惑に酒場のカンカンダンスを練習。博打打ちタイプは派手なシルクハット、フロックコートを着て、各種の手札操作手法や詐欺手法をジョン・キャラダイン、ヘンリー・ハル、ブライアン・ドンレヴィー等々のスタイルに従って学ぶ。

今夜は酒場の乱闘を上演し、壊れた家具、割れたグラス、血みどろの殴り合い、ビン投げ、最後に銃撃戦の、十歩歩いて早撃ち勝負が行われ、最後に星バッジをつけたヘンリーフォンダと、素っ裸のジェーン・ラッセルの撃ち合いで終わった。

「すごい真に迫ってるわねえ！」デミは感激して熱烈に拍手した。

「本物だよ、ベイビー」

「なんですか？ あの人たち……本当に怪我して……殺されたの？」

「そうそう、みんな本当にぶちのめされてる。けんかはすべて本物。お互いを殴り合うのが大好きなんだよ。だからBBOHは満員御礼の大人気」

「じゃあ……殺しは？」

「いやさすがにそこまでは。すごい威力のセットで偽装してるんだよ。本物よりも本物っぽくて一財産かかる。だからこのチケットは目玉飛び出そうな値段なんだ。お値段見たら叫んじゃう。へラクすべからく、いつもご要望通り」

「お願い、出ましょう」

「え、ベイビー、次はリンチ場面なのに」

「お願い」

「わかったよ。じゃあ上品な法廷裁判はいかが？ 犬もない、攻撃も殴り合いもない。すてきできれいなお楽しみだけ」

それは瀟洒なビクトリア様式で飾られた売春宿だった。赤火ロード、カットグラス、燻蒸桎材、ちらつくガス燈。娼館の用心棒たちは燕尾服と、糊の効いた白ビブにダイヤを散りばめている。そして幼児売春婦の世話をするヴィクトリア朝の女性家庭教師までいた。

ちょうど大金を支払う熱烈な観客のため、定番の疑似裁判を開いているところだった。LSD ラウンジに法廷が設けられた。黒いローブと白いカツラをかぶったヴィクトリア朝判事が片側にいて、ずるむけ包皮切除の張り型トンカチを持っている。ミュージシャンのたまり場では、バンドが「陪審員裁判」からの名曲を演奏していた。キラキラ飾りの娼婦十二人が陪審員席に座り、お化粧と口紅もたっぷりつけ、魅了するように胸元を大きく開けている。裁判官前の被告もまた、グロテスクなほど厚化粧の娼婦で、イカレ幻覚を見つつ

歌い、叫び、ライムを口ずさんでいる。

喧噪の中、裁判官が怒鳴る。「囚人よ、おまえの罪状は今述べた通り。何か攻撃で言うことはあるか？」

「なんであんたがあたしの裁判官になったのさ？」と彼女は問い詰めて歌った。「おお裁きなさるなプーシーちゃん、あんたも裁かれるよクージーじゃん、さもなきゃコマされ、リフ、マワされ、リフ、カマされ、リフ、突っ込まれ——」

裁判官が張り型トンカチを叩き下ろす。「知らんのか、囚人よ？」

「いや知ってるわよ、知ってるけどね、ワイロでしょ。花道の通りに」

「何の花道だ？」

「結婚の花道よ。馬は何本脚？」

「四」

「黙示録の四人の騎手から脚を三本取ったら何が残る？」

「九」

「カイマン長どの、チンコ引いたら何が残る？ (Subtract prix your goner and what's left?)」(訳注：ごめん、ここのネタよく分からない。Prix が six に聞こえるって話かな?)

「三」

「あたしも三本脚だから馬になるわね」

「だれの馬だ、囚人よ？」

「みんなの。あたしから二本取ったら何が残る？」

「一本」

「一本ずつぼん、はじまりにして終わりすべて、リフ、甘いおしゃぶり、ラフ、ビートの終わり、ラフ、判決ちょうだい、マンケツ労働半ケツちょうだい」

「檻<sup>バ</sup>の囚人を強姦刑に処す」

「あらあら素敵なチンコロもち。強姦は相関は共感<sup>ハ</sup>は共感<sup>ハ</sup>は壯観はオツカン<sup>ハ</sup>はあたしが吸い尽くしてやる、みんなまとめていらっしゃい、みんなおいで、きてきてきて、絞り取られるまで」

服を脱ぎ捨てると、実はおかまの女装、そして陪審員も観客の歓声と野次の中でそいつに飛びかかると、実はやはりおかま。

「これで大使も自分の脳をぶちぬいたんだよ」と震え上がっているデミにサムソンが告げる。

「な、なんですって？」

「トロイ・カリフ、トルコ大使だよ。大使館は心臓発作だって主張したんだが、じつは



自慰殺。博打詐欺師どもに穴熊ゲームではめられてね。わかるだろ、ベイビー。娼婦に引っかけた。お楽しみで彼女の場所へ。現場をばっちり捕まって、それでテープも撮られて買い取るしかない。でもギャングは売ろうとせず、脅迫のタネに使ったんだ。どうやったかわかる？」

「わ……わかりたくない」

「大使に華々しいすり替えやったんだよ。娼婦は実は本物のネーチャンじゃなくて、あの下にいるやつ、コマされてるあそこの囚人だったんだ。おかま稼業。トロイくんとしてはパニックシティ……」

デミは懇願した。「お願い、もう家に帰りたい」

彼女はアパートまでガールガードされ、サムソンの細かい請求書にサインし、ドアを禁固でぐったり倒れ込んだ。



(デミの冒険に付記：私らはガニメデのトルコドームから何年もせつつかれ、あのわけのわからない自殺の説明を求められておりました。デミがやっと街での一夜の話をしてくれたので、謎が解けた。彼女のとんでもない夜遊びは、ある意味でログの責任だったから、彼は多かれ少なかれ、再び私たちのために「ポインター」を努めてくれたというわけ)



翌朝目覚めたデミは、再び気分が悪い上、追加の複合症状まで出ていた。どう考えても医者にかかるしかない。『メディア』オフィスには病欠欠勤を告げて、ヴァージニアの本物の母親に電話をして、相談にでかけた。

さてチタニアの多形人間。長年にわたり多くのチタニア人と同様、テラの生活が気に入っているのだから、自主的国外生活。そして尊敬された医師としての役割も気に入っている。そのときに採用する常駐ペルソナとは？ 女医たるもの、どんな姿になるべき？ デミの母親、アレサ・レノックス医師は偉大な女王、イングランドのエリザベスをお手本にした。

娘との問診はもちろんチタニア語。化学会話を紙上に描くのは不可能である故、白紙にしておいて皆様の感覚三つで補うに任せましょう。味覚、触覚、嗅覚。なまかなことではありませんぞ。チタニア文法は面倒ですからね。たとえば、ウールの手触りは、木の煙臭の動詞としては使えない。ただしその文の目的語が快適な味わいの場合には例外。

その3日間で話されたテラ語はただ一語。

「ウサギ」

デミはふるえあがってニューヨークに戻った。



デミのアパートで、ウィンターはガニメデでの冒険について興奮して説明を終え、サイキヤットが首に抱きつくのをほどいた。ネコは彼か、彼の声の振動か、あるいは将来の目の反転の約束に魅了されていた。ローグはネコを膝にのせて、困惑したようにデミを検分した。その外見にいささか驚いた、というかその外見のなさに驚いたというべきか。

三週間の別離の後で、彼女が陽気な女主人役、ひょっとしてその名前の元となった、マダム・ジャンヌ・フランソワーズ・ジュリー・アデレード・レカミエ (1777-1840) の姿にも変身し、ファッショナブルなサロンで文芸政治社交会を催しているだろうと予想していた。ところがデミは放心状態。わずかにどうでもいい質問をしただけ。

「それでヤエル博士は？」

「摂政としておいてきた」

「戻らなきゃいけないの？」

「わからない。まちがいなく来年には、また殺すために戻る」

「心臓は——食べなきゃいけないの？」

「どちらもね。臣民たちはほとんど狂乱状態。ぼくは二重の王で、まったく、ぼく自身誇らしいよ。まちがいなくそれだけの仕事はした」

(本当にその通りで、まさにそれに見合う仕事はしており、そして何よりも重要なこととして、隠すメガネはもう止めていた)

「それでその女の子は？」とデミ。「ほら、あなたが——その子とはまた会ったの？」

「なーるほど！」と彼は叫んだ。「そういうことか」

「何が？」

「今夜のきみが冷たい理由だよ。いや、二度と会っていない。オデッサ・パートリッジの言う通り。殺し屋勢は戴冠後には消えたよ」。義理の姉たちとの対決について話して彼女を心配させるのは賢明でないと思ったのだ。「それと、信じてくれよ、愛しい人、ぼくとやつらの女殺し屋の間には何もなかったんだって。一発も。単にお仕置きに尻に噛みつ

いてやっただけ。だから嫉妬はやめてくださいね。元気を出して、何週間も恋しかった姿のどれかを見せてくれよ」

「冷たくなんかないわよ、疲れて落ち込んでるだけ。しかもあなたは舞い上がって、家に帰るのがやたらにうれしくて、ディア、あたしを一人残して平気なのね」

「ぼくを『ディア』と言ったのは初めてだね。これまでずっと『ダーリン』だった。なぜ今になって？」

「詮索しないでよ」

「どうしたの？ そんなカリカリして」

「カリカリなんかしてない」

「それと、あの会議室でぼくに申し出たときと同じ表情だ。怯えつつも決然とした顔」

「そんなことない」

「どうした、パパにみんな話してごらん。じゃあぼくが当ててみよう。クビになった」

「ちがう」

「他の男と恋に落ちて、離縁状をどうぼくにつきつけるべきかわからない」

「冗談やめて」

「借金。取りたてがきた」

「全然そんなんじゃない」

「降参。パパに話してくれないと」

「諦めるつもりはないのね？」

「絶対に。さあしっかり話して」

彼女は深く息を吸い込んで口をキリリと結んだ。「わかったわ、パパ。あなたパパになったの」

「なんだって！」

「妊娠したの」と彼女は泣き出した。

信じられない思いだった。「でもテラ人とチタニア人の間では一度も起きたことないって言ってたじゃないか」

「な、ないんだけど、で、でも何事も初めてはあるみたい」

「ぼくらの卵と精子が愛し合ってないって」

「もしかして、あたしがあなたを好きすぎるから——なんか魔術られたのかも。わかんない」と彼女はすすり泣いた。「もしかして、またもう宇宙のジョークでわ、笑えない」

「なぜわかった？」

「せ——先週生理が来なくて、それで——」

「生理あんの？」彼は口をはさんだ。

「女子はみんなあるわよ……いつもは本当にずれないの。だからあ、あたしのお母さん——本物の医者のお母さんのところに行って——それでいくつか検査してくれて……それであなたも知ったってわけ。それでもうこわくてこわくて。どうしていいかわからない」

ウィンターは長々と遠吠えをした。サイキヤットがひざから逃げ出した。

「ローグ！近所迷惑よ！」

「たった一夜。輝かしき一夜で孕んだ。いやあ神様、まだ人間も昆虫に負けませんぞ！おいで、星のかあちゃん。こいって！」と彼女を優しく抱いた。「男の子なら、ぼくの二人の父親にちなんでテ・ジェイとつけよう。女の子ならきみのすべての名前をつけて、デミア・デリシャス・二重関節・陽気なたばかり人・デミと名付けるんだ。短縮してデカルコマニアと呼ぼう。問題がたった一つ」と彼は付け加えた。「過度の伝統からくるものだが」

「何？」

「太陽の傷。この子はテ・ジェイ・ウインタ王にいずれはなるんだ。少年に王家の頬の紋章を入れるのはフェアだろうか？」彼の手は、すでにかけていないメガネを引き上げようと勝手に動いていた。

「そんな問題じゃないわ」

「そう思う？」

「思うだけじゃないって。問題は、男の子になるのか？生まれてきたものは女の子でいてくれるのかってことよ。ハイブリッドはどんなものになるの？」

「ぼくは何も気にしないよ。彼、彼女、それはぼくたちの子で、それだけでもう充分だよ。いや正直いって、きみが太ったかなとは思ったんだ」

「一週間で？バカ言わないで」

「でもこれからどんどん、そして——スポン！」

「あなたも怯えるかと思った」

「正気かよ？ぼくは生涯にわたり、他人のパターンをシナジってきたんだぜ。いまやこれで、自前の自家製新品のパターンで遊べるじゃないか、ウィンター夫人」

彼女は泣き笑いしていた。「ローグ・ウィンター、これってあたしが受けた結婚申込の中でも、最高にろくでもない代物だわ。申込はこれまでたくさんあったのよ。オフィスでのトトカルチョでは、あなたは高級ファッションモデルと結婚することになるだろうって」

「おう、その手のゾカマミー症候群は知ってるよ。スキーロッジで全員がふりむく、洗練された美女。女子はみんな彼女に取り憑かれる。通常、彼女の名前はミステイク・

ド・カリスマなんだ」

「ふざけないでよ、ローグ」

「ふざけずにいられますよ。考えてもみてよ。オデッサ・パートリッジがボローニャのサツには手を回してくれた。王様になったから、マオリの殺し屋はもうない。そして子どもは——どんなイカレたものを生み出すにせよ——王子かお姫さまだ。愉快的冒険の楽しい序曲じゃないか」

「不気味なところがこわいのよ。全部新しくて、初めてで、お母さんですら助言できないし、どうしても助言はいるのよ……絶望的に。お願いだからいっしょに探して、ローグ」

彼はうなずき、沈黙を長く続け、おかげでびっくりしたサイキヤットもまた膝に戻って丸まった。「トマス・ヤング」と彼は断言。「求めるべきは彼だ」

「お医者さん？」

「もっといい。大学の地球外生物学部の学長なんだ。あらゆる可能な生命形態とその生成の性質については、彼こそが権威だ。かつて、ヤングとそのイカレたコンピュータのつくり出した、イカレた生命構築物についての記事を書いたことがあるんだ。きみが本当に、ぼくを引っかけるためにぼくを読みあさったんなら、その記事も読んだはず」

「助言してもらえるよう頼んでくれる？」

「向こうのほうが大喜びだよ。トムは挑戦が大好きだし、こいつは見事な挑戦だからね。明日の朝一に会って設定しよう。そうそう、警告が一つだけ。トムは信頼できる紳士だから、目の前で裸になっても平気だけど、あのコンピュータには気をつけて。ろくでもないスケベだから」

「シューッ」

「じゃあベッドに行こうか。お願い？」

「家に帰って荷ほどきするのと思った」

「なぜ宇宙港からまっすぐここに来たと思ってんの？」

「ウンガ＝ウンガ＝ウンガ」

「いまの、何？」

「マオリ語で、シューッ」そう言うと彼女は、勝手に想像したアキレス腱切りの女殺し屋に変身し始めた。

## 6. さらなるたばかり屋ども

だれも愛するなかれ。だれも信じるなかれ。だれも面と向かって悪口を言うなかれ、陰で誉めたりもするなかれ。公然と相手の懐に入り込み、隠れてその心を食い破るがいい。

——ベン・ジョンソン

私が「ソーホー」ヤングと恋に落ちたのは——これは初めて会ったときにトマスが使っていた名前——ルームメートが処女を失いたがっていた頃だった。私たちはセブンシスター（訳注：アメリカ北東地域の名門女子大7校）の一年生、「良家の」子女で、私も処女だったがそれをだれにも認めなかった。残念、育ちの良い男の子たちは、よい娘とは決して最後までやろうとはせず、そして私たちが会えたのはそういう育ちの良い男の子ばかりだった。

わたしたちは、ジャングルマザーにいて独身者バーを探検し、飲み過ぎてあまりにぎこちなく勇気もなく男に声をかけたり、自分たちがたまにナンパされてるのさえ気がつかなかった。ろくでもなく健康で清潔な暮らしばかりの、おめでたい良家の子女二人。

とにかく、マージは街でもらったビラの広告にある、お上品な野郎酒場で「それ」を捨てると決意していたけれど、大金がすでに底をついていた。が、蛮勇は尽きていなかった。何かを質入れすることにした。質屋については男についてと同じくらい何も知らなかったけれど、酒まみれの二人は大胆にもでかけて、ツキか宿命か、あるいは空の偉大な質屋さんが、閉店間際のソーホー・ヤング貸金屋に導いてくれたのだった。

見た目はイワン雷帝で、後にヤングというのが、何やら得体の知れないモンゴル名の短縮ではないかと思ったものだ。こんな遅くの急ぎ仕事はあまり気乗りがしないようだったが、私たちはその晩のうちに学校に戻らねばならず、交通費が底をついたので、なんとか五〇融通してもらえないかと説明した。ソーホーは片目をつぶってみせるとこう言った。

「五〇？ きみたちシカゴ？ ノースウェスタン？」

私は巧みに話を作った。「いいえ、ヤングさん。メインです。メイン大学」

「船で帰ってことかい。で、何を持ってる？」とソーホー。

私たちは手持ちの「まっとうな」宝石を提示した。家族が身につけていいというわずかな装飾品だが、ソーホーはそのすべてを却下したが、私の腕時計に指で触れた。「それはアンティークのパテックだな。男性用。お父さんのかい？」

「ええ、ヤングさん」

「きみにつけさせるべきじゃないな、お父さんは。大学一年生にはよすぎる」

マージは思わず言った。「どうして私たちが——」

ソーホーの勝手知ったる眼差しが彼女を黙らせた。「これを担保に五〇貸せる」と言う。そして質札をカウンター越しにすべらせ、記入方法を示し、時計を請け出す方法を説明した。そして二〇を二枚、一〇を一枚よこした。「すべてギグ？」

私はうなずいた。彼はためらい、値踏みするようにこちらを検分してから、口の片端にシワを作ってニヤリとさせた。レジの向こうの小さな棚を空ける。そこには医薬品が並び、そこから小さな白い箱を取り出して渡してくれた。「ボーナスだ。心をこめての顧客リレーション」

わたしは不思議に思った。「ありがとうございます、ヤングさん。何ですか、これ？」

「船酔いの薬だよ」と言って、貸金屋から私たちを追い出した。通りに出て箱を開いて見た。そこには「センザ」が4粒、ヴェヌッチの経口避妊薬が入っていた。神の名にかけて、どうしてあの驚異的な男にはわかったんだろう？ 私はその錠剤をマージにわたし、自分の心をソーホー・ヤングに与えたのだった。

その次にジャングルにやってきたときにその時計を請け出したが、ずっと後になってソーホーがとても親切なことをしてくれたのを発見した。清掃して補修してくれたのだ。お礼を述べようとしたら一蹴された。「きみのためにやったんじゃない。時計のためだよ。きみはまだガキだ。古い時計がどれほど貴重なものかわかってない。珍しい絵画のように大切にすべきなんだ。だからきみがろくでもないテニスチームで、バックハンドだのフォアハンドだのうろろうろしているときに、はめたりするなよ」。実に彼らしい。静かに私を観察してすべて知っていたのだ。

質屋と心理学者とは大差ない。ソーホーはあらゆることについてすべてを知っていた。だから、女子が夢見るような種類の父親だったわけだ。経験豊かで、洗練され、決して慌てず、決めつけもせず、常に乾いたユーモアのセンスを持っている。機会あるたびに彼の店に入り浸り、ソーホーがいれば常に何時間も、見物し、耳を傾け、教育を受けたが、その機会はあまり多くはなかった。彼は仕事のほとんどを事務員に任せているようだった。

私ならイェールに行かせるほうがよかったと言ったときの、彼の口端に浮かんだ小じわは忘れない。私の学校は、彼の意見では、おかまの男役たもの学校でマシュー・ヴァッサーの

ビールは飲めたものじゃないとのこと（訳注：ヴァッサー大学は前出セブンシスターの一つ。創立者マシュー・ヴァッサーはビール醸造から身を興して財を成した）。ションベン臭いエレガントなキャンパス文化を治療するため、ソーホーは質屋から見た現実の強い薬を提供してくれた。

たとえば、文句なしのインドのお姫さまがいて、おでこに赤い点、サリー姿、その他すべて揃っていて、足りないのはエイミー・ウッドフォード＝フィンデンの「インドの愛の歌」くらい。ある午後に、新品のミンクのコートを着て貸金屋に入ってきた。ものも言わずにそれを脱ぎ、カウンターに置いた。ソーホーは一目見て 1500 渡した。彼女は数えもせず店を後にした。

それを包みながら彼は説明した。「毎月新品のコートを着てやってくるんだよ。母親が、ガニメデからのマハラジャ夫人かなんかで。大金持ち。あらゆる高価な店でツケの口座を持っているんだが、その母上、娘には小遣いをやらない。そこでお姫さまは、新しいコートを買って、質に入れて遊ぶ金にするんだ。たぶん母親は明細を見ることもなくツケを清算するんだろう。そのくらい金持ちだ」。そして私に厳しい目を向けた。「お姫さまは、あの金を使って街場の荒っぽい男を買ってるらしいし、まちがいなく性病をもらってる。きみも気をつけたまえ」

「はい、ヤングさん」と私。

ある晴れた朝、黒ネクタイ姿で完全にラリった若者が、美しいアンティークのランタン時計を抱えてやってきた。ソーホーは二百を渡し、男はその金を持ってヨロヨロと出ていった。質問しようとしたところ、ソーホーは身ぶりですてと示した。その数瞬後に、やたらにイギリスっぽい執事が入ってきて、二百と融資の利息分を支払い、時計を持って立ち去った。取引はすべて、ガニメデのお姫さまと同じく黙って自動的に行われた。

「カリストからのオランダ小僧だ。金持ち。いつもヘロイン用に金が要るので、家から何かしら盗む。うちはその母親と取り決めがしてある。私が息子さんに融資したら、すべて彼女が保証してくれるんだ」

「でも息子のやっтерることを知ってるなら、なぜ直接息子にお金を渡さないの？」

「ヘロをやめさせられないので、それならせいぜいクスリのために苦労させようと思っのことだよ」とソーホーはまたもや厳しい目つきでこちらを見た。「あの子がヤクの習慣を身につけたのは、きみのおかま男役学校でのことなんだ。よく考えてきみも気をつけたまえ。唯一持つべき習慣は仕事だ」

「ありがとうございます、ヤングさん」

ソーホーのスローガンは、生き物以外で、ドアから入れられるなら、質に入れられる、というものだった。店員のローランドとイーライは、持ち込まれたろくでもないものを見



せてくれた。動物の頭、ボートの船外機、ジプシーのシンバロム丸ごと、長さ15メートルのニシキヘビの皮。ある老人は、入れ歯14セットを質入れしたが、そのどれも当人のものではなかった。ソーホーでも、彼がどうやってそれを手に入れたかは突き止められなかった。

「質入れされた中で、いちばんとんでもなかったのはミイラだったな」と彼は話してくれた。

「ミイラ？ピラミッドからの、みたいなの？」

「ギグ。まっ先に思ったのは、コイツはこれをどっかの博物館からジグったな、ということ、だから調べた」

「どうやってですか、ヤングさん？」

「ぼんやりしてないで勉強しなさい。ミイラはあまりに特別だからみんな血統書つきなんだ。専門家はすべて把握している」

「ああ、ビンテージの車みたいなものですか、ヤングさん」

「わかってきたな。そいつは本物だった。そいつはエジプト学者で、ナイル上流だかどこかの探検のための資金調達しようとしてたんだ。だから15000持たせてやった」

「請け出されたんですか？」

「いや。手紙をよこして、流してくれと言われた」

「お金は戻ってきたんですか？」

「それは詮索がすぎるぞ」とソーホーは厳しく言った。

「ごめんなさい、ヤングさん」

だがその背後にいたイーライが、だまって親指と人差し指で「2」を示し、それを丸めて「ジェルー」を示し、さらにその手を四回よじってみせた。

ある見事な午後に、ソーホーは鑑定檻の中に入って、店員代行を務めさせてくれた。「おかま男役学校では学べないことがわかるだろう。人の値踏みの仕方だ。太陽系の半分は、残り半分にむしろうとする詐欺師どもなんだから」。もちろん助手たちが私をしっかり監視はしていたが、最初の顧客は人間の「異『ちつ』勢力」とソーホーがいつも呼ぶものについての、驚異的なレッスンとなったもので、だれも予想できなかったものだ。

ある太陽系船からのエンジニア——その放射線量バッジには「カナード・ブリガディア」と書かれていた——がふらりとやってきた。明らかにハッピーアワーの酒を楽しんでいる。そして「ホイ、あんたら連中はどんな何でも質受けするんか？」と尋ねた。

「生物以外で、ドアから入れられるものなら、質入れできます」と私は暗唱した。

「R」と男は言って、ロイドの千の紙幣を目の前の檻のカウンターに置いた。「コイツを

質入れしたい」

私はそれを見据えた。「現金を質入れ、ですか？」

彼はニヤリとした。「カンカンなママさんに追われてるんだ。こんなに持っているのを知られたくはない。まちがいなく捕まる。安全なところにしまってくれ。R?」

イーライとローランドを見た。二人とも肩をすくめてうなずいたので、質札を記入しはじめた。「いくらほしいんですか、水兵さん？」

「何も。質札だけくれ」

「それでも標準の5パーセントはかかりますよ」

「わーかった」とポケットから5をほじくり出して、こちらに渡した。「一種の保護料金ってわけだ、え？ 5払って千を守る」質札を受け取って、歌いながら店をよろよろ出ていった。「世界が丸いの知ってたぜ、おう。そいつが見つかるのもわかってた、おう……」

一時間後に、そのカンカンなママさんが質札をもってやってくると、千を請け出した。

ソーホーの店員によれば、ケチな犯罪者はやたらに手間暇かけて質屋を騙そうとするのだという。塗り物の二世帯や、二重石（ガラスだが表面に薄いダイヤをはりつけて、スクラッチテストをかわそうとする）つきの指輪、店頭表示用のダミーのカメラ、中身のないどんがらだけの時計やアコーディオン。ローランド曰く「そいつら、みんなビュッフェに押し寄せて、こっちがサンドイッチの中身を見る暇がないラッシュアワーを狙ってくるんだ」。ローランドは、何やら広告業界の広告用語ノスタルジアを抱いていて、それをときどきまちがえる。「とりあえずいっちょやってみて、へそが茶をわかすか見てみよう」なんて言ってるのを聞いたことがあった。

立派な人が初めて質屋にくると、通常は恥じ入っている。自分が財務的などん底に陥ってしまい、ドブの中でもがいているように感じるのだ。ソーホーはいつもこれに苛立っていた。「家のローンが残っていても恥ずかしいとは思わないだろう。ならば腕時計のローンがあっても、なぜ恥ずかしがらにゃならんのだ？ 答えてくれ、お嬢さん」

「答えられません、ヤングさん」

「きみと、セックスしたがってたご友人が初めてここにきいたときも、恥ずかしいと想ったのか？ 彼女は？」

「彼女は恥だとは思ってませんでした、ヤングさん」

「いやそうじゃない。彼女はあの船酔いの薬を使ったのか？」

「ああ。ええ。要人のため。あれは本当に親切で——」

「気に入ったか？」

「たぶん何より怖がっていたと思います、ヤングさん」

「なるほど。そうか。きみはどうだ、腕時計を質入れして恥だと思ったか？」

「いいえ、ヤングさん。あれは冒険でした」

「なるほど。きみもそろそろ何とかしないと。きみみたいないい子が。とっくにすませるべきだ」

「え、ヤングさん……」

「ロマンチックなんだよ、それがきみの問題だ。イエールでなら、すでにきみのケツなんか17の体位であさってまでコマされてるだろう。恋に落ちる前に経験を積んでおけよ。わかったか？ おかま男役学校が！」

だが私はおかま男役のヴァッサー大1年であまりに優秀だったので——そしてその原動力が、ソーホーのダイナミックな影響だと本気で信じている——二年目の最初にテラガルダイ部門が接触してきて、そこから諜報稼業との長いつきあいが始まった。そしてソーホー・ヤングは突然姿を消した。ポン！ 本当にあっさりと。Spurlos versenkt. (跡形もなく沈没) 自分でも気がつかず、ましてそんなつもりなどまったくないうちに、私は彼の付随的なおとりの変装をあまりに危険なものにしてしまい、継続不能にしてしまったのだ。諜報(役人たちは私たちをテラガルダイ部門と呼びたがる)がそれを明かしてくれたのは、そのずっと後になってからのことだった。

そしてその今は亡き偉大なるソーホー・ヤングは、ウィンターがデミ・ジェルーのために相談しようとしている地球外生物学者トマス・ヤングと同一人物なのだった。ウィンターの声が聞こえてくるようだ。「Who? Whom が正しいのか？ \_\_\_\_がありすぎて文法は落第したんだ」空欄のことばを埋めてください、五つの現金賞金のどれかが当たるかもしれませんよ。



「自分で知る限り、チタニア人にはお目にかかったことがないよ、ローグ。もちろん、実際には会ってるんだろう——太陽系の到るところに広がってるんだから——でもこちらには知りようがない。きみはその恋人がチタニア人だとうどうやってつきとめた？」

「つきとめてませんよ、トム」

「向こうから話したのか？」

「向こうから示してくれたんです」

「素晴らしい。是非とも体内を拝見したいものだ」

「絶対ダメです」

「ちょっと覗くだけだから？ 痛くないよ」

「お断り」

「やれやれ、レントゲン装置で我慢するか」

「それで影響は出ますか？」

「わかるわけないだろう？」

「じゃあそれもダメです」

「身勝手な！ きみの妖精さんは、どうやって自分が確実に妊娠してると知ったんだね？」

「検査」

「じゃあ医者に診てもらったんだ。そいつは医学雑誌で一大センセーションだな。チタニア人を初めて診察した医師。すさまじく健康か、治療には故郷に帰るんだろうな」

「女医でした」

「じゃあ彼女が見出しを飾るね」

「デミの母親。チタニア人です」

「なんだって？ テラ医学会が知ったら何とすることか」

「タレコミはしませんよ。ねえトム、デミに助言したいんですか、したくないんですか？ あなたが目立てる一大チャンスでしょうに」

「体内の検分なしに？」

「トム！ ぼくは彼女を愛してるんだ。傷害の危険は犯させない」

「まったく厳しいねえ」

「ごまかそうとしないでくださいよ、ぼくは王様なんだから」

「それは聞いたよ。ル・ロワ・マルグレ・ルイ（気乗りしない王）。偉大な心臓二つの支配者。いつギロチンで首をちょん切られるんだい？」

「あの騒音は何なんです？」

「シンクタンク。寂しがってるんだ」

「甘やかすから」

「酢よりも砂糖のほうが補題トピックがたくさん見つかるんだよ」と言ってヤングは軽口をやめ、真剣になった。「ギグ、ローグ。私のところに来てくれたのは光栄だしありがたい。きみのチタニア娘には是非ともお目にかかりたいし、傷つけかねないことは一切しないと誓う」

「ならどうやって助けてくれるんです？」

「個人的な質問をして、同化機能や異化機能がテラ人の代謝と類似しているかを調べる。もしそうなら、一件落着で心配ご無用。ちがっていたら、もっと質問をしてそのデータを、そこにいるお利口小利口アメ公に喰わせる。そして診断と食餌療法をきみのデミのために

考案しよう。豆がサヤから出てくるみたいに子どもをひり出すって言ってたそうだな？」

ログはうなずいた。

「じゃあ落ち着け。コンピュータとデミと私に対処して、その間にきみは病院の待合室でうろうろしてなさい。まったく魅惑的なパズルは、実はあと一つだけだ。妊娠はどれだけ続くんだろうか？ 普通のテラ児発達には丸9ヶ月かかるが、きみの二重に賦与された混血の奇跡は何ヶ月の妊娠期間が要る？ 9ヶ月？ 10？ 12？」

「おい」

「初スクープの見出しは自分で考えよう。我がテラニア人とその成長」

「ぼくにとっては冗談じゃないんだぜ、トム」

「そしてきみは絶対にこんなふうにならないと思ってたがね。子どもを待つ父親。もう陣痛は始まったか？」

「すぐにデミをつれてきたほうがいい」

「そう慌てるな、ログ。ひり出すまでに一年半かかるかもしれないだ。中にきて、レンマ・キチガイナーの端末に『+HELLO+』とタイプしてやってくれ。そしたら飛び上がって、しばらくは私の邪魔をしないようになるから」

「自分でやったらどうです？」

「あのマンボジャンボくんは、キーボードの私のタッチを知ってるんだよ」

「あんたら二人のこまったところは、禁断の/大好きな愛憎関係にあることですよ」

ウィンターはヤングの甘言から身を振りほどいた。彼のお墨付きでいい気になりすぎて、醜いパターンが形成されつつあるのを感じ取れなかったのだ。愛は最高の人材にもそういう効果をもたらす。現実認識を失ってしまう。原則としてガルダが舞い上がったら、無理矢理休暇を取らせる。だがこの活動における自分自身の戦績についても、私はあまり自慢できない。岡目八目ながら、仕組まれていることに気がついているべきだったのがわかる。なぜトマス・ヤングが、戴冠式の二重の獲物のことを知っている？ シンターはデミ・ジェルーと一夜過ごしただけで、ガニメデから戻って以来他のだれとも話をしていないのだ。

彼はヤングからの吉報をジェルーに持ち帰る間、くるくる踊りそうになっていた。そして予想外の妖精は、家にいるとは言ったが『メディア』のオフィスにでかけたかも、と思いが当たった。だが噛まない。最初の夜にお互いの鍵を渡したし、留守でも彼女の家から電話をかけて、仕事の用だというふりができる。立派なヴァージニア娘は、社会的な立場が決まるまでは公開での親密さを一切求めなかった。

「指輪だ！ 婚約指輪。それが答だ」とウィンターは叫んだ。

三週間前に十二人のドラマーの太鼓に出くわした大通りで、ウィンドウショッピングを

始めた。宝石ブティックの忙しい店頭で、小さい黄金の印章つき指輪を見かけた。それを長々と見つめ「行けるかな」とつぶやいて、ドア脇の呼び鈴を押した。しばしオーナーの検分を受けてから、鍵が解錠されてウィンターの入店が認められた。

「おはようございます。あのウィンドウの印章指輪が見たいんです。下から二段目、左から3つ目です」

指輪はカウンター上のピロードのクッションに置かれた。ピンクがかった黄金でそこそこ重く、深い沈み彫りで花びら4枚の花が彫られている。

「これはハナミズキの柄？」とウィンター。

「さようです。ピンクの花開くハナミズキでございます」

「そう思った」

「だからピンクの黄金が使われております。珍しいアンティークです。赤とピンクの黄金は、もう何世紀も市場に出回っておりません」

「ベルギー人どもがカリストで鑄造しているのだが。でも全部自前で抱え込んでいるのかもしれないね。この指輪をいただこう」。ウィンターはデミの指にサイズをあわせることについては何も心配しなかった。チタニア人にとっては兎戯にも等しい。

指紋と虹彩パターンによる身元確認と銀行チェックという面倒を経て、ウィンターは包まれた指輪を抱えて店を出た。彼は店主にこう説明していた。「ハナミズキはヴァージニア州の州花なんだ。植物学ではAを取れるところだったが落第しちゃったんですよ、毒のあるツタウルシが多すぎたもんでね」

## 7. トンズラ屋

トンズラる 動詞。トンズラする、トンズラ中。名詞。俗語——動詞、1. すばやく逃げ去ること。名詞、2. トンズラる。逃げたり隠れたりすること、特に警察から。

——ランダムハウス辞典

ウィンターは跳ねるように階段を駆け上がり、デミ宅の呼び鈴を鳴らした。しばらくしてドアを開けたのは、かなり見てくれのよい街場野郎だった。

「御用ですか？」と男。

「あ、ごめんなさい、階をまちがえたかな。ぼくは——」とウィンターは言いかけて、その男の背後を見た。デミのアパートだ。さらに二人の男と、制服警官が二人中にいた。

「こりゃ何事ですか？ ジェルーさんはどこです？」

男は背後で扉を閉め、廊下でウィンターと対峙した。「お知り合いですか？」

「何が起きてるんだ？」

「事件がありまして」

「事件！」

「お名前は？」

「ウィンター。ログ・ウィンター。R-O-G-U-E。あんた、一体だれ？ 何の事件？」

「何か身分証明書はお持ちですか、ウィンターさん？」

ウィンターは財布を取り出し、それを男に突きつけた。相手はそれを開いて検分する。

「さあ答えてくれ。あんたは何物だ？ 何が知れた？ ジェルーさんはどこだ？」

男は財布を帰した。「彼女の話は後回し。お友だちですか、ウィンターさん」

「そうです、それで——」

「親しかったんですか？」

「あんたに何の関係がある？ あんた何者？」

「ダンピール。ダンピール刑事」と黄金のバッジを、ナノ秒で読み取るには充分なだけ

ちらつかせた。

「あなた警察？」

「その通り、ウィンターさん。ジェルーさんのご親族ですか？」

「いいえ、ぼくは——」

「でも親しいご友人？」

「まったくいい加減にしてくれ！ デミはどこだ？ 何があった？」

「今朝はなぜこちらにいらしたんですか？」

「デートの約束があって、ぼくたちは——おい、いい加減にしてくれよ。オマワリみた  
だけで悲鳴をあげて逃げ出すような人間じゃないんだ。ジェルーさんがどこにいるのか、  
何が起きたのか教えろ」

「何か起きたとお考えなんですか？」

「そりゃ見ればわかるだろう。彼女は無事なんですか？」

ダンピールはクールにうなずき、腹を決めようとしているようだった。「私は第3地区殺人課の所属です」

「殺人！」ウィンターは相手を肩で押しのけて、アパートのドアを押し開いた。ダンピールはその腕をつかんで引き留めた。アパートは散々な状態だった。ウィンターはキョロキョロ見回し、その有名な余裕ある態度はすべて消えていた。「何？ だれが？ なぜ？ デミはどこ？」

「わかりません」

「殺人と言いましたね」

「その通り」

「でも死体はなし？」

「死体なし」

「ならなぜ？ どうして？ なぜ殺人だと……」彼は自制しようとした。「何があったんですか？ 正確に」

「ご近所が、悲鳴とものが壊れる音を聞いたんです。激しい争い。9時40分に通報がありました」

「ぼくは9時にここを出た。ヤングのところで、彼女の話をしていたんだが、こんなこととはまったく……」

ダンピールは平然と続けた。「だから殺人の可能性があり、死体が持ち去られたのでは  
思われたんですよ。あなたがやった可能性もある。親密だったそうですから」

「なんだとこの野郎！」



「考えてもみてくださいよ、ウィンターさん。ここで一夜を共にした。この大混乱の中にあなたの持ち物も混じってる。ガニメデから帰ってきたばかりですか？ トートバッグのタグにそうありますね。恋人たちの歓迎か、はたまた恋人たちの争いか？」

「結婚するはずだったんだ」

「それで気が変わった？」

「まさか、ふざけんな」

「向こうの気が変わった？」

「いいえ」

「他の男といっしょだった？」

「名前は何だっけ？ ダンピール？ 絶対に苦情を——」

「まあまあ、落ち着いて。殺人は、親しかった相手が犯人である場合が実に多いんですよ。だから全部知っておかないと。署に連行して尋問されるより、ここで答えたほうがいいですよ」

「ギグ」とウィンターは深呼吸した。

「このアパートはよくご存じ？」

「かなり」

「女性以外に、何かなくなっているものは？ よくみてくださいよ、ただし何も触らないで」

ウィンターは瓦礫の山を、這々の体で見回した。床には本が投げ出され、デスク引き出しや彼のトートバッグ、その中身、叩き潰された装飾品。まるで恐竜が暴れ回ったかのよう。彼はやっと口を開いた。「わかりません。これではまったくわからない」

「それは残念。可能性は全部抑えたいんですが。何か手がかりになりそうなことはありますか、彼女に何か特別な、変わった様子はありませんか？」

ウィンターは口を開きかけて、閉ざした。そしてやっと言った。「いいえ、特に何も。ただの立派なヴァージニア娘。それと、なぜ過去形を使うんです？」

「殺されたと思ってかなりまちがいなさそうですからね。敵はいましたか？」

「ぼくの知る限りではいません」

「友人は？」

「ぼくが知っているのは職場の同僚たちだけです。他にもいたかも」

「職場とは？」

「『ソーラー・メディア』」

私服の一人が言った。「おい！ この人、あのローグ・ウィンターだろう。傷を見て気が

つくべきだった」

「ちょっと待った」とウィンターが叫んだ。そしてすばやくたんす、着替え室、風呂場を調べた。「ネコがいない」

「ネコ？ ネコと言いますと？」

「彼女のペットです。半分シャム、半分コアラ」

警官が口をはさんだ。「逃げ出したんでしょう、争いと殺害に怯えて」

ウィンターは身震いした。ダンピールは慎重に書き留めた。「よろしい。ウィンターさん、また連絡させてもらいます。上司ももっと質問したいことがあるかもしれません。どこかにお出かけの予定はないでしょうね？」

「酔い潰れる予定しか」とウィンター。震えが止まらなかった。

ダンピールは彼の青ざめた顔を見つめた。「それがいい。今のあなたは、感覚を殺すのが一番です」



外の通りでは野次馬の群れが、体の搬出を待ちわびていた。赤い毛布で覆われていたら存命中、黒ければ死亡。警察車両が三台やってくるところで、おそらくは科学者が乗っているはず。ウィンターは群集の中を（半死半生で）よろよろかきわけ、交通手段を探し出した。

「ソーラー酒場巡りをジグるぜ」と運転手に告げる。

「中から外？ 外から中？」

「外から始めよう」

「がってん」

それで最初の店は、「トリトン・サンダー」。外装はパゴダ。中は売春宿、チークと黒檀、真珠と翡翠。提灯。デブの中国人 4 人(全員俳優平等協会の正規会員)が、扇子と手に鈴をつけて、宦官風の金切り声で歌いつつ、スローモーションのポーズでフロア中央で踊っている。ドリンクは、「落葉哀歌」「復讐竜」「月愛」「夸克<sup>クオーク</sup>年」といった名前。

「全部一つずつ」とウィンターは注文。

次の店は「サターン・シック VI」。外人部隊の要塞風の外装で、地方や死んだ兵士のダミー(クライテリオン・コスチューム社)が銃眼に。内装：砂、ヤシの木、架台式テーブル、騎馬哨兵姿のウェイター。音楽はアルフィー・ドレフュス&つんざきデュオがアコーディオン。ドリンク：ハッシュ、モルヒ、コカイ、アへ、タイマ I、タイマ II、タイマ III。

「全部一杯ずつ」

「カリスト・クイーン」では自衛のために運転手も店内につれて入った。ここはおかまバーでウェイターはドラッグ、見かけもふるまいも危険なまでに蠱惑的。ティファニー・ガラスのシャンデリア、ステンドグラスの窓にバックライトがついて「ありえるありえない体位」を照らし出す。音楽はラフ・トレーダーズ。ドリンクの名前は「ハッスル」「クルーズ」「おさわり」「欲情レター」「淫らなバス停」

「全部二杯ずつ」

次は「ガニメデチンチン」、ヌード酒場。服は預けて化粧品を渡され、自分の好きなように顔を黒塗りか白塗り。コンゴ内装。「熱病」ドリンク。「黄」「 Dengu」「斑点」「猩紅」等々。次の「火星ボー・ベルズ」は鏡張りのジン酒場で催淫ビュッフェつき。「大いなるテロル」はプラクティカルジョーク据え付け済。「ルナ・ティック」。「金星両性具有」はトランスセックス回復者向け。「マーク」。私はその、ブラックライトで照らされた骨製バーの漂白骸骨装飾つき(それぞれ口にリンゴをくわえている)で待っていた。

ショックとドリンクのおかげで、彼は内心の絶叫を抑えるだけの、作り物のすさまじい落ち着きを得ていた。そこにひびが入ったら、ヒステリックにすすり泣きを始めるだろうが、これから話すことで彼が涙するとは思わなかった。

「これはこれは、偉大にして善良なるブリュンヒルデ様」と彼はお愛想めかして言いつつ、無人のバーで私の隣にすわった。「アイスランドの女王。グンター王の妻。ヴァーグナーのヴァルキリーにしてジークフリートのお相手」そして私のドリンクをかつさらった。「いまもこっちのやることはお見通しですか、それとも尾行かな？」

「どっちでもいいでしょう、ログ。話があるの。このすべてについては、もう本当にご愁傷様です」

「何を悲しむことがありますでしょうか。愛はきたり、愛は去りぬ、だが女子はいつまでも続く。いや何を言ってるんだオレは。転置して言い直しましょうか？」

「特に、この惨状の一部は私のせいだから」

「女子はきたり、女子は去りぬ、だが愛はいつまでも続く。あまり改善されませんね。どうして？」

「実は隠していたことがあるの。法律用語では Suppressio veri(真実隠蔽)。あなたが正式に戴冠するまでそうせざるを得なかった」

「なぜ？」

「これを知ったら絶対に玉座を拒否していたでしょうから。あなたにその地位についてもらう必要があった」

「なぜ？」

「メタ・マフィア詐欺の核心なの」

「あのポーニャ・ドームのジंक娘ですか？」

「いいえ。彼女はマフィアに潜入しようとしてた、トリトンの работник。マフィアは中国人内輪の活動なんじゃない」

「でもみんなそのように——」

「マオリなの。そしてあなたはいまやその詐欺のキングファーザー」

彼は雷に撃たれたようだった。

「だからこそ、テ・ウインタはあなたの高価な育成や教育費用をまかなえたわけ」

まだ彼は口がきけなかった。

「だからこそあなたの——だからデミ・ジェルーがあんな目にあったのよ。トリトンは密輸を止めるためならどんなことでもする。そしていまやあなたが標的。闇取引を終わらせるために、あなたに思い切り圧力をかけてるの」

「デミを殺すことで？」と彼は混乱して首を振った。「まるで筋が通らない」

「もちろんよ。だから私は、彼女が殺されたとは思わない。誘拐されたはず。代償として彼女を帰す。だからこそ、なるべく早くあなたと会って次の動きを——」

「それを知っていながら、これを阻止できなかったのか？」と彼は割り込んだ。ドリンクによる紅潮にかわり、蒼白な怒りが生じて、彼の王としての太陽傷がふくらんだ。

「どんな形で起こるかまではわからなかった」

「絶対に守ってくれと言って、面倒見ると言いましたよね。『信じなさい』って」

「少なくともまだ生きてる可能性はある」

「可能性。あんたが思うだけ。またもあんたの信頼できる保証ってわけ？」

「いいえ」

「彼女は生きてるのか？ イエスかノーか」

「わからない。トリトンの戦術について自分が正しいと願うばかり」

「誘拐されたのか？ イエスかノーか」

「わからない。わかれな。待つしかない。向こうから接触してきたら、わかる」

「そんなことで、ぼくの次の動きを計画する気か」と彼は鼻でせせら笑った。「視線はそのままに、マタハリさんよ、でも向こうが連絡してくるって、そしてしてきたら、デミの生死もわからず、だれもわからんだろ」

「確かに、でも——」

「この小賢しいスベタが。あんたらみんな、やたらに小利口で、チェスゲームで、もっ

てまわって『クリスマスの十二日』くそくだらん浅知恵ばっか。何一つ単純にストレートにやらない。そんなのブリリアントじゃないからな。ジェームズ・ボンドにふさわしくないもんな。太陽系をバカげたややこしさでめちゃくちゃにして、いまやオレをはめたってわけか。感謝感激だぜ、オデッサ。いつかお返しはするからな。オレの仕業だとすぐわかるよ、単純でストレートにやるから」

ウィンターは酒場から怒り出て、手を挙げて交通手段を呼ぶのが見えた。自らボザール・ロタンダまで運転した。自分のアパートに入ったときにもまだ激怒していた。そこで息が爆発して怒りが蒸散したのは、デミのサイキヤットがソファで快適そうに身体を伸ばしており、自分のアパートの鍵がコーヒーテーブルに置かれていて、その穴あきの弓形に花が差し込まれているのが目に入ったからだった。

だがデミ・ジェルーはいない。



「そうか、誘拐もなし、殺しもなし！」彼は歓びに満ちあふれた。「ジンクスどもから逃れて、ここにきて吉報を残したんだ。立派な思慮深いヴァージニア娘らしく。そのメッセージはおまえと」と付け加えつつサイキヤットを拾い上げてキスした。「そしてこの鍵だ」と鍵にもキス。

「さてオレがパターンをディグるなら、彼女は自衛のためトンズラに入ったわけだ。そしてあの気まぐれなチタニア娘、どんな変装へと変身したものやらわかりゃしない。だれにでもなれる人をどうやって見つけようか？ おまえか？」といきなり尋ねる。

彼は自分の首を戸惑うサイキヤットからもぎ離した。「デミ？ もうお遊びはたいがいにしてくれよ。デミ？」

「クルスツ」とサイキヤットは答えた。半ばシャム猫の鳴き声、半ばコアラの喉鳴らし。

「おいおい、いい加減にしようぜ、愛しい人。きみなんだろ、ちがうか？」

「RSVP」とサイキヤットはメロディカルに鳴いてみせた。

「いつも疑念、決して知り得ぬ」とウィンターはつぶやいた。「ちくしょうめ！ トンズラ屋を是非とも見つけたいが、困ったことに向こうは見つかりたくない。ジンクの殺し屋を妊娠パニックに加えて、哀れな彼女は大混乱のはず」

彼はソファにすわり、脚をコーヒーテーブルに上げ、サイキヤットはそのひざの上で身体をすりつけて、快適な場所を探す。

「シーツ。部屋をシンセってるんだ。ここの何かヒントをくれるかもしれない」

彼はだまってアニマパターンを近くし、印刷物、絵画、家具、おみやげ、デミが触りそうなものすべてに聞き耳を立てた。

ワタシハジヨリ JeSuisJoli ワタシハジヨリ JeSuisJoli ワタシハジヨリ

松材	松	ま	ま	松	松材
	デ			デ	
	ン			ン	
チ	チュ	リップ	チ	チュ	リップ
	ヨ			ヨ	
日本	ク		日本	ク	日本
エル	デ	ユエニ		デ	エル
	ン			ン	
ンガ	リ	ワレア		リ	ンガ
	ヨ			ヨ	
ワレカ	ク		リ	ク	ワレカ

「頼むぜ、ご同輩よ」と彼はせつついた。「ぼくの彼女に気がついたらどう。ぼくらの最初の夜には、彼女はまちがいなくきみたちにさんざん注意を払ったじゃないか。ギグ？ 彼女はいつまでここにいた？ いつ去った？ 何を着てた？」

ひたすらクロスワードパズルが増えるだけ。

彼はため息をついた。「自分勝手な連中だ、あいつらみんな。自分以外の何一つ気づきやしない。あいつらのモットーは Le monde, C'est moi であるべきだ」

ネコに相談した。「きみの助言はなんだい、お嬢さん。オデッサ・パートリッジに連絡すべきかな？ いいツラの皮だ。またもや「十二日」の浅知恵を練り上げる様子が目に浮かぶぜ。ダンピールはどうか？ やれやれ、自分が失踪者捜索願のために人相を説明する様子が思い浮かぶ。肌の色：なんでも。身長：なんでも。体重：なんでも、<sup>ウム・ゾー・ヴァイター</sup>等々。

唯一確実にわかるのは彼女の性別だが、雄のカバと雌のカバを識別しようとしてみろよ。まったく、自分がカバの後ろ足を持ち上げて性的アパラットを検分してる様子が目に浮かぶぜ。なあベイビー、これはパターンのまちがった端だと思っぜ」

サイキヤットはのどを鳴らし、彼は瞑想した。「早く見つけないと。チタニアの狂女のように、たった一人で、寄る辺なく逃げ続けている限り、安全ではいられない。遅かれ早かれジnkの手下たちに追いつかれる。一人で放り出してはおけない……

問題は、彼女ははるか彼方に逃げ去ったのか、それともどこか近くににいるのか？ ぼくの予想は近くだ。なぜか？ パターンを見てみよう、我が親愛なるネコちゃん博士。あの子は

自分のことでもすさまじいパニックだけれど、ぼくについても心配してる。ヴェヌッチの暗殺未遂を知ってるんだ。それに、そうでなければなぜ安心させようとしてきみをここに連れてくるんだ？ 彼女はぼくを死ぬほど愛してるんだ、哀れな妖精、そしてぼくたちの両方に身を捧げている。絶対にぼくをおいて逃げたりはしない。そこらにいるはずだ、そこかに、どうにかして、二人とも守ろうとして、気高いヴァージニア娘らしく……

だが手をこまねいて待ってるだけなんて、女の子のやりかただ」と彼はいきなり吠えて、ネコは飛び上がった。「この危機は行動で攻撃せねばならない、つまりはぼくが先に彼女を見つけないと。どうやって？ 探しにでかけたりはしない。心を白紙にしてでかけよう、何も考えず。そして彼女がぼくに起こるのを待つ。あらゆる感覚をオープンにして、そうすれば反パターンが無理にでも彼女を起こすはずだ」

## 8. 探索

というもほとんどの人が知る真実

何かをなくしたときには

明るいところを探そうと

隅々探しても正しい場所は見逃す

——ウィリアム・カウパー

ボザールを後にして、ジャングル・マザーをあてもなく、ランダムに、何も考えずにうろついた。それでいながらウィンターの天啓力は、彼に無意識のパターンを強いていた。それを認識できたら是非ともご応募を、ソーラー探偵学校への巨額の現金奨学金 5 つのどれかが当たるかもしれません。

出くわしたのはチング・スターン、『ソーラー・メディア』編集者兼出版人で、自分のお金を守ろうと慎重に歩道の割れ目を踏まないようにしている。

「ロジェラちゃん、ブエイブイイー！ こんな外で勝手にうろついて、何してんの？ 熱いコンピュータにかじりついて汗だくのはずでしょ。ボローニャの締め切り。忘れた？」

「チング、その締め切りは守れない」

「オイ！」

「私生活の問題で」

「女に小切手のじゃまさせるなんて、あんたらしくもない」

「なんで女の話だとわかった？」

「男がお金を忘れる理由なんて女しかないでしょ」

「だれだかわかりますか、チング」

「いいえ。その女の頭をかち割ることしか考えられない。あんた締め切り破ったことなかったのに、ローグ」

「それだけ価値ある女なんです」



「そんな価値のある女なんていないよ。くそつたれめ、リスケしないと。愛だって？ へへんだ！」そしてスターンは『メディア』オフィス群に向かったが、相変わらず危険な割れ目を避けている。

ウィンターは、「ラバ 40 頭チーム酒場」の前にラバがつないであるのに気がついた。それが二人の遭遇を、すさまじい集中力で観察していた。彼はその動物のところに行って優しく話しかけた。「デミ、デミ？」そして黄金の印章指輪をポケットから取り出し、見せつけた。「婚約指輪だよ、デミ。ヴァージニアの州花。つけてみるかい？」

反応なし。ラバは相変わらず、何もないところを見つめ続けていた。ウィンターはしかめっ面をしてふらふらと去るところだったが、そこへその動物のわき腹についた、農場の焼き印を見た。それは十字の上に丸が描かれたもので、ほとんど旭日のようだった。彼は動揺し、酒場に入る気になった。一杯やるかと思ったのだ。するとオドロキモノキ、そこにいたのは早撃ちハリーで、ブロンドの酒場娘に話しかけてうんざりさせている。

ハリーは作家仲間で、世界最高の物語を語るのだが——理由はどうあれ——決して仕上げられない。その魅力的な企画書からくる先渡し金や前借り金だけで暮らしていた。結果として、約束の物語をよこせと群がる編集者と、金を返せと群がる債権者たちから常に逃げ続けていた。ウィンターにも五千の借りがあった。

「いよう、ローグ——やあローグ——なにのんでる？」早撃ちハリーの語り口は機関銃のような連射だ。「このぶろんどむすめにはなしてたとこなんだけどさあ——すげえはなしがあんのよ——じゅんかいとしょかん——のうみそのかしだし——もくてきとわずのれんたるずのう——じぶんのあたまをつっこんで——ディグ——でもあるおとこがきて——さんかげつえんたいしてるんだ——かしだしずのうを——だからかいしゅうやがおってきて——」

「そういうあんたも、ぼくの五千両を三年延滞してるぞ、ハリー」と言って酒場娘に向き直った。「エチルのストレート、ロックでお願い」。そこで彼女が、くさりにつけた旭日ペンダントを身につけているのに気がついた。またもギョッ。「デミ？」と尋ねる。

「マーサよ」と言いつつ酒を注いでくれた。

早撃ちハリー曰く「あのごせんだが——むりむり——はさんとうさんもんなし——でも——うりこんだきゃくほんで——ぶらじるからすげえおふあーがきて——おとこがまちにやってくるんだ——それでだいえんかいして——まちじゅうそいつにむっちゅう——かねもおんなもえいよも——それがむじんのごーすとたうんとわかり——こどく——そいつをそこにつかまえておこうと——なんびゃくまんも——ただぼるとがるごのほんやくしゃやとわないと——」

ウィンターはその「男に取り憑いた町」がどうなったのか知るため、追加で金を貸す羽目になったのだった。

酒場を後にしつつ彼はつぶやいた。「哀れなハリー。お話を売るしかできない。どうしてそれを書けないんだ？」

考えるのをやめて無目的にうろつき、感覚は鋭敏に保ちつつ何も探そうとはしなかった。そこで後からついてくる音に気がついた。コツ、コツ、コツ。立ち止まって不思議に思いふり返った。背の高いほっそりした姿で、ボロをまとい頭にスキー帽をかぶり、コツコツ盲導杖を片手に持っている。首から下がった標識にはこうある。

### 話すのも見るのも

できません

お助けください

その標識にはコップがついていた。ボロボロのスキー帽は目や口の穴が開いていない。そこにスウェーデンの旭日模様が編まれていた。

ウィンターは乞食が杖で追いつくのを待って、コップにコインをカチャカチャと入れて尋ねた。「デミ？」

「あいあとおぎます。あはし、バ、バ、ラ」

「バーバラ？」

「あい、あはし、バ、バ、ラ。かひのおえうみを」

そしてウィンターは、彼女がコツコツと忙しい通りを下るのを眺めたが、その間にクジヤクのパスによる巧みな技芸に曝されていたのにまったく気がつかなかった。

パスはスリでとんでもない虚栄心の持ち主。儲けの半分を服に使う。冬には古いスコットランドのカシミア（そのカシミアヤギは自分で撃ったのだといつも豪語していた）、夏には絹のプリント地のクレープ・デシン。真珠のネックレスに真珠のイヌ用首輪（金やプラチナなどの金属だと、カチカチ言って獲物に警戒される）を身につけたが、もちろん細い手首や指には何もつけない。

パスにとっては不幸なことに、この日彼は前の週に解放してやった、ダイヤとサファイアの結婚指輪をはめていた。あまりに豪華だったので、それを見せびらかしたい誘惑に勝てなかったのだが、困ったことに二サイズほど大きすぎた。ピアスがウィンターの財布を持った手を取り出すとき、その指輪がウィンターのポケットに取り残されたのがわかったのだ。

パースは愕然とした。ふらふら歩くウィンターの後をつけて、どうしようか思案した。財布の中をのぞいたが、現金を数えようとすらしなかった。こんなのどうでもいい、財布なら他にいくらでもすれる。あの美しい指輪を取り戻したかった。カチャカチャとコップを鳴らすめくらの乞食に顔をしかめつつ、それで計画を思いついた。さまようウィンターに追いついて、財布を提示した。

「さーせん、旦那、これあなたんで？ なんか落としたみたいですね？」

またも驚愕。パースのクレープ・デシンにも旭日のパターンがプリントされていたのだ。

「デミ——」と言いかけてウィンターは止めた。これは明らかにちがう。財布を受け取って、それを調べた。「そうだ、ぼくのだ。いやはや、どうして——？ いやあ、何とお礼を言っていかが。お礼をあげましょうか？ いくら要ります？」

「お礼なんかいいんですが、でも——いやね、自分が落とした指輪を探してたんですよ、女房のもので、それでこの財布も見つけたんで。だから——ひょっとして指輪を見つけたりは？」

ウィンターはにっこりした。「すまない。お返しができたらと思うが、そんなものは見つけてない」

「いや旦那、実は見つけてて忘れたのかも？」

「あり得ないよ、すまない」

「ときどきあるでしょう。あなたもうわの空型みたいだし。拾ってポケットに入れて忘れた渡河？ ちょっと見てくださいよ。女房の。ダイヤとサファイア。ちょっと見てみて、ね？」

賢明とは言えないけれど、彼は頭ではなく手で考えるタイプだったのだ。

ウィンターが怒鳴った。「いよう、ニグ！ 待ってくれ！」そしてパースには「すまない。でも改めてありがとう」と言って、道を小走りに横切り、魅力的なアルビノ女性と並んだ。彼女は赤目を守るために黒いサングラス、頭を守る「ツバ広」の帽子、太陽から全身くまなく守るために長袖の全身防護服を着ていた。ニジェレ・エングルンド。ウィンターは、その防護服で保護されている肉体を忘れられなかった。

彼は泣き言を言って見せた。「先生、ガニメデでマンモスに蹴飛ばされて、頭に穴みたいなのが開いちゃってるんです。マンモスに望みはありますかね？」

ニグは笑った。彼女は獣医、アナリスト、太陽系の異様な混血ペットの問題だの神経症だのを専門としている。その混血で実に見事なペットも生まれている。「もう精神分析ごっこはなしよ、ログ。いまやデンのマザーなのよ」

「デンって誰？ デンって何？」

「市の動物園。あたしはグナディゲ・ディレクター（親切な園長さん）」

「ジグジーズ！ そんなきみを昔から知ってたなんて」

彼女が向けた視線は、黒いサングラス越しにでも自分を突き刺すのが感じられるほど冷たかった。「ジグってよ、背の高い、暗くハンサムなお方。動物園が待ってるから」

そこで彼は、そのサングラスに旭日模様の縁がついているのに気がついた。「デミ？」と尋ねて見みる。

「え？」

「ぼくのことを調べたな。ぼくとニグのことも聞いたか？」

彼女は冷たい抑揚のない口調で言った。「ローグ、最後に会ったときは、『太陽系がチタンに行けってさ。五週間で戻るよ』だったわね。このデミがどうしたとかいう詐欺は何なの？」

彼は口ごもった。「ごめん。ごめん。ちょっと脳がゆるんでるんだ。いま書いてる小説からの一節。ここを離れていますぐきみの動物農場に向かおう、こんなイカレた同伴者でよければ。ちょっとした支援と慰めがちょうど必要なことでもあるし」

「ナンパ坊や、こちらはそんな役柄は願い下げ。動物たちにでも思いの丈を打ち明けなさい。黙って聞いてくれるから」

彼は自然生息地をうろついた（この動物園は強力なまでに環境配慮してた）。クズ、ディンゴ、オナガー……

「デミ？」

「デミ？」

「デミ？」

応答なし。立ち止まって子どもの群れを眺めた。太陽系中からの来訪者が、見事な実物大のマリオネットショーを見て、笑い、喝采して野次っている。エコ主張：この薄汚い腐った興行主（氏ね氏ね!）は動物を拷問し火の輪くぐりをさせ、灼熱の鞭を使ってジャグリングさせ、へんな仕掛けに乗らせるんだ（ブー!）そこへ決然とした反乱サルたち（イエーイ!）、さらに他の動物たちが反乱に加わり（バンザーイ!）、それが邪悪な興行主を制圧（爆笑!）そして自分の鞭で彼らの曲芸を演じる羽目になる（ザマア!）。音楽：「動物たちのサーカス」

ウィンターはさまよい続けた。タトウシ、ジゲッター、ギーコ……

「デミ？」

「デミ？」

「デミ？」

何もなし。バビルツサ、コルーゴ、バンディクト、キアング、エフト、ペダ……

「デミ？」

どのみち、本気で期待していたわけじゃない。立ち止まり、見事な海洋回転木馬を眺めた。タツノオトシゴ、イルカ、クジラ、巨大な貝柄、優しいサメ、さらには素直なタコまで、みんな太陽系の子どもたち(および恥知らずな大人数名)をのせて「ラ・メール」の音楽にあわせ、それが蒸気オルガンの気腫で演奏されている。あのめくらの乞食がタコにまたがり、音楽にあわせて杖を振っているのを見て、ちょっとびっくりした。

「戴冠式のジョークを思い出すな」とウィンターは思って、そのデタラメな歩きを再開した。トラ、雪豹、キリン、ピューマ、リンクス、シマウマ、レイヨウ、クーガー、そして黒豹の生息地では一匹が金網のところまできて、実にソウルフルな熱望をもってこちらを見たので、彼はほとんど確信した。

「デミ、絶対にきみだろう、な？ さあ出ておいで、愛しい人。ごほうびもあるよ。きみの婚約指輪だ」とポケットに手を入れて引っ張り出したのは、ダイヤとサファイアの結婚指輪だった。

彼は呵々大笑した。一瞬で、この陰謀すべてを理解したのだ。「デミ、本当にきみなら、出てきてこの冗談をいっしょに笑おうよ」。だが黒豹はあっちへ行ってしまった。ウィンターは、自分が印章指輪も持っているかどうか、探して確認した。「一つだけディグできないことがある」と動物園を後にして笑いながら、結婚指輪を弄んだ。「それはあのこそ泥にいつかきかないと。たぶん前科があるだろう。すぐに見つけられる」

そんな必要はなかった。紋のところでパースと、背の高い痩せたやり手弁護士に出くわした。追跡の真っ最中とでもいうように動物園に飛び込んできたのだ。というか本当に真っ最中だった。「あいつだ！」とパースは叫び、予審もなしに弁護士は地区検察官の糾弾の指をウィンターにつきつけ、窃盗財産、合法的捜査、合法身体検査、動産回復差し押さえ令状、損害賠償訴訟について熱弁を振るいはじめた。

ウィンターはニヤニヤして指輪を宙に投げた。「すばやい仕事だね。名前は？」とスリに尋ねる。

「パース」

「下の名は？」

「ただのパース」

「弁護士さんはこれがきみの指輪だと言うが？」

「妻のだ」

「どうしてぼくが持ってた？ 拾ったのかな？」

「絶対ちがうぞ！」パースは後にひかなかった。「財布を返したときにオレのポケット

からすったんだ」

「弁護士先生、ちょっと黙って」とウィンターはわめき続けるやり手弁護士に忠告した。「こうしよう、パース。起訴と反訴はお互いやめよう。一つ教えてくれたら指輪は返す」

「何だ？」

「ぼくの財布をすってるときに、いったいどうやったらこれを落とせるんだ？」

パースは本当に赤面した。ためらっていたが、ウィンターの温かい眼差しで力づけられた。「滑って外れた。大きすぎて」

ウィンターは、苛立たしい一日で二回目の笑いに感謝した。そしてパースに指輪を渡した。「きみの稼業では指輪なんかするもんじゃない。また通りで仕事にかかるの？」

「獲物がいなくてね」とパースは打ち明けた。いつもながらウィンターは、即座に友人を作ったのだった。「芸人ショーのほうがいい、そう思わないか、え？」

ウィンターはにっこりした。「ギグ、パース。行こう」

### レイニア酋長の インディアンサーカス

ロシアの訓練された熊、スウェーデンの体操選手、ドイツのダンスホール、ジプシー占いの師、バスクの玉乗り、ヒンドゥー魔術師、イタリアのボツチェ、トルコの犯し、フランスの菓子パン、アラスカのアザラシ、イギリスのドッグレース——このサーカスでインディアンらしい唯一のものは、正面玄関に陣取るレイニア酋長本人だけ。戦争ボンネット、戦闘色彩、腰布姿も完備。彼がアトラクションを指し示すのに使うバトンはトマホークだった。彼はうなってみせる。

「ホウ！ 日登るところ、白人の地。日沈むところ、赤人の地。ここは赤人の地。ウゴ！ インディアン、税金全部払う。インディアン、ライセンス全部ある。赤人、平和パイプを数。なぜ白人警察きて、赤人むしろとするか？ もっとワンパムよこせだと？ ウゲ！ それ無理ね。レイニア酋長のテント空っぽ」

「でもぼくら、サツじゃないぜ、酋長。普通の入場料も払うお客だよ」とウィンター。

「紳士諸君！ いや申し訳ない。ワシも最近、役人にいろいろ嫌がらせを受けてな、言いたくはないが袖の下求めて締め付けてくるんだよ。ある詩人曰く『誘惑はあらゆる耳に音楽をもたらす』って？ 入りたまえ。どうぞ。入場料は左手で。お楽しみあれ」

「いやあ、なんとも良いインディアンじゃないか。あの人のサーカスで仕事するのはどうかね」とウィンターは尋ねたが、パースはすでに仕事にかかっていた。「熱心だね」と



いた。ウィンターが彼女をそこから連れ出した頃には、二人とも真っ黒で湯気を立てていたが、彼女は決して水晶玉を手放さなかった。

彼はマダム・バーナデットに言った。「あなた、水瓶座ですか。あるいは保険をかけてるんですね。あなたがデミなら、当然の報いだ。本当にデミ？」

答なし。彼は興奮した群集をかきわけ、カーニバルを離れ、脚を引きずりながら、フファンキー・フフレディーのフファッションへと向かった。そこで自分のめっちゃくちゃになった服の即座の換えを交渉したが、頭上にはフフレディーが万引きに備えてヴィジラント・ビデオ社の監視を受けているという警告標識。その主張をはっきりさせるため、そのロゴは目が一つついた太陽であり、そのモットーが太陽コロナのようにまわりに印字されている。「弊社の監視があればあなたの道も常に安心」

フファンキー・フフレディーズは『ソーラー・メディア』に広告を打っており、ウィンターはセレブとして認知されていた。だから彼が洗って新しい服を仕立てる手伝いを大喜びでやってくれた。その仕立て屋(テイラー)を後にしたときには、さっぱりして大感謝だった。それでもその絶望的な一日の各種失敗について、雷のような陰気さに包まれており、自分とデミがはまり込んだこの大惨事にどう対処すべきか、未だにとんでもなく見当がつかなかった。遠くでコツコツコツという音が、時間切れを報せるように聞こえてくる。

そこでトリトン兵(ソルジャー)三人が攻撃を仕掛けてきた。



ウィンターは怒りに満ちて、オーケストラサロンの見習い二人を通り過ぎ、抵抗するヴァージナルと格闘中だったスタジオに飛び込んできた。相変わらずそれを正しいコンサートのピッチにあげようとしていたのだ。ウィンターはコックニーの「真珠王」のようで、その真珠というのはボロボロの服の裂け目からのぞく彼の肌だった。あまりに怒っていたので、頬の旭日が輝いていた。前進これ殺し屋王、あるいは自分のハーレムを探す狂乱の雄セイウチ(*Eumetopias lubeta*)。

「よーしオデッサ。あんたの作戦計画。聞こうじゃないか」となる。

「お座り、ベイビー。頭冷やして。何かドリンクでも要るんじゃない？」

「もう今日はすでに艦隊を浮かせるほど飲んでる」と身震いする。「計画だ」

「ドリンクを」と私は断言して呼び鈴を鳴らした。彼はにらみつけた。バーバラが入ってきて、片手にお盆、もう片方の手でコツコツと杖をついている。それで彼は凍り付いた。あぐりと彼女を見て、私を見て、そのままへたりこみそうになったところで、私が尻の



下に椅子をすべらせてやった。

バーバラはドリンクのお盆を置いて、スキー帽を脱ぎ捨て、かつて硬貨に「自由」だの「マリアン」だのと刻印するのに使う硬そうな頭をあらわにした。きれいさっぱりの男役の顔（レズビアンは最高のガルダ）で、その細身のタフな身体にぴったりだ。「あはし、バ、バ、ラ」ともごもご言ってから、「まったくウィンター、えらく手間のかかる追跡をさせてくれたわね」

彼は非脈拍になっていた、というのはソーホー・ヤングの決まり文句だった。

「金持ち、貧乏、乞食、泥棒<sup>6</sup>」と言いつつ、バーバラは彼の手にはブランデーを持たせた「等々。あれは意図的なもの、それとも偶然？」

「無意識に意図的なものよ、バーブ。ローグは本当に、自分がアニマ・ムンディのパターンとどう共鳴してるのかわかってないから」

「医者に弁護士、インディアン酋長……<sup>7</sup>」ウィンターはうなずいた。「そういうことか。いいや、意図的じゃなかった。自分が単にうろついてデミが登場するのを待って——」そこでブランデーにむせた。「でも何かぼくを導いていた？」

「ギグ、ローグ。ちょうどあのアイルランド・ドームで、あの溺れた子を見つけるように導かれたのと同じ。世界の魂。あなたが物の声を聞いて、他のみんなが見るものを見つ、だれも考えたことのないことを考えてしまう、根底の理由。あなたの言うシナジー。私はアニマ・ムンディと呼ぶ。同じもの」

「神、ですか？」

「そう呼ぶ人もいる。いいんじゃない？ 同じこと」

彼は再びうなずいた。「全体は部分の総和よりも大きい。それを何と呼ぼうと同じ」そしてバーブに向き直った。「尾行してたんですか？」

「任務だから」

「デミのことを知ってる？」

「ブリーフィングされたので」

「ぼくは——彼女は——いや待った、やたらに面倒ばかりで何もまともに考えられない」と深呼吸。「常にぼくの近く、まわりに、いっしょにいるのに、ぼくが気がついていなかった生物が何かいましたか？」

バーブは首を振った。

---

<sup>6</sup> 訳注：前出「ティンカー、テイラー」の続き。

<sup>7</sup> 訳注：前出「ティンカー、テイラー」のアメリカ版。

「ぼくと接触しようとしていて気がつかなかったものは？」

「クジャクのパース以外は、あのジャップ=チンク兵三人だけ。うち二人については、ずいぶん余裕をもって始末したわね。いやあ、マオリはガニメデで実に見事に殺し屋を訓練してるわね。フン族のアッティラ王もあなたには顔負けよ」

「二人？ じゃあ一人は逃げた？」

「いいえ」

ウィンターは彼女を見て、そして私を見た。「二人だと手一杯みたいだったから、バーブが手を貸したの。五〇メートルなら百発百中。気に障ったら失礼」

「そこまでマッチョなブタじゃないよ。ありがとう、バーブ。本当に助かった。ありがとう」

「仲間はお互い面倒みないと」とバーブはニヤリとした。

「改めてありがとう。さて、そのままこっちの立場になってくれ、お二人とも。何にも増して彼女を取り戻さないと。だが手がない。これほど賭け金が大きくて危険に曝されてるのに、パターンを見つけられない日がくるとは——いやそれはいい。ご提案は？」

「トリトンと取引をなささい」と私。

「続けて」

「密輸と密造をやめさせたがってる」

「それなら自分でできるのでは？」

「いいえ。それができるのはあなただけ、Rオグ王」

「気が進まない」と言ってまた頭に血を上らせはじめた。「あの気取り屋のジンクども、メタの上にあぐらをかいて、太陽系をバカにして、あのかつてのクソアラブどもが石油の上にあぐらをかいてるみたいに……」

「他の太陽系もそれには同意するでしょう。特にトリトンがメタマネーを使って、我々を何でも買い漁り始めてるから……このペア・バンクビルだって連中の持ち物……でもデミに戻ってきてほしい？」

「まったくもう！ どういう質問だよ。なんでぼくが一日中バカをさらしてまわったと思ってるんだ？」

「じゃあ代償を支払わないと。狙われていないと保証されるまで彼女は戻ってこないでしょう」

彼はうなづいた。

「そしてその代償はマオリ・マフィアの終焉」

彼は苛立って手を振った。「それをやったとする。どこにいるにせよ、やつらが彼女を

確実に帰すという保証はあるのか？」

「それぞれ！そこで交渉が出てくる。書き物で保証をもらっても、クソの役にもたたない。罰金を第三者預託にしておくことにしても、連中は気にもしない。おそらくそれを預託しておくすべての銀行は連中が抑えているでしょう。あるいは——」

「待った。これ、いつ、どこでやるの？」

「向こうがアプローチしてきた時と場所」

「そして、なんで向こうはぼくにアプローチしようと思う？」

「あら、天の衛星を訪問する査証をあなたが申請するんですよ。それで取引の用意があるのを示せば、あとは向こうの出方次第」

彼はバーバラに、皮肉っぽい一瞥をくれた。「ティンカー、仕立て屋、兵士、氷夫。するとぼくがこの数え歌の締めで、トリトンに船出するってわけですか。いやはや、このアニマ・ムンディはぶっ飛んでますね」。そして私に戻った。「その後は何を本当に要求するんだ？」

「何も。通常の交渉バレーの後で、向こうにある厳しい事実をつきつけてやるんです」

「何ですか？」

「人質をすでに保護観察下に置いているということです」

「何と！だれなんです？」

「トリトン幹部会の最高幹部。その情報と意思決定の将軍。かつて一九世紀には拳団を名乗った『義和拳教』の宗主」

「あの満人がいるんですか？ここテラに？」

「正確にはちがう。見つけてはあります。傑出した研究者である……トマス・ヤング」

彼は啞然とした。

「トリトンでは永泰魔(ユン・タイモ)公。『公』は公爵を意味する。満州貴族なのです」

「あの偉大な地球外生物学者？」

「ピンポーン」

「デミを診察して助言するのが名誉だと言ったぼくの友人？」

「それができていたら、ずいぶん連中も手間が省けたでしょうね」

「で、でも——どうやって？」

「補助的な仮装よ、ログ。諜報業界では標準活動方針(SOP)。私がトマスに会ったのは、ジャングルで何年も前にソーホー・ヤングと称して質屋をやっている頃でした。『ベッドビート』といハードポルノの名作をご存じ？」

「あれもヤングなの？」

「いいえ、私」

「いやはや！あんたらふざけた連中だなあ。そんないろいろ役柄を変えられるとは」

「あなただって審問やシナジるときには、いろいろな役柄を演じるでしょうに」

「単純な生存の時代はとっくに過ぎていきます」とバーバラが割り込んだ。「恐竜はそれで滅びたんですよ。今日では：マルチがこの地を受けつぐ」

「変装スパイごっこ、見戯だな」とウィンターはせせら笑った。

私ほうざりして答えた。「いいえ、冷徹な会計。時間と予算の問題。みんな諜報工作員が動いているのは知ってる。それは当然のこと。問題は、向こうの対抗諜報が追いつくまで、自分の工作員をなるべく長く活動させること。ディグ？」

「ギグ」

「だからおとりの活動としてインチキ活動を立ち上げる。インチキはそれを知らない。自分たちが唯一の本物だと思ってる。対抗諜報が、そういう使い捨てのおとりで予算を無駄遣いしてくれて、その際にプロの活動が背後で動けるよう祈るけれど、でもそのインチキのほうもうまく誘導して、本物の近くでへまをしでかさないようにする必要があるの。ヤングが質屋からやってたのはそういうこと。私が『ベッドビート』でやってたのもそれ」

「なんとまあ」とウィンターはつぶやいた。

「さて、全開は私がへまをしたわ。見た目には負けないほどあなたが聡明でヒップだと評価しなかったのが敗因。それについては謝ります。弁解させてもらうなら、諜報の第二法則。だれも見た目ほどは賢くない」

「第一法則は？」彼はうなった。

「自分も思ってるほど賢くない。だからすべて話しておきましょう」

「賢明かしら？」とバーバラが静かに訪ねた。

「そうするしかないの、バーブ。まず、トリトンの査証を申請して。次に、ガニメデにジェットで飛んでマフィア活動を止めて。これは必須よ。本当に何がかかっているか教えてあげるから」

「教えて」と彼はぴしゃりと言った。

「トリトンのメタ独占はくれてやって。もうしばらくは何とか支払いもできる。でも連中の買いあさりや太陽系の乗っ取りは、いまずぐ止めないと。50年もすれば私たちみんな、連中の懐に入ってしまう」

「じゃあまた手をこまねいて取引？」

「あなたのマフィアが鎮まって、あなたと彼女が安全になったら、手持ちのエース永泰魔(ユン・タイモ)公くんを出す。切り札にしてうまくいけば勝ち札。それがメキシコ式にらみ

合いに終わっても、少なくとも他に何かを仕組む時間稼ぎにはなる」

彼は殺人的なマッチョ激怒に陥った。「あんたとそのクソツタレな女々しい企みときたら。取引！トレードオフ！にらみ合い！相手にしてるのが、そんなゲームなんかしない大人なんだってのがわからないのか？ あんたらクソ食らわせてドブに捨てて、そのろくでもない妄想なんか好きにしろってんだ。このぼくを手札だと思ってるんだな？」

「ローグ！」

「あんたらが何を持ってるか教えてやろう。マオリの二重殺し王だぞ」

「お願いだから、ねえ……」

「ふん、表はあんたの企み通り動いてやる。でもガニメデに行くのはマフィア活動を終わらせるためなんかじゃない。そんなことをしたら嘲笑われるだけだ。バカな女でもなけりゃ、そんなのすぐにお見通しだ。いいや。殺しを命じて、全マオリ兵がそれに喝采するわかるか、ブリュンヒルデちゃん？ トリトンにマフィア流殺害指令をかけてやる」

彼は決断を下してスタジオから飛び出した。私はバープを見た。この展開は気に入らなかったし、自分自身についてはなおさらだった。「あなたの言うことをきいたほうがよかったかも」

「絶望的な MCP (男性優位主義のブタ)ね。処女生殖をそろそろ実現できないの？ アリマキにできるんだから、人間だってできるんじゃない？」

「彼についてやって、ガルダ。応援いる？」

「否定お断り」と彼女はニヤリとした。「乞食のコップのあがりをあいつに半分くれてやったら可愛いかななんて思ってたんだけどねえ！」

## 9. 戦略 VS 戦術

戦略は常に愛と戦争で許される

——スザンナ・セントリヴレ

誤りに見えるものはしばしば戦術

——アレクサンダー・ポープ

岡目八目ながら、とあなたはいつも嘆くね、オデッサ。その岡目八目で見ると、燃えさかる怒りにまかせてあなたのオフィスを飛びだしてからの、自分の行動のギグやヘマはこんな風に見ているんだ。トリトンへの殺害命令についてぼくは怒鳴ったね。いやはや全能の神よ！ デミを取り戻すための代償なら、太陽系すべてに殺戮命令を出してもいいくらい怒ってたんだ。彼女はどこに？ どこに閉じ込められてる？ 元気なのか？ 安全なのか？ 皆目わからず。終わりの見えないケンカみたいな形になってきていた。

ボザール・ロタンダに戻り、超軽量ジャンプスーツに着替え、もっと軽いもので旅行用トートバッグを荷造りした——乗客一人あたり、身体と荷物含め 200 ポンドまでしか認められない——サイキヤットの首に水玉模様のバンダナを巻いて、動物園のニグ・エングランドのオフィスに運んだ。

「動物病院なら通りの向こうよ」とニグ。

「病気じゃない」

「じゃあなぜ首に包帯？」

「娯楽用。この子は斑点が好きなんだ」

ニグはぼくの旅行道具を見た。「お出かけ？」

「うん」

「それでペットを動物園に寄付。ねえローグ、うちを家畜の処分場扱いされちゃかなわないのよ。みんなホームハウンドだのウォンベアだのキリウモリだのオカピケだの持ちこんで——」

「きみのところに世話になりたいんだ」

「あら。ペットホテルじゃダメなの？」

「信頼できるのはきみだけなんだ、ニグ。このネコは超特別なんだ。商業下宿で何やら悪い虫でも拾ってくる危険はおかしたくない」

「何が特別な？」

「憲法修正第五条」

「そうですか。彼女の名前は？」

「ジェルー——」とぼくは言いかけてギリギリ口を止めた。デミのラストネームを言おうとしたが、ニグの行っているのがサイキャットの名前だと気がついたのだ。実は名前は知らなかった。「名無しなんだ。単に『マダム』と呼んでる」とぼくはウソをついた。

ニグはいつもぼくのことはお見通しだったが、今回は見逃してくれた。「空きがあるか見ましようか」

デスクのコンピュータキーボードを叩くと画面が光った。「1/2 でいいわね」

「マダムが相部屋なのはいやだ。ルームメイトとケンカして怪我するかもしれない。独房は？」

ニグは言った。「もう一度やって見ましよう。ときどきタンクは聞かれもしない質問に答えるから」とさらにキーを叩くと、今度はゾーン3、ハウス2、ケージ7に案内された。

「はい。プラグうさちゃんたちと独房暮らしで。食べ物は？」

「斑点のあるものなら何でも。キャビアは赤でも黒でも、あるいは——」

「黒豆とインゲンを潰したものしかないし、嫌でも食べてもらいます。戻りはいつ？」

「わからない」

「まあいいわ。ジローさんには、ネコはいつでも引き取れるがお代は払うよう伝えておいて」

こんな当てつけをくらってぼくは即座に逃げ出した。チクショウ！ ゴシップ千里を走る！

そして銀行の一つへ——税金パターンを出し抜こうとして三つの銀行を使っているのだ——二千の保証つき手形を得た。二千は、紙幣でも重いし、すでに上限の二百ポンドに危険なほど近づいていたのだ。数オンス軽くなるだけでも決まりの悪い思いが避けられる。

手形はオーブ社のエンボス入り羊皮紙で振り出してもらった。実に豪華で優れている——彼らは独自の50ソヴリン金貨さえ鑄造している——ので、太陽系すべてが彼らの紙を知っていてひれ伏す。この紙は偽造屋たちにとっては絶望の種なのだ。

連中がいかに尊大かわかってもらおうか。かつて小切手を現金化したんだが、銀行から

出たら、何か不思議なまちがい(人間のミスか機械のミスか)で百余計にもらったのに気がついた。ぼくはバカ正直なもんで、戻ってもらいすぎの分を返そうとしたが、エレガントな窓口係曰く「顧客が窓口を離れた後はオーブは変更を一切認めておりません」。

というわけで、ぼくは出かけて「残高型」手形を求めた。これは全額を使い切るまで少しずつ使えるというものだ。窓口係(前回とはちがう)が口座キーボードを叩くと、悔しいことに画面は「1/2 OK」と輝いた。明らかにそれぞれの銀行にいくら貯め込んでいるか把握できていなかったのだ。これは吉兆だ。自分で自分の稼ぎのパターンを解読できないなら、税務署にも無理だろう。ぼくは千の手形で満足した。それで何とかしのげる。

オデッサ、きみの助言に従ってトリトン領事館に行って訪問査証を申請し、デミの取引の用意があることを示した。オフィスのジंकは、チンクよりはジャップ色が強く、ばかがつくほど腰が低く、ニコニコしてはシーシー言っていた。ジャップどもは舌を使って息をはく「シューッ」という音ではなく、息を吸いながら、下唇の上を息が通るようにして「フシーッ」に近い音をたてる。

「セヨール・イヴェール(野暮天ですがイヴェールはフランス語で冬、ウィンターです)、いと高き榮譽で(セヨール・イヴェールはソララント、太陽系共通言語で「ウィンターさん」という意味だ)フシーッ。かくも気高き紳士、我がつまらぬ彼方に世界をご訪問考えていただくアルとはフシーッ。トリトンいつご訪問の榮譽に浴せるアル？」

「今後二ヶ月以内のどこかで」

「ほう」と彼は領事館と大使館をつなぐホットラインのキーを押すと、返答が輝きもどってきた。「1/2 OK」。彼は大喜びだった。「6ヶ月、半年が認められましたぞ、セヨール・イヴェール。考えられる最高の榮譽ですぞ。フシーッ」

すべてスムーズで素敵だが、我が怒りが新たな燃料を必要とするともいうように、トリトン承認パスポートを持って領事館を離れつつ、怒りはさらに燃えさかった。学者たちは古くさい「インウィットの再<sup>エーゲンバイト</sup>責」という表現、つまり絶え間ない良心による責め立ては知っている。タリオンの再<sup>エーゲンバイト</sup>責はどうだろうか、報復への絶え間ない情熱、目には目をへの熱意はどうだろう？ 領事館のロビーは原始美術や工芸品で飾られていた。そしてそこに美しく額装された、マオリ人の顔の皮膚が引き伸ばされて飾られていたのだ。儀式傷と聖なる刺青の魅入られる顔。それは我が養父テ・ウインタのものだった。

そう、甘き復讐。そうとも！

ほう。

その午後に、シュテルンライゼ・コンパニー社(星間旅行社)の船がガニメデ向けに浮上



の予定だった。満席だったが例外は半分 OK の船室。つまりは知らない相手と相部屋ってことだ。だれかって？ いったい全体どんな小細工で手配したんだよ、オデッサ？ きみたちの男役ガルダ、バーバラ・ブルだった。

(簡単よ、ログ。船室丸ごと予約して、その半分を開けておいたのよ。あなたがガニメデに最速で出かけるのはオッズ 6-2-1 で間違いなしだと踏んだから。あなたがこなければ、バーブはすぐに船を下りれば良いだけ)

あのご婦人は嫌いじゃないし、恩義もまちがいなくあるけれど、バーブとはあまりいっしょに過ごしたくないんだ。あんたたちはあまりに鋭すぎるから、こっちが将来計画のヒントを漏らしかねないと思ったもんでね。こいつはオートキューブがご自慢の豪華ジェットだったから、旅路のほとんどはギャレーで過ごしたんだ。『メディア』からの任務で無重力シェフにインタビューするふりをしてね。実をいえば、かなりおもしろい話がきけたし、読者をつかめそうな特集記事になるよ。頭痛の種から注意をそらすのにも役立った。

自由落下での料理は独特だ。シェフは厨房の真ん中に浮かぶ。かれは厨房に、上も下も周りも取り囲まれているんだ(船の加速と減速の前には警告がくるので、すべてに当て木をする)。だから逆立ちして、肩越しに卵を割れる。困ったことに、自由落下だと何も注げず、落とせず、こぼせない。すべては揺すり、押し、つつき、力づくで希望の位置につけねばならない。無重力でフラップジャックを裏返すところを思い描いてほしい。

別の問題もある。冷蔵庫は船の零度の影側によって冷却されている。冷たくなりすぎたときにために、加熱ブースターがついている。だがたまに船が飛行中に回転し、冷蔵庫が灼熱の日照側になってしまうことがある。そうするとシェフはインターコムを取って、フライトデッキを叱りつける。デッキのほうは、水平ジェットを使うと無意味に燃料が無駄遣いされるから嫌がるのだ。「この低脳どもめ！ ワタシのクレーム・ブリュレを台無しにするつもりか！ 無意味に、だと？ エトワールヴォヤージュ・コンパニエ (シュテルンライゼ・コンパニエをフランス語にしたものです) に言いつけてやる！」

彼が肉や鳥を焼くのを見るのは実に楽しい。ローストを、電気グリルの上のきっちりした高さに設置して、ちょっと回転させるのだ。するとそれはその場にとどまりつつ、自由落下バーベキューでゆっくりまわり続ける。ずれたら、ちょっと触ればシェフの満足いくように位置が直るが、彼はときに痛々しいほど細かい。ときには宇宙シェフは、RPM やグリル上のセンチメートル高度について大激論を始める。

彼のフレンチエビフライは幻惑的だ。最高の油の容器をグリルの上で振り、油滴のシャワーを作る。それをお互いに向けて叩いて、黄金の油の塊がグツグツ言い始めるようにす

る。ちょうどいい瞬間に、塩コショウが入り（それは決して見せてもらえなかった）、続いてエビで、その美味で回転するシーフードの風船というビジョンから目が離せない。ラスプーチンの時計で催眠術に掛けられる病気のロシア王子みたいだが、時計は食べられない。

### トルコドームでケシが育つ

#### その間には大麻が、何列も何列も

ガニメデに着陸してから、自分の荷物は船室に残して、友人のシェフと並び、彼の汚れた制服と高いシェフ帽をかぶって外に忍び出た。それでバーバラの尾行を振り払ったわけ。そのシェフのほうはもちろん、三日にわたるレイオーバーとクレオールのがールフレンドたちの向けて、やる気満々だった。そのがールフレンドたちのために、ぼくは朝鮮人参のアンブル 3 ダース密輸を手伝ってやったのだった。ぼくは恩返しにはこだわりがあるのだ。ガニフォイルに乗ってトルコドームに向かい、アフメト・トロイジを電撃訪問して戦争戦略を提案した。

アフメトはトルコ人たちのナンバーワン、最高の手配師だ。ぼくには大量に借りがあり、どれはどちらも承知している。説明したほうがいいかな。彼はその役職では優秀で、見事な地方総監であり、トルコ人たちをジंकたちに肉薄するほど強力な地位へと押し上げた、才能豊かな知事なのだ。だがぼくの知っていることが明るみに出たら、弾劾されて肩章もひきむしられ、剣が頭上でへし折られて不名誉に追い払われ——そして不名誉以上にひどいことに——笑いものになる。少なくとも、ぼくたちはお互いにそう言い合っている。

というのも、何年も前にぼくは彼の父親について全面特集記事を書いていたのだ。傑出したトロイジ教主だ（これは彼の不思議で悲しい死のはるか以前のことだった）。何十もの都市への大使、パパ・トロイジは目のレンズの新しい移植が必要だと判断した。そこでかれは息子アフメトを旅の伴侶として外科医師のところにでかけ、ぼくも親密な背景色を得ようとして、それにくっついていった。アフメトは当時、16 才くらいだろうか。外科医局でパパは、息子の目もついでに検査しようと思った。そこでアフメトを視力検査表の前にすわらせると、かれの視力は驚のようだが、字が読めないことがわかったのだった。

事実。彼は生涯にわたり外交巡業をシュレップされまわし、洗練と魅力と高価な趣味を身につけ、すばらしい人生を送っていたが、大使の取り巻きたちはアフメトが、読み書き算数の基本訓練を一切受けていないことに、だれも気がつかなかったのだった。みんなそれが当然だと思い、だれも確認しようとしなかった。

当然ながらアフメトは自分でそんなことを告白したりはしなかった。学校に行きたがる

ガキなんているもんかね。16才になる頃には、読み書き算数には遅すぎた。いまだに彼は読み書きできない。長年にわたり文盲を隠してきた経験から、彼は何百もの巧妙なごまかし手段とすばらしい記憶力を発達させていた。総監にとってはありがたいことに、トルコ居住地では署名に声紋を使う。

**腫はできる、つま先は？**

**妹の裁縫てつだえる？**

**読める？書ける？**

**弟のケンカ、てつだえる？**

アフメトはでっかい歓迎をしてくれた。別にぼくがネタを握ってるからじゃなくて、ぼくたちが本当に仲良しだからだ。いまや20代末だ。シック、瀟洒、浅黒く、すでにハゲはじめ、テラン英語は第三か第四言語なのでちょっとどもり気味、ことばを探すために時々ためらう。そのどもりをここで再現したりはするまい

「アフメト、お願いをねだりにきたんだよ」と言いつつ、シェフを拝み倒してもらった朝鮮人参のアンブルを一つ渡した。

彼はニヤリとした。「その要求とやらを言いたまえ。言いなよ。無理な望みを。断ってやるから。もう準備をしてあるんだ」

「そうなのか？」

「A.B.C.D.E.F.G. どんないもんかい」

「アフメト、アフメト！仲良しご近所の強請屋をこんなめにあわせるなんて！こっそり勉強してやがったな」

「おまえのマオリ一味だよ。先月、どこからともなく舞い込んできた。ベッドでオレに教えて暮れるんだ。アルファベットにはホタテ貝殻を使うんだぜ」

「ホタテ貝殻だと！」

「銀製のね。腰のまわりにサンテュールとして巻いてるんだ。サンテュールって、おまえの来たねえ米語でなんてったっけ？ そうだベルトか。それがアレのときにジグ、ジャング、ジグって鳴って——ケツにはとんでもないキスマークがついてるなあ。トゥカス？ デリエレ？ ケツでいいのか。で、頼みってのは？」

「きみたちのメタ詐欺って何やってるの、アフメト？」

「簡単。ジグクどもにヘロインと大麻で支払う。1オンスに対して1ポンド」

「ジグジーズ！16対1の取引か！」

「でも少なくとも、こっちから逆の脅しもかけられる。うちのメタ割り当てを絶対削らない。それをやったら、こっちはお楽しみ粉の出荷を止める」

「割り当て量は？」

「月にメタを 300-400 オンス」

「そんなに？」

「大麻とケシはとんでもなく熱と湿気を喰うんだ」

「そしてきみたちは、5、6 千ポンドのヤクを出荷する。精製済？」

「いや精製前。ジंकどもは自分で精製したがる」

「それでもとんでもない量のヤクだなあ」

「とんでもなくたくさんの人がいるからな。『コショウに塩、カラシにサイダー、中国に住むのはコンビアン・ピープル (何人)?』ってね。まちがいなく、鉱山の苦力どものお楽しみ用に必要な量の精製前のヤツを使うんだらうぜ。各種報告から見て、あの奥底は地獄らしいから」

「天然メタを見たことがないんだ、アフメト。きみのを見せてくれないか」

「これが頼みなのか？」

「いやまだ」

「おまえらも使うだらう。なんで見たことないんだよ？」

「銀を使うヤツで自然の銀鉱石を見たやつが何人いる？」

「いつもながら sans repique (まともに答ええないな)、ログ。こいよ」

再度ロックで真空スーツを着たが、その遮蔽があまりに分厚くて、まるでけいれん性のシロクマのような外見と動きになった。アフメトはぼくのヘルメットを叩き、短波アンテナを指さした。「スイッチ入れたか？ 聞こえるか、ログ」

「はっきり明瞭に」

「じゃあ絶対に言われたとおりにしろよ、そして頼むから、絶対何も触るなよ、自分を新星に仕立てるつもりじゃないなら」

「それは御免だ。現状でも内心で燃えさかるものが多すぎる」

ルナの地勢に出て、相変わらず流氷から流氷へと飛び移るシロクマのような気分だった。ただしこちらが飛び移っているのは、クレバス上の岩から石へだった。四〇〇メートルほど行ったところで、アフメトは天然の石灰華の甲羅みたいなもので立ち止まり、何かトルコ語でわめきはじめ、短波で聞いているぼくの耳がつぶれるところだった。ぼくもトルコ語はわからない。その甲羅がやがて横にすべり開き、ハッチ通路と下りの階段が見えた。それを下りると、奥に石のドアがある小さな部屋に出た。その石のドアは 4 人の武装した

シロクマが警備していた。

トルコ語でさらにわめきあい。警備員たちは観音開きの石のドアを開け、ぼくたちは中に入った。背後でドアがします。「警備はしっかり。メタが貴重だからじゃない。それが危険だからだ。文民をこのマッチで遊ばせるわけにはいかない」

そこは球形の氷窟だった。「冷却ヘリウムを固体結晶状態にしてある。アルゴンとネオンのように不活性だが、この二つよりなお不活性。メタの触媒効果を受けないほぼ唯一のサブスタンス。輸送保管容器として使われているが、2ケルヴィンの温度を維持するのはそう簡単なことじゃない」

「アフメト、きみとマオリ殺し屋女はこの剣について勉強してたようだな」とぼくは見回した。「あの宝石の山はここで何してるんだい？ かつばらわれないようにしてある貴重なお宝ってわけかい？」

「親愛なるローグ、あれがメタだ」

「なんだって！ このオパールのボタン？」

「Aber natürlich (いやもちろんだよ)」

一步近づいてよく見ようとした。この太陽系世界のプレイボーイが本当にぼくを騙してるんじゃないかと確かめたかったのだ。小さな虹色のボタンにしか見えない。丸く、縁がつき、両側で浅いドームにはさまれているが、穴は開いていない。その中のオパール色の炎は生き、輝き、踊っていた。

「本当にメタ？ マジかよ。アフメト、冗談なしだぞ。メタ？」

「ウイ」

「美しい」

「ウイ」

「だがこの宝石、実に無害に見える」

「実は本当に無害だからね、通常の状態では。いまのオレはまったくもって大真面目だジェルーグ。これはテクタイトで、深宇宙からやってきた銀河系外からの隕石なんだ。テラでも普通のテクタイトなら見つかる。黒いガラスっぽいボタンがそこらに転がっていて、無害で、何もしない」

「じゃあこれのどこがそんなにちがうんだ？」

「はいはい！ これは宇宙の過去からの原初のブツなんだ。理論によれば、どこかよそから打ち出されたテクタイトのシャワーが、トリトンの火山期にそこを飽和させたらし。それが壮絶な熱と放射線の圧力を受け手、メタに変わったんだ。このボタンのそれぞれは、変換エネルギーを圧縮したお鍋なんだ」

「確かにそんなふうに見えるな、いやはや！」

「だからこそメタは原子を量子ジャンプへと蹴飛ばしてエネルギーを放出させられるんだ。その原子が通常の水準へと立ち戻ると、失った放射エネルギー量子をメタから吸収してふたたび遷移する。このすべてが「C」速で起こる。ド・ブロイは墓の中で目を回してらるだろうぜ」

「ド・ブロイってだれ？ ド・ブロイって何？」

「ルイ・ヴィクトル。1923年に量子力学の陰謀を企んだ人物で、それが何をもちたらずかまったく知らなかった」

「アフメト・トロイジ、アフメト・トロイジ、本当にしっかり読書してきたんだなあ」

「その創生は単なる憶測だよ、ログ。だがメタが先史時代の溶岩の中で見つかるのはわかっている。古代の火山『パイプ』や首と呼ばれるところで見つかる、アフリカのダイヤモンドと少し似てるな。ジルクの苦力たちはかつてのアフリカ黒人と同じやり方でそいつを掘り起こさなきゃいけない」

「ブツはどうやって扱うんだ？」

「固体ヘリウムの先端を持つツール。白熱した鉄を扱う鍛冶屋ブラックスミスを考えて、それを逆転させれば、メタを扱うホワイトスミスだ」

「なんとまあ。ガイドつきツアーをどうも、アフメト。本当に感謝するし、おみやげとしてちっちゃなちっちゃなテクタイト一つもお願いしたりしないよ」

「どのみち運べないし」

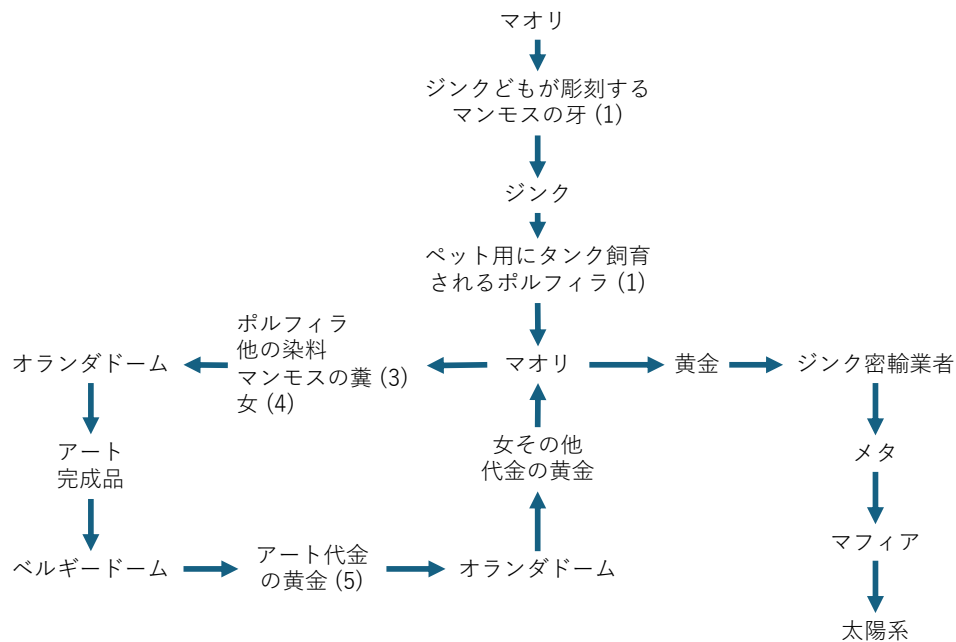
「うん、このスーツにはポケットがない」

「お願いするのはこれ、すべてのお願いファヴェールこれだけ、デイ・トイヴェこれ以外の何物もなし？」

「いや。正直言うと、戦略的なアイデアを持ってきたんだが、おかげでそれよりいい戦術を思いついた。きみのオフィスに戻ろう。きみがヒントをくれたインチキをシナジるから。トロイジャンの木馬を作ってほしいんだ」



もちろん我らがテラガルダイはメタ・マフィアの活動を PERT してましたとも。その取引の実証フローは以下の通り。クリティカルパスのジョーカーが見つかるかお試しあれ。見つけてもご褒美なし。



- (1) マオリが現代兵器で狩る
- (2) インペリアル紫を作る貝。マオリはそれが刺青用のふりをする。
- (3) 花火で明るい緑を生み出せる唯一の有機材料。花火はカリストの芸術形態
- (4) 一種の自発的奴隷。マオリ娘は美しくきわめて従順名も出るになり、あのろくでもないマッチョドームから逃れるためなら何でもする。
- (5) ベルギー人が太陽系に売ろうとしない珍しいピンク黄金。

さてジョーカーは見つかりましたか？

触れないものをどうやって盗み出せばいいのか？

20 世紀のアフリカ鉱山では、労働者によるダイヤモンド盗難が絶えず問題となった。シフト事に、ブルーグラウンドの深みから上がってきた労働者は徹底的な医学検査を受けねばならなかったけれど、それでも何人かは原石を持ちだしおおせた。原石 5-10 カラットほどで、黒んぼは生涯安泰ね。土地、牛、妻たち、地元の基準からすれば豪勢な暮らし。

トリトンではそんな問題は皆無。溶岩露出から出てくるシフトの労働者をざっと身体検査したら、苦力どもは一人ずつ感熱室に通される。もしプローブが摂氏〇度以下の温度を記録したら、その夢見る野郎が何やら氷点下容器を隠して持っているのがわかり、ジュワッ！ だがそれでも——それでも——なんとまあ！ メタは実際に鉱山から盗まれていたの。どうやって？

ダイヤの意思は口に入れたり飲み込んだりできる。耳に入れたり、鼻やアヌスに突っ込んだり。髪に隠したり、すごく小さな石ならまぶたの下でも。肌に意図的に切り傷を創り、ダイヤを植え込んでもいい <sup>ウム・ゾー・ヴァイター</sup> 等々。でもメタじゃ絶対不可能。あの濃縮お鍋は身体をゆっくりと火あぶり刑にして、それに比べたら異端審問ですら快適に思えるほど。

ある作戦を PERT するとき、クリティカルパスの弱いリンクはネガティブスラックと呼ばれる。そのジョーカーが私たちのネガティブスラックで、私たちには突き止められなかった。ジンスどもにも突き止められなかったけれど、それでこっちの気分が改善するわけもなし。でもシナジストはそれを見つけた。彼は A 地点から B 地点へ向かっていた。そして X にぶちあたった。古きよき頼りになる直観、決して人を失望させないの。



## 10. 狩る者 VS 狩られる者

猴子秤千片 (連中はサル技を千片も持っている)

——古い中国のことわざ

アフメト・トロイジの愉快的部下たちがマオリを着飾らせ、仕掛けを試験して、ジェットにスプレー絵の具で原色のトーテムポールに仕立て、そのわき腹に「レイニア酋長のインディアンサーカス——第二一座」と P・T・バーナムのサーカス文字で表示を終えたところで、そいつらは——ウィンターと彼の愉快的仲間たちに、不可能な使命について幸運を祈ってから——ヒロイン大麻農場へとジグジャグ戻っていった。

ウィンターは自分のキャストを検分した。ピエロ、曲芸師、軽業師、レスラー、リングの呼び子、剣闘士、ヒンドゥー魔術師、ヘビ使い 1 人(演じるのはバーバラ、ウィンターに逃げられてマオリドームに出かけ、ジェイ・ヤエルと相談したのだ)、さらにアマトールで完全にラリったアナコンダたち (ブラジルドームから借りた)、エジプト人ミイラアクロバット。アクロバットをするミイラなんて！信じられますか？

さらにアフメトに ABC を教えるのに飽きた女殺し屋演じる非キリスト教的ベリーダンサー——ウィンターは、この素直な小娘殺し屋がだんだん気に入ってきた——毛むくじゃらの火吹き芸人、三千才の「さまよえるユダヤ人」が長年の叡智に基づく助言を、たった四分の一サイズで提供。

(ここでワタクシ、オデッサが割り込んだほうがよさそうね、ジンクのお金はウィンターの追跡劇に決定的なものだから。太陽系はもちろん紙幣をつかう。銀行券、引き出し証書、手形等々。でも少額取引には硬貨。トリトンは「サイズ」を使うけど、これはサイシー銀インゴットの短縮形。サイシーは「絹」を意味する「細紗」<sup>シーシャー</sup>からきている。この銀はあまりに純粋だから、溶かしたら絹糸みたいに引き出せる、というわけ。靴の裏みたいな形になっていて、これは決して珍しいことじゃない。太陽系の世界は伝統的なインゴットの形にこだわる。黄金は指輪、銅は平らで丸いケーキ、ブロンズは二重の斧型、錫は棒。

サイシーまたはサイズ・インゴット (SS と表記) = 約 20 テラドル  
半サイズ、S=10 テラドル

サイズの半分の半分、 $1/2S=5$  ドル

サイズの半分の半分の半分、 $1/4S$  (ややこしいジンクの頭はこう動くのよ)=1 ドル

ジンク通貨をここでは英語化しといたから。実は SS,サイシーは元票<sup>ユアン・パオ</sup>、半サイズ=S は両分之元票<sup>リャンフエン・チー・ユアン・パオ</sup>、そして最も一般的なジンク銀貨、 $1/4S$  以下のものは、一毛多様<sup>イー・マオ・ター・ヤン</sup>または「大金」と呼ばれてる。1 サイシーのインゴットから大金まで、すべてのコインは靴の形をしてるの)

サーカスの第二旅団に戻ろう。ログ・ウィンターはレイニア酋長自身の役側で、戦争頭飾りと腰布をまとい、壮絶なウォーペイントが言わずもがなの頬の旭日傷を隠している。

「ではリハーサル通りにやるぞ。だれも抜け駆けはしない。有望なリードがあっても、だれも勝手にザグらない。ぼくの言ったとおりに動くんだ、それ以上でも以下でもない。決断はぼくが下す。君たちはそれに従う。何よりも、一言も……繰り返す、一言たりともマオリ語はしゃべるな。わかったか？」

みんな唯々諾々とうなずいた。とはいえ、この一座の半分は独立マオリ兵だったのだが。なんといっても、彼は他ならぬ、彼らの二重殺しの王、R オグ王なのだ。彼がしゃべっていたのは、テラ英語、ポリネシア語、ソララントのごたまぜだった。ソララントは、あらゆる太陽系世界の共通言語で、こんな感じ：シロール・ヒヴァー、アヴァン・ナッハ・オイフィグ・エオレス、ファボール (ウィンターさん、どうか受付に起こしてください)。どう見ても、霊妙なる「天球の音楽」とはいえないから、翻訳でがまんしてくださいな。

トリトンには大量のご本家ドームがあり、日本人、中国人、朝鮮人、マレー人、フィリピン人、安南人、さらにはキューバ系中国人の子孫の純血種やブレンドが暮らしている。キューバ系中国人はいまだにクーパクオ という奇妙なアジア的スペイン語を話しているのだ。トリトンの首都は、太陽系の他の部分ではカタイドームと呼ばれている。ジンクたち自身はそれをチュンクォと頑固に呼び続けている。これは、よろしければ、全中国そのものを指すのであり、文句はつけないほうが身のためよ。

これまでも指摘されていることだが、彼らは謙遜とは無縁だ。中国とは「中心にある王国」という意味なのだ。これはジンクの伝統として、キタイは四角い太陽系の中心にあり、ジンクたちが天命によりそれを支配するということになっているためだ。トリトンはその純潔を守るために四つの空間に囲まれており、その向こうには火星<sup>フオシン</sup>、月亮<sup>ユエリヤン</sup>など、蛮族や夷狄が暮らす島々がある。そんな連中は、天の王国を訪問し汚すなど、めったに許されない。

トリトンは様々な割合で混血しているので、第一口語はジーペンチュンコウ、日本中国語またはジンク語だ。以下にトリトンの社会的な側面を挙げよう。これは我々のエージェントたちが、ジンクたちと何かするとき失礼を避けるため、勉強しなければならないフ

アイルから適当にとってきたものだ。その封建構造がいかに時代がかったものか、多少はわかるはずだ。

ジンクたちは太陽系で最も素面な連中だが、お祭りがあると素敵に飲んだくれるのが必須と考えている。肉体的に飲めない人々は、代理人をたてて酔わせる。あらゆるお客と飲まねばならない役人たちは、最後のお客が酔い潰れるまで粛々と乾杯を続ける、一種の「ビッグフット/雪男」のような人間を雇う。

ジンクたちは5種類の酔いがあるという。彼らによると、酒が流れる先は：

心臓——	感傷をもたらす
肝臓——	争いをもたらす
胃——	酩酊と紅潮をもたらす
肺臓——	笑いをもたらす
腎臓——	性欲をもたらす

新郎新婦は、赤い糸で結ばれたコップから酒を飲む。赤は幸運の色であり、繁栄と喜びをもたらす。あらゆる手紙や指示書、文書は必ず何か赤いものを含む。

だがジンクたちは、人間は天性により、一定量の幸運しか吸収できないようにできているのだと信じている。割り当て以上の幸運は、反動をもたらして害をなすと言う。ジンクが自分の割り当て以上の幸運を得たと感じたら、彼らはしばしばそれ以上の幸運の利得を他人にあげてしまう。

そしてトリトン風味の結婚の話をする、夫は不貞の妻を殺して良いが、その間男も殺さねばならない。両方殺すか、どっちも殺さないか。さもないと殺人罪に問われる。ジンク司法の原理として、囚人が自白しない限り判決を下すことはできず、したがって、赤裸々な「自白」物語がでっちあげられたりする。

ジンク医師たちは、脈について大量の文献を書いているが、それは診察にあたりすさまじく重要視されている。二四種類の脈があると言われ、だから両方の手首から脈を取るのが重要とされる。

さてジンク男は（自分の階級以上の）女性には決してふれてはならず、男が女性に触れることになる場合に、溺れる女性を助けるべきかという問題については、多くの哲学論考が書かれている。もちろん医師は、慎みの名のもとに女性患者に触れるのを禁じられており、まして彼女たちの裸身を見てはならない。

このため、往診の医師たちは、小さな女性裸像を持っている。それがカーテンで覆われた患者の寝室に入れられ、問題のある箇所印をつける方法も書かれている。その像が医

師に戻されると、その印をもとに診断が行われるのだ。

トリトンは奇妙な迷信を抱いており、みんな本気でそれを信じている。悪人がこっそり罪をおかせば、雷神に雷で打たれて殺されると信じている。雷に通常伴う稲妻は、神がその被害者を見られるようにするための、鏡の仕掛けなのだという。このすべてはもちろん、テラだけの話だ。人が住む惑星で雷や稲妻があるのはテラだけなのだから。ジンクたちは、あらゆるテラ人たちはとんでもなく邪悪であり、だから神も休む暇がないのだと確信している。

紙の人型や動物は、トリトンでは大いに恐れられている。魔術師は紙で人や動物の姿を切り抜き、それをドアや窓からすべりこませて、それに命を吹き込んで邪な命令に従わせることができると信じられているのだ。

困惑する問題を解決するには「鏡聞」の謎が使われる。古い鏡を布で包み、それからだれもいないところで、竈の神に七礼する。そしてだれかがしゃべった最初のことばが、その問題解決のヒントとなる。

別の手法は、目を閉じて七歩歩くというもの。七歩目で目をあけ、手に持った鏡に映った最初の物体が、耳にした最初のことばとともにヒントとなる。これは運命より一步先んじるのに使われる。ジンクたちは、運命は天の気まぐれで何の予告もなく変わってしまうと信じているのだ。

天国または極楽は「<sup>テイエンタン</sup>天堂」であり、これはトリトンでは価値あるものの換喩だ。「<sup>テイエンタン</sup>天堂で貧乏」というのは、宝石や装飾品や価値ある衣服をあまり持っていないということだ。これは、表に出るときには必ず徹底的にメイクをして高価な衣服を着る上流階級婦女にしか使われない。奴隷娘や下位の女性、老女はそんなふりさえしない。

トリトンでは、あらゆる首長やその部下たちは、自分の地位を利用して私腹を最大限に肥やす。ほとんどのドームでは、各種の公式令状や召喚状は伝令たちに配布され、かれらは捕まえるはずの被害者たちから絞取り取る。ちょっとしたワイロでこいつらは、「留守でした」と訳書に報告する。もう少し奮発したら「失踪しました」と報告してくれる、といった具合。牢番はワイロ次第で、囚人たちが呼び出されるまで自由に外に出られるようにしてくれる。法廷の書記たちはワイロをもらってその影響力を行使する。下僕はみんなチップを公平に分け合う。

役人は最高位から最低位まで、規定の俸給があるが、実はそれはまったく足りない。だがだれ一人としてそれを受取はしない。みんな自分の役職から来る袖の下で暮らしているのだ。「自分はそれに値しない」「もったいのうございます」といった慎ましやかな理由で給料の受取を辞退し、それを帝国財務局に返納するのが習慣となっている。

こうした無給の高官たちに支給される立派な余録は、銅鑼、赤い傘、巨大な木製のうち

わとその役人の肩書きが大きな字で書かれている看板を持つ部下たちだ。皇帝一族は赤いサッシュを巻いて差をつける。

トリトンの日常口語は日本語と中国語を交ぜたジンク語だ。学童は、家のドームでどんな母語や方言が話されていようとも、ジンク語を第一言語としてマスターするよう求められる。ときには、家のドームの言語があまりにちがうから、ジンク語を外国語として教えねばならないこともある。

公式の古典言語は純粋日本語で、学者と貴族しか使わないが、多くのジンクたちはときどき古典語をはさんでみせて、自分が高価な教育を受けたことを誇示してみせる。たとえば「声」を示すときに、ジンク語の「セイ」と言わずに日本語の「こえ」と言うのだ。あるいは「年」を指すのに「ネン」ではなく「とし」を使う<sup>8</sup>。これはかなりの悪感情を引き起こす。イギリス人が、ノルマン式フランス語だけしか話さない征服王ウィリアムとその後継者たちに対して抱くような感情だ。

ウィンターはかたことのジンク語はしゃべれたが、そんなものは使わなかった。オパロを「さまよえるユダヤ人」役にドラフトしたのは、オパロがマオリ・マフィアの首領でジンク語が流暢だったからだ。彼を通訳にする。だが彼とオパロがキタイの主エアロックを通されたとき、鋼鉄甲冑の上に深紅のローブを着た立派なお役人の一団に向かって、彼は旅芸人の芝居を仕掛け、おもちゃのトマホークをふりかざして、戦いのダンスをしつつ、学校時代からのデタラメな歌を歌った。

「ジェフ・デイヴィスに青リンゴの木から渡す  
マギンティは転がり海の底  
彼女はアニーでぼくがその男  
おいらの悲しい話をきいて！  
今日はなんか氷ある？  
ない！  
ハイヨー！  
まとめてたばねて、いつだって  
ガスタンクにはマッチ入れ  
ドッカン！ ドッカン！」

---

<sup>8</sup> 訳注 そうねー、アルフレッドくん、きみたちに音読み/訓読みはまだちょっとむずかしかったわねー。

役人はそれを見つめて助手のほうを向いた。「他説什么样的話? (あいつは何のことばをしゃべってるんだ?)」

ウィンターはオパロに合図すると、彼は進み出て、目上の者に対する作揖敬礼を行った。右の拳を左手に包み、深くお辞儀をして、合わせた両手を二度、鼻のところ上げるのだ。以下を見ると、ジंक式のかげひきのやりかたが多少はわかるだろう。

**オパロ:** 怎么称呼他的职称? (何という称号でお呼びすればよろしいか?)

**所長:** 上尉門口. (私は主ゲートの所長である)

**オパロ:** 劳驾. (ありがとうございます)

**所長:** 是. 要求? (うむ。で、用は何だ?)

**オパロ:** 盼望着这事有完满结果. (私どものやりとりの平穩なる締結を祈るばかりです)

**所長:** 清平. (苦しゅうない)

**オパロ:** 劳驾. (ありがとうございます)

**所長:** 不客气. (どういたしまして)

**オパロ:** 一个巴掌拍不响. (口論には二人必要です)

**所長:** 紙里包不出火. (火を紙では包めない)

**オパロ:** 贵的不貴、賤的不賤. (高価なものが安いこともあるし、安いものが高価なこともある)

**所長:** 不怕慢, 只怕站. (遅いのを恐れるな、だが止まらぬよう気をつけなさい)

**オパロ:** 失面, 没饰戏. (失礼しました。私どもはつまらぬ役者です)

**所長:** 知人、知面、不知心. (人の仕事を知っても、その人の心はわからない)

**オパロ:** [ピンク黄金のかたまりを手のくぼみに入れて進呈] 耳听是虚、眼睛是实. (耳で聞くものは偽りかもしれない。目で見るものは事実。)

**所長:** おお! [手の中の黄金の重さを確認] 不敢当. (このようなご厚意はとんでもいただくわけにはまいりません)

**オパロ:** 你台谦了、上尉. (ご謙遜を、所長)

**所長:** 貴去? (どの貴い場所からおいでなすった?)

**オパロ:** 地球. (テラです)

**所長:** 貴姓? (貴名は何でしょうか?)

**オパロ:** 鄙姓行進犹太教. (我が慎ましき名前は行進するユダヤ人でございます)

**所長:** [「さまよえるユダヤ人」の仮装とメイクを見て] 貴甲子? (あなたの貴き年齢は?)

**オパロ:** 三千一百零一. (三千百と一です)

**所長:** [爆笑] 心喜! 心喜! (誕生日おめでとうございます!)

**オバロ:** <sup>ラオチア</sup> 勞駕. (ありがとうございます)

**所長:** 不謝, 公干? (どういたしまして。ここには何の御用で?)

**オバロ:** 托福托福, 演篇馬戏団. (よくぞ尋ねてくださいました。万人のためにサーカスを開きたく存じます。)

**所長:** ほう? 左様か。一人**难成博人**の間. (おや、そうですか。万人を喜ばせようとすると結局だれも喜ばせられない)

[ただしここで、彼が最後の中国語の口語「人意」を、洗練された日本語「人の間」に代えて自分の格を見せたことに注意]

この時点でウィンターは、レイニア酋長二番隊インチキ赤色インディアン語のイカレバージョンで割り込み、激しい情熱でまくしたてた。

「なんちゅうアンタこのチャンコロ中国人みんなおんなし、ワケワケよこせって? うげっ、ダメダメ! 帰るね、サッサと日いずるところへ。うげっ、ワシおいらサーカス、お日さま照らしゃるところ、どこでも持ってった、うげっ。だれも去ね言わない。みんなスパスパ平和パイプ。ウゲッ! ワシ払っとんのよライセンスみんな、現金勘定ワンパム払い。あんたらの大マニトウのルールに全部ひれ伏すね。何よこせって、チャンコロ中国人ども? 赤い人からワンパム? ワシ払う。現金る。星ティーピーにたっぶりある。割れ舌話なんぞいらんもんね」といってここでウィンター、またピンク黄金の塊を、驚愕する所長の手に握らせた。「スパスパ平和パイプするね、イエス? ウゲッ!」

門口の所長はオバロを見た。「これはなんですか?」

オバロは答えた。「テラからの外国人 (<sup>ワイクオジュウテイチウ</sup>外国去地球)。<sup>フンテイジュン</sup>紅体人」

「名前は持っているのか?」

「<sup>ターユアンシュアイベイユールンチェリエン</sup>顔雨酋長 (大元帥被雨淋彻脸、直訳するなら「雨が徹底的に降られる顔をした大元帥」)

所長は笑い出さずにはいられなかった。インチキとはわかっていたが、とてつもなく面白かったし、いまや一ポンド (トロイ)の珍しいカリストピンク黄金を持っている。だからレイニア酋長の第二座はキタイドーム入場を許された。ここがトリトンの首都になったのは、それが火山性のメタ鉱脈の真上に建てられているからというのが大きい。ウィンターの計画は、その鉱脈への厳戒された入り口を探し出すことだった。彼は内心で独自の火山を抱いていたのだ。

だが、頭にきたことに、門口の所長に一本取られたことがわかった。彼がサーカス会場として割り当てたのは、<sup>シーシンチャン</sup>死刑場、つまりキタイの処刑場だったのだ。その広場は、三方が

50本ほどのアーチになったレンガ造の絞首台に囲まれていた。残る一方は絞首台へと続く斜路だ。サーカスは、各種の凄惨な腐敗状態にある死体30隊ほどに囲まれて設置しなくてはならなかった。処刑場の中心には、奇妙な巨大鉄箱があり、そのてっぺんには蓋付きマンホールらしきものがついている。何もはっきりした機能を果たしていないようだ。ウィンターはそれを自分の呼び込み用の演台に使うことにした。

それでも、サーカスのグランドオープンは、その実施方法によりお祭り騒ぎとなった。録音ファンファーレが鳴り響くと、ウィンターが演台にたつて金を払う顧客に対し「急いだ、急いだ、急いだ、いらっしゃい、いらっしゃいみなさん！」とソララントでせき立てる(ヘツェン！ハーテル！マハト・シュネル！アヴァンティ・ウニコ！ビ・イステイグ・トドス！)以前から、サーカス会場は興奮したジंकたちの群集で満員となった。老若男女がみんなマルディ・グラを期待してたかのようにふるまっている。だがみんな、到るところを見物してまわったのに、ゲテモノショーだけは避けていた。

鳥の甲高い鳴き声が聞こえた。ウィンターは目を上げ、ツルやツバメの群れだろうと思った(多くの太陽系ドームには鳥がいる。それは設計でそうなっているものも、偶然そうなったものもある)。だが代わりに見えたのは、頭上を音を立てて飛ぶ矢だった。群集は叫び、笑い、そして矢が降り注ぐ中で一種の鬼ごっこをした。運の悪いものがカミソリの切り傷を受けると野次が飛んだ。処刑場は残虐性に満ちている。

それから銅鑼の轟音と木製の竜の喧噪が、絞首台への行列を宣告した。黒漆塗りの古い甲冑と後ろのひさしが長い兜をかぶった射手、騒音をたてる楽隊、深紅の表意文字を描いた巨大なブラカードを持つ布告者。

「処刑者の名前、階級、シリアル番号だ」とオパロがウィンターにテラ語でささやいた。「すべての役人が受ける栄誉であり、ジंक流のひけらかしでもある」

ウィンターはつぶやいた。「『ミカド』のように聞こえないなあ。見かけもちがう。あのオペレッタのココは、こんな入場はしなかったぞ」。彼は深紅のガウンを着た処刑人を見つめた。開放型の赤い駕籠に乗って運ばれ、裸の犠牲者の首に巻かれた輪縄の端を握っている。その犠牲者は四つん這いで野生動物のように引きずられていた。

「何かでかい事件でつかまったんだ。それで吊られる」とオパロ。

「なんと！これはずいぶん血に飢えた群集だな」

「人間アーチェリーや車輪での八つ裂き刑だとこんなもんじゃすまないぞ。いつか見てみるといい」とオパロ。

「見ずにすませたいね」

行列は斜路を上がり、さらし首の台のまわりをぐるっとまわって、空いているアーチ型



の絞首台にまでたどりつくと、処刑人は輪縄の端を頭上に縛り付けた。一步下がり兵士たちにうなずくと、兵たちは古い弓に矢をつがえて犠牲者の外周部、つまり足、ひざ、腕などに向けてそれを放ち、犠牲者はそれをよけて踊り回った。そして最後に矢の苦痛がかれを台座から追い落とし、空中で最後の必死のダンスで縄にしがみついたのを、射手たちが離させた。最後に彼は身震いして動かなくなった。

「はい！」と群集は歓喜して、サーカスのもっとつまらない娯楽に向き直った。だがそれでも、一時間、また一時間とショーが続く中で、ウィンターは注意して期待していたヒントをつかんだ。最も気前のいい消費者、金を湯水のように使う連中は、みんな一つ共通点を持っていた。片手がないのだ。彼はオパロにそれを尋ねた。

「小者詐欺師だね」というのがマフィア頭領の見立てだった。「でかい盗みじゃなければ、片手ですませる。盗みをする手を切り落とすんだ。いまの長年の叡智に基づく助言で『大金』いただくぜ、カモさん」

ウィンターはにこやかな沈黙でうなずいた。独自の無意識判断を下し、ベリーダンサーのテントに入った。そこではあのちっちゃな殺し屋女が、大量の欲情むきだし観客のために演じていた——なかなか悪くない。ウィンターは、マオリの殺しのサインを出した。彼女は答としてまばたきしてみせて、踊りながら舞台袖に引っ込み、一人ずつ金を出す顧客を引き込みはじめ、適切なカモのところでウィンターがギグの印を出した。上演が終わると観客たちは立ち去りしたが、誘惑されつつ女殺し屋の楽屋に導かれるカモに向けての罵倒は忘れなかった。ウィンターは、そのジnkの服を着て出てきた。顔は殺し屋女のメーキャップで中和してある。まぬけなカモを殴って気絶させたのか殺したのかは、確認すらしなかった。本当にどうでもよかった。

入場料を払ってへビ使いのテントに入ったが、入り口のゴリラが自分に気がつかなかったので気を良くした。演技が終わってそのまま席に残ったのに、バーブが自分を認識できなかったのも、さらに気を良くした。バーブが、さっさと出てくれと命じたので、これで試験に合格だとわかり、サーカス会場に繰り出したが、いい加減に歩いていたわけではない。「ポインター」は独自の<sup>イ・ショウ</sup>一手を探していた。これはジnk語で「ポインター」という意味ではなく「片手の人物」という意味だ。ウィンターは巻きに入っていた。彼の戦術は、一つの長いクリティカルパスなのだ。

ついに見込みある相手が見つかった。毛むくじゃらの火吹き芸人からのお釣りを、右手で奇妙なやり方で受け取るのだ。「生まれつき左利きなんだな。見てみよう」。結構面倒だった。隠すような長袖を着ていたからだ。小柄な女性で、強く、美しい衣装だが化粧はなかったのも、恥じることもない下層階級なのがわかる（ジnkの淑女は完全なメイクなし

に表に出るくらいなら死を選ぶ)。

ウィンターがやっとそれを見極めたのは、ヒンズー魔術師の小屋に彼女が立ち寄ったときだった。そこでは古くさい、帽子魔術が行われていた。シルクハットからウサギやハトが出てくる。そのハトの一羽がまっすぐ彼女のほうに飛んでいった。思わず身を守ろうと彼女は両手を上げたが、左手がなかった。

そこで、サーカスを後にする彼女を尾行した。それが泥棒でジnkの地下世界とコネがあるなら、おそらくそいつらを通じてメタ鉱山への入り口を見つけられる、というのが彼の考えだった。そういう裏世界のネットワークがおそらく最も知っている可能性が高い。その情報を、垂涎の的であるピンク黄金を通じて買い取るつもりだった。

なぜ彼が単独行動をしていて、言わばロビン・フッド仲間たちを避けているのか、と不思議に思うだろう。理由は二つある。マオリ・マフィアの協力を得るために支払うことになった代償は、彼らのトリトンにおけるメタ・コネクションを危うくするような真似は一切しない、という荘厳な誓いだった。それどころかオパロは、役に立ちそうな情報すら提供を拒んだのだ。第二の理由はすぐに明らかになる。

商売に精を出す苦力、露天商、商人、貴族でござたがえす通りや路地で、彼女を見失った。そこに並ぶおんぼろ家屋やあばら屋は、あまりにガタガタで、サミュエル・ピープスのロンドンとロンドン大火を思い出したほどだ。そのときには延焼を抑えるため、鳶口だけで家をどんどん潰していったのだ。彼女はある路地に入っていった。そこも火事になったらすぐに倒せそうなところだ。そして混雑した五叉路にやってきて、いきなり姿を消した。

ウィンターは交差点で目を細め、五方向を同時に見ようとした。ものすごい人混みだし、彼女は背が小さくて群集からすぐに見分けられたりはしない。「Zolst ligen in drerd! (訳注: オランダ語で「五里霧中だ!」と言いたいようです。まちがってますが)」と彼は苦々しくつぶやき、クリティカルパスが首のまわりを絞首台のように締め付けるのを感じた。激しく見回す目はすべてを検討してヒントを求めた。西洋式の服(西服穿)を仕立てる洗練された仕立て屋から、片腕の盗賊と並んで「指の数当て」をしている苦力たちまですべて検分したのだ。

ジnkどもは博打好きで悪名高い。指の数当てゲームから、西洋七並べ、サイコロ、トランプ、ルーレット、コンピュータ囲碁まで。当局はやりたくても止められないので、税金としてもものすごい歩合を巻き上げ、そこらのゲームと競合する公共ギャンブルマシンを促進している。鍵のかかったコイン箱なら、ほぼ必ずきっちり歩合を巻き上げられる。

「ほぼ」と言ったのは、ジnkはまた詐欺でも悪名高く、どんな装置でも裏をかけるからだ。各種のスロットマシンが絶えず、支払いだけはさせられるのに、正しい歩合が戻っ

てこない。コイン箱に何もなく、偽造硬貨すら残っていないのだ。必死になった賭博委員会は、その詐欺師が表に出てすべてを話したら「千サイシーで訴追なし絶対神に誓って」報酬を申し出た。すると下手人が登場し、ニヤニヤして賞金をかさらい手口を明らかにした。凍ったCO2でかたどった1/4サイシーの靴型を使っており、それがものの数分で蒸発するのだ。

彼らのマシンは別の汚職があり、これは委員会の知らないものだが、ウィンターの無意識疑似感覚にシナジられた。その報いは痛々しいものだった。

交差点の真ん中で突っ立っているわけにもいかない。注目を集める危険は死んでも冒せない。彼は片腕の盗賊ことスロットマシンのほうへと横切り、熟考しつつ、1/4S コインを入れてはハンドルを引き続けた。このまま続けあらゆる方向を追いかけて、手がかりが見つかるのを期待するか？ 見世物小屋にいて最初からやり直す？「大金」を求めてお互いに指の数当てしているピエロどもにソララントで「なあ、最近片腕の女性を見なかったか？」と尋ねてみるか？ ふん、笑えるね。

スロットマシンをにらみつけたが、そこでは果物ではなく、花の絵が使われている。右竹(カーネーション)、百合、<sup>バイヘ</sup>バラ、<sup>チャンウエイ</sup>パンジー、ヒナギク等。ジंक美学を愛でる気分ではなかったが、そこで右の三番目のダイヤルで毎回ローズマリーが表示され、ラスベガスのレモンのように賞金をキャンセルしているのに気がついた。

「このマシン、細工されてるな」とつぶやきつつ、さらに1/4Sを入れてハンドルを引いた。またもローズマリー。「カモにはちょっとでも儲けさせるな。委員会はこの手口にさぞご満悦だろうぜ。全額利益。あそこにローズマリーが、思い出のために……(シェイクスピア『ハムレット』よりオフエリアの台詞)だが、あのオフエリア<sup>イ・ショウ</sup>はどこにいる？ ええい畜生め！」ともう一枚コインを入れたら、またローズマリー。サーカスに戻る前に最後にもう一度だけ五叉路の検分を行うと、<sup>ミラビレ・グイス</sup>奇跡の光景、かのオフエリアが右手小径の奥にいるではないか。まだだれかと話をしている。

「ツイてきたぞ！」と彼は叫んで路地に駆け込んだ。最後にその糸口をみかけた交差点にたどりつく頃には、彼女は消えていたが、そこにもう一つスロットマシンがあり、<sup>クローリー</sup>苦力がそこに貼り付いてはいないが、今回はローズマリーの絵が右端のダイヤルにデチエル。ウィンターの意識に奇妙なざわつきが湧き起こった。その泥棒マシンにコインを入れてハンドルを引いた。ダイヤルはまた自由に回転したが、左のダイヤルにはまたも思い出のローズマリーが登場。

「なんと！」とかれはつぶやいた。「なんと！」そして左にまわり、何やら食べている群集をかき分けると、彼女はずっと先にいた。ざわつきが当たっていたのだ。

そのまま進み、もはや<sup>イ・ショウ</sup>一手を見失っても慌てたりせず、戦略的な地点に置かれた片腕の盗賊に注意し、もはや 1/4 S の靴型を入れたりもしなかった。パターンを感知できたのがわかった。ローズマリーが左なら左へ、ローズマリーが中央なら直進、ローズマリーが右なら右折。それは何度そのマシンで遊んでも変わらないし、他にどんな絵が出ても関係ないし、ローズマリーが複数出ることもない。

「完璧な細工だな。あの古いイギリスの『ならず者や放浪者』の道端標識と同じだ。この仕掛けを考案した天才には是非お目にかかりたいよ」とつぶやくうちに、また道を曲がるよう指示が出た。「こんな仕掛けを見破る民間人はいない。たまに来て遊ぶヤツはわからない。ツイてなかったと思って他所にいくだけ。委員会も直さない。でかい儲けを疑問視したりはしないから。警察でもない。花が『<sup>スイヅキキミフ</sup>ついてきて』と言ってるなどとは思わないから。ぼくがつきとめたのも奇跡だ」

すでに言われた通り。第七感の知覚力は無意識のプロセスなのだ。

次に<sup>イ・ショウ</sup>一手を見かけたときには、彼女はオンボロの天幕に入るところだった。そのドアの上には、ローズマリーの絵が三つ描かれ、ほとんどはがれかけていた。「着いたぞ」と思い、多少の尻込みは感じつつもそのまま進むしかない気分だった。

「フェーズ 1 はこれでおしまいか」と思い、クロノメーターに目をやった。「あと 5 時間。さてフェーズ 2 の準備はどうしよう？ これが何やら詐欺師友愛会みたいなものなら、かなり厳戒のはずだから、ワイロを渡して交渉ともいくまい。いや。じゃあなんだ？ カミサマジーズ！ ずいぶん雑な取り組みだぞ！ どうする？ どうする？」とギヤをトップに入れて考え、ついにうなずいた。「そうだ。マンモスと同じ扱いだ。向こうの土俵で戦うな。あの盗賊細工を仕組むなんて、すごく冴えたヤツが向こうにいるのは確かだ。こっちの細工に乗ってもらおう。あまり冴えてはいなくても、ウソと詐術は手慣れたもの……」

彼はあたりを見回して、即興の種を探った。天幕は賑やかな偏った広場であって、そこは店や屋台、オフィスだらけだった。

音楽を流す娯館。

「高齢の板」「高齢の衣服」を売る業者。これはジंक流の、棺桶と死に装束の婉曲表現だ。

シュロフまたは両替屋が、銅貨のひもをのれんに垂らしている。銅貨は「大金」よりさらに少額のジंकの細かいお金だ。

薬剤師。

刃物屋がナイフや刀を展示。

花火。

肉屋、ブタが丸ごと木炭ロースト装置の上に吊り下げられ、おいしそうな匂いを流している。

「快樂天国」もまたおいしそうな匂いを流している。

神道の神殿があり、木魚で飾られている。というのも魚は、神々と同じで、決して目を閉じないからだ。

そこでウィンターは即興で暴動をつくり出した。肉欲婦人たちを雇って広場を裸で走らせたのか、と思うかもしれないけれど、そうではない。花火屋でカリストロケットを、色などおかまいなしに一ダース買いこんだ。シュロフでは半サイズを、必要以上の銅貨のひもと両替し、伝統的な両替手数料に文句もつけなかった。興味津々の苦力たちが集まって見守る中、その銅貨ひもをロケットの棒にゆわえそしてそのロケットをまとめて、天幕めがけて発射すると、すさまじい火花が舞い、さらに小銭の雨を降らせた。そして最後のひもを屋根に投げつけた。「はい！」と苦力たちは叫び、銅貨目指して突進した。ウィンターの目指す暴動だ。

天幕は直撃された。屋根まで小銭漁りたちがよじのぼり、つかみ、探し、けんかしており、そこに炎のジェットが飛び散っている。一人が出てきて、一見ただけで中に命令を叫んだ。そして小さい警備兵のタスクフォースがそこに加わり、暴動を追い払おうとしたが、その間にウィンターは楽々と、だれにも気がつかれずチェックもされずに中に入り込んだ。

天幕の外見はおんぼろだったが、中はもっとひどかった。だれもない関所の短い迷路を通り過ぎ、少数のスツールやベンチが並ぶ、むきだしの納屋にやってきた。壁はカビだらけでネズミがはいずり、天井は剥げ落ちかけ、床はあちこち巨大な割れ目だらけ。彼はつぶやいた。「ジグジーズ、泥棒稼業は儲かるんじゃないのか。こんなとこ、マンモスでも住まんぞ。あの一手の<sup>イ・ショウ</sup>アマをつけるなんて、失敗したかな？」

そのうち目が慣れてくると、割れた床板から光が差しているのに気がついた。彼はあまり慎重でもなく——どんな音をたてても外の大騒動でかき消される——探し回り、シラミだらけの腐りかけたタペストリーの背後に半ば隠された、階段を見つけた。顔をしかめたが、通るにはその汚い布の間を通るしかない。ゆっくりと四つん這いになって頭から下りていったが、やがて地下室が見えるようになった。そして驚愕した。

むきだしの倉庫の真ん中に、長いお茶箱があった。青デニムの<sup>クエリー</sup>苦力が一人、左腕は垂らし右腕は袖をまくってのぼして、湯気をたてているように見える白い洗面所の上に手を出している。洗面所と並ぶ白い櫃二つも、湯気をたてているようだった。<sup>クエリー</sup>苦力は身もだえししており、女性四人とあの一手の<sup>イ・ショウ</sup>アマがそれを押さえつけている。彼女たちはいっしょに笑って冗

談をかわしており、その苦力もなんとか冗談を返そうとしている。ちっともおかしくはなかった。ジnkの外科医が、近代的な手術道具を使ってそいつの手を切断しているところだったからだ。

その手は、労働者の巨大な手で、それが何かを握りしめている。そしてその手は、火の粉の暗い赤、熱した鉄の赤、巨大な赤い星の赤、死にゆく新星の赤に輝いていた——そしていきなり、信じられないパターンがウィンターの頭を直撃した。「なんと！」そして左なんと！なんと！アフリカ鉱山でダイヤを着ずに入れて持ち出すため、身体を切った黒人と同じだ。このジnkはメタを外に密輸するために手を犠牲にしたんだ。警備員は、冷却容器の冷気をチェックするだけだ。手のままでメタを密輸するほどのバカがいるなんて、だれが信じるだろうか？

でもバカなんかじゃない。飢えた苦力は、手を一つ代償にするだけで、栄誉と豪奢の中で永遠に暮らせるんだ。それにその手だってひどい労働の中でどのみちいずれなくしかねないんだし。だがこれは一回ずつしかできない。大規模な商業ベースのメタ密輸はもっと何か別の……何だろう？ オパロはそれを、ケチな詐欺師と呼んでいたな。彼の言う通りだが、ケチでないのはどんなものか知っているのだろうか？ 知っているはずだ。それを何とかして聞き出せるだろうか？」

「ほんとうにありがとう、ローグ・ベイビー」と聞き慣れた声が呼びかけた。ウィンターはひざをついたまま身をひねった。トマス・ヤング、テラの優秀な地球外生物学者、またの名を永泰魔公、トリトンの有力者、満州貴族が階段のてっぺんに立ってこちらをにらみつけ、その背後に陰気な兵士の小さい集団を従えていた。

## 11. トロイの木馬

決闘ではフェイント攻撃に注意せよ。危険極まる仕掛けであり、真の致命的な一撃への道を開くのだ。

——銃士ダルトニアン

そうなのよ、トマス・ヤングは前代未聞のごまかしを通じて私たちから逃れたの。とんでもない百面相で、各種の技芸に精通し、それを使って見事なトリックや仕掛けを作り出して、常に私たちの一步先を行っていた。

たとえば、諜報以外の主要補助アクションは、太陽系解放組織 SLO の支援、訓練、指導なのを知っていた。そして、いやはやこの名称のミスダイレクションときたら！ SLO は解放を目指していた。何からの？ 怒れる落伍者どもが、そのフラストレーションの原因をなすりつけるあらゆるものからの。共和党主義、資本主義、社会主義、マルクス主義、なんでもなんでも、すべて引き倒してソーラーがハシゴのてっぺんに我々が登る正統なる権利を邪魔させないようにしろ。

実は SLO は、テロルという鈍器を使って政治的、法的な安定性を破壊し、太陽系をかつての貴族と奴隷の古き良き時代に戻そうとする、封建精神豊かなジンク貴族たちがしかけた階級戦争の、おめでたい武器なのでした。ヤングとこれをつなぐのは不可能だった。彼の SLO リクルートと訓練は、タイタンの闘犬ドームで行われていたからだ。

SLO への潜入は、たった一度だけ成功したことがあり、いまや我が大嫌いな岡目八目で見ると、その悲惨な結果は予想すべきだったのがわかる。最も優秀で最もタフな作員の一人——ファイル名「テリア」——をブリスベーン・ドームに送りこみ、そこで彼は戦い、荒れ狂い、殺しまくって注目を集め、リクルートされた。テリエは任務で必要ならば無慈悲になれる。

テロリスト能力の推定方法の一つは、「ブラックルーム」と呼ばれるものだ。候補者はケツむき出しのすっぱだかにヒン剥かれて、メモを取れないようにしたうえ、懐中電灯を渡されて真っ暗な部屋に入れられる。それは通常の家具付き居間のシミュレーションで、五分でそれを検分し、その中にあるものをすべて記憶するよう言われる。

出てくると、意識記憶が試験される。椅子は何脚、絵画、テーブル、ランプ、窓等々。記憶しろと言われるのがそれだ。それから無意識記憶がチェックされる。椅子にはカバーがかかっていたか、どんな布か、テーブル上にランプがあったか、どんなスーツが見えていたか、絵に描かれた風景は、ランプシェードやカーテンの様子など、記憶しろと言われない各種の細部だ。

テリエは中に入り、規定通り五分過ぎて記憶し、出てくるとすぐに殺された。クソつたれのヤング！ ブラックルームはブラックライトで照らされており、彼の肌にはほどこされた、目に見えないテラガルダイの ID 刺青の埋没傷が、スキャナーにはっきり出てしまったのだ。ちくしょう！ 予想すべきだった。この事実を学んだのはずっと後になってからだった。その当時わかったのは、最高の作業者が消えてしまい、<sup>シュブルロス・フェアシュヴィンデン</sup> 跡形もなく消えうせたというだけで、おかげでヤングの監視はテラでやるしかなくなり、そこであいつは別のインチキトリックを思いつきやがったのだ。

彼の動きを監視していたけれど、向こうもそれは百も承知だった。こっちは彼の「承知」を承知していた。彼はこっちの「承知」の「承知」を承知していた、というのが果てしなく続く。この稼業はそういうもの。こっちの基本は、ヤツがテラを離れる動きを見せたら、何か口実を作ってそれを止めるということだった。向こうもそれを確実に知っていたわけではないけれど、向こうもトリトンでは同じことをやっただろうから、ニューヨークでもその可能性について準備はしていたってわけ。

私は大学の地球外生物学部の向かいにある、最上階のアパートを占拠して、そこにガルダの作業者、ファイル名「モーゼス婆さん」を置いた。彼女はヤツの出入りを監視して、短波で本部に通知した。そうすれば作業者に建物に見張りをさせて、ヤツが出てくるのを待つなんていう時間の無駄をしなくてすむから。通俗小説とはちがって、我々は一度に複数の事件を扱っている。私はオーケストラを指揮していて、そこでみんなは楽器を二つも三つも兼業しているってわけ。

満州人はバカではないし、その敏感なアンテナは婆ちゃんについて警告を発していた。もちろんヤツは尻尾を出さなかった。おもしろがるご近所が、いつも窓から覗いているお節介な婆さんを扱うのと同じ態度をとった。まずは彼女に百面相をしてみせて、それからにっこりして、そして親しげなふりをして手をふるのだ。私は婆さんに、気の良い世話焼き風にやれと指示しておいたので、彼女も同じように相手に返した。やがて両者は、身ぶりでちょっとした会話をかわすようになっていた。

ところが今朝になって、前代未聞のことが起きた。トマスがいつもの時間に地球外生物学部に出勤し、婆さんが彼の到着を告げて、あと数時間はここにいるだろうと伝え、いつもながら尾行役が休めるようにした。だがオフィスにこもり、ペットのコンピュータと地



球外生物学で遊ぶかわりに、満州人は十階の婆さんの向かいの窓にあらわれ、悲しげに手を振って見せた。婆さんも悲しげにふりかえした。

「ひどい世界だ」と手話で告げて、彼女も同じことを身ぶりで帰しつつ、何事かと不思議に思った。そしてわかった。彼は窓を開け、さよならのキスをして飛び降りた。

婆さんは彼が落ちるのを観て、短波で本部に怒鳴って、階下に駆け下りると、ちょうど作業員三人が、悲鳴を上げる緊急対応部隊のように車で乗りつけたところ。モーゼス婆さんは通りを見た。一同は通りを見た。そしてお互い顔を見合わせた。死体などなかった。何もない。もちろん群集が集まり、そしてそれをかきわけて一同が地球外生物学部の建物に入った頃には、満州人は消えていた。

そう、ヤツは全体未聞の長距離催眠術をしかけやがったのよ。あの手をふったり微笑んだり身ぶりをしたりのやりとりはすべて、婆さんを長距離イリュージョンの一瞬に向けて整えるためのもの。彼は下の通りでのカオスめいた混乱の間に、屋根に上がって無音ヘリで姿を消したのだった。彼は危険なほど手口をいろいろ持っており、はっきり言えば私は格の差を見せつけられたってわけ。



さてトリトンのキタイドームにおける満州貴族とログ・ウィンターに話を戻しますね。天幕の地下室への階段における最初の対決に続いて起きたものは、壮絶だった。武装衛兵三人が、儀礼服ではなく陰悪な黒ずくめで、トマスとログの横を通り、手持ちレーザーで地下室のジंक全員を静かに撃ち殺した。そしてメタノジュールを握りしめて切断された手を、長い茶櫃に並ぶ不活性ヘリウム容器の一つに入れると、向き直って次の命令を待った。

永泰魔公ユン・タイマクンはうなずき、身ぶりをしてウィンターの腕をつかみ、偏った広場まで連れ上げた。そこでは別の殺戮が行われていた。公の黒衣部隊は天幕の守衛も苦力クワリもまとめてレーザーで射殺し、だれも逃がさないようにした。天幕の屋根がまだ燃え、野次馬が安全な窓から見ているうちに、平然と死体を漁っている。満州公は満足げにその様子を眺めた。

ごったがえす通りを、彼はウィンターの肘をしっかりと捕まえて引きずっていった。その満州人以外に、武装隊の三人が護衛をしている。「貴様とその惨めなトロイの木馬ときたら」と嘲笑する。「トルコドームにも内通者がいるくらい、見当がつかなかったのか？ マオリは将来の王にスパイ術の訓練も受けさせたほうがいいようだな、あるいはそれより偽装の訓練が先か。あのトルコジェットを塗ってトーテムポールに仕立てたり、貴様をインディアンの酋長に仕立てたり……片腹痛いわ」

ウィンターは無言だった。

「とはいえ、貴様にも礼は言っておこう、ローグ。確かに<sup>ツェイ・フレイ・タン</sup>齊飛団の活動に導いてはくれたからな——これを詩的に訳すと『盗賊行進チャウダー団』となる。これでメタ密輸を潰せるので、それは貴様の手柄ではあるな。<sup>エオキア</sup>勞駕！ 処刑場を横切って近道をしようか。我々の今朝のショーはご覧になったかな？」

「見た」

「わしに多少なりとも力があれば——サーカスに合図して助けを求めようなどとは夢にも思いなさるなよ、ベイビー——わしに多少なりとも力があれば、そして実際あるんだがな、貴様とサーカスのアシカどもも、あれと同じ処置をうけさせてくれようぞ。旧友が<sup>ミエオチェントウ</sup>瞄准頭を宣告されるのは性にあわぬのでな」

「何だって？」

「文字通りには『頭への狙い』。貴様ら蛮人は『人間アーチェリー』と呼んでおる」とヤングは、ウィンターが呼び込みの演台として使っていた鉄の箱の横で止まり、それを叩いた。「頭だけ出してここに閉じ込めるのだよ。射手が順番にそれに射かけて、死ぬまで続ける。実によい見世物だ」とヤングはウィンターの腕を握りしめたまま、さらに進んだ。「だが最後に一つ音をかけてあげよう、坊や。絞首刑にしてやれず、この箱での処置になったら、最初の矢で貴様が血を流すと同時に、狙撃手にレーザーで貴様の頭を撃ち抜かせよう。二重王 R オグが、一時間も拷問されてほしくはないからな。そんなのは高貴さに欠ける」

「どうも」

「もちろん残りの貴様らの一党は、<sup>イ・ショウ</sup>一手賊とともに車輪で八つ裂きだが、そっちは邪魔するつもりはない。ショーを止めるわけにはいかないからの、何と言ったかな」

「パンとサーカス」とウィンターはつぶやいた。

「トリトンではヒロインとサーカスと言うがな」とヤングは笑い、囚人を厳戒態勢の翡翠の門へと案内した。その門は、黄金板でできた高い丸い壁についている。「貴様はこれから天壇への訪問という栄誉に浴するのだぞ、旧友よ。そこでおまえは至高の存在と相まみえるのだ」。ヤングは鋭く命令を下し、門が開かれた。「この赤い腰布でな、実に威力がある」とヤングはつぶやいた。

黄金の壁の内側には、白い大理石でできた同心円の壇が九層重ねられ、それが中央の石板へと続いていた。ウィンターをそこへ引き上げつつヤングは述べた。「カララからの輸入だよ。それぞれの輪は九つの天のそれぞれを表す。それぞれが 9 の倍数の板でできておる。てっぺんの輪は九枚。その下が十八枚。そして二十七枚、という具合に最低の天まで続くが、それは九の二乗であり、うちのジグな哲学者どもお気に入りの数字だ」

その見事に階層化された壇のてっぺんには中央に石板があった。「これが<sup>シヤンテイ</sup>上地、宇宙の中心なのだ。ここを肉体のまま訪れてみるかね？ 明日には貴様の魂がここの永遠の一部となるのだよ」

二人は共に、宇宙の中心にタチ、すると<sup>シヤンテイ</sup>上地は急降下を始めた。まったく予想外だったのでウィンターはよろめき、ヤングがそれを立たせねばならなかった。

「貴様と見え透いたトロイの木馬ときたら」と彼は笑った。「どんなインチキでもここにつながると言うとは、とんでもないバカだな」

「これは何なんだ？」

「メタ鉱脈への公式入り口」

「冗談だろ！」

「冗談などであるものか」

「全員が？ 労働者も？ 警備員も？ みんな天壇からゾロゾロ出入りするの？」

「いやいや。VIP だけだ。<sup>チヤンテイ</sup>地下の<sup>シヤン</sup>犬ども、坑夫たちはドームの到るところに隠されているシャフトヘッドから出入りさせられる。いまなら貴様に言っても外はないが、あの暴動を仕組んだときのお前は、その一つからほんの 20 メートルのところ<sup>シヤン</sup>にいたのだ」

「そうなのか？ どこなんだ？」

「『快樂天国』の中だよ」

宇宙の中心は、謎めいたドアやハッチを通り過ぎ、駅のように音がこだまする、巨大な控え室で止まった。そこも丸い作りで、その軸がエレベーターのシャフトなのだ。その外周には重いアーチ式の門が十二箇所あり、それぞれ斥候に守られている。彼らはヤングを一瞥して、即座に気をつけの姿勢を取った。

「<sup>チンビン</sup>清平、やすめ」と彼はつぶやいた。そしてウィンターに言った。「またも赤い腰布だよ。これを身につけている者は王族なので畏怖されるのだ。おいで」

「どこへ？」

「メタ鉱山が見たいのではなかったかね？ さっさとくるがいい。心に未解決の謎を抱いたまま吊られてほしくはないからな、ベイビー。そんな冷たいことはしない」。そして<sup>ミン・タイ</sup>永泰魔公、満州貴族は巨大な鋌打ち門を押し開いた。

ウィンターからは驚きの声があふれた。

(現代のパラドックスというのは、宇宙の果てを押し広げる中で、家庭生活はもっと緊密な部分へと閉ざすということね。人間精神は人工の広大さを渴望する——でも、いやでも、巨大な外部空間ではなく巨大な内部空間を求めているの。魂が必要とするのは、自分自身の生活圏——レーベンスラウム——の莫大な征服であり、だからこそ巨大な内部空間は私たちを圧倒するわけ)

彼を苛む致命的な圧力にもかかわらず、ウィンターの精神は圧倒された。そこは水晶の宮殿で、曇った氷河の氷に覆われていた。開いた門から入り込む光は、ヴォールト上のゴシック天井をあらわにして、そこからツララのような鍾乳石が下がっている。それが黒い溶岩の床からそびえる、大量の氷の柱に支えられている。凍り付いた広大な空間に、動かない霧が満ちている。そしてトマスが背後で門を閉じると、あたりは漆黑となったが、それがゆっくりと明るくなって、柱の中で小さなクリスマスの明かりのように輝く、かすかな火の粉が生み出す、炎のような夕方の明かりで照らされた。

トマスはその輝きの一つを叩いた。「メタのノジュールだよ。実は、ここが二世紀前にメタが発見された場所なのだ。当時はほんの細いトンネルだったがな。溶岩の氷結トンネルのことは知っていたよ、もちろん。グネグネした細脈で、ネズミやラットしか通れぬ。だれも興味を示さなかった。精々が観光資源になるくらいだが、トリトンが観光客など決して求めたりしない」

「そう聞いたよ」

「だがある小僧が、シロアリの通路を探検したんだよ。子どもしかもぐりこめないような通路をね。そしてあの溶岩の氷で何か輝くものを見たんだ。そこで、それをゲタで壊し、手をつっこんでメタノジュールを取りだした。小さな宝石だと思ったんだな」

「初めて見たときはぼくもそう思った。小さなオパール」

「もちろんその子は、その宝物を持って家に走って変えた。自分の手が真っ赤な鉄のように燃え始めている理由など考えもしなかった。それで生まれたのがメタだ」

「その子どもはごほうびをもらえたのか？」

「あり得ないだろう。死んだよ。ゆっくり燃えて死んだ。どのみち、ごほうびを上げたくても、何のためにあげるかはわからなかったはずだ。そのバカな子が見つけた、地下の宝が本当は何だったのかを突き止めるのに、うちの科学者連中が何年もかかったのだ」

「じゃあそのバカな子はゆっくり燃えていっただけなのか」

「メタがエネルギー転換を始めたら、新星を止める方法はない」

「その部分を切断しないと」

「その通り」

「なぜか、その子に同情してしまう」

「貴様の内なる野蛮人のこだわりだな。貴様らみんな感傷にとらわれすぎる」

「あんたら選ばれし天上人とちがってな。なぜここにある最後のメタを取り尽くさない？」

「天井を支えるのに、できる限り強度がいる。重さがあまりに大きい……この低重力ですら……ときには支持限界を超えてしまう。そうなったら溶岩が流れ出し、それがここを

満たして通路を塞ぎ、我々が『飛散氷』と呼ぶ珍しい危険現象が生じる。かけらがこの柱から爆発して銃弾のように飛び出すのだ。それで失う苦力どもが何よりも多いくらいだ」

「あ、そう」とウィンターはつぶやき、別の沈黙に陥ったが、これはあまりに意味深だったので、トマス・ヤングの超敏感なアンテナが警告を発した。そしてウィンターを振り向かせ、その顔を炎のような輝きの中で調べようとした。

「待て、おまえの閃きがワシにも感じられるようだが、ローグ」

「閃きって？」

「別の密輸詐欺の手口かな？」

「そうかもしれない。手で一ポンド密輸できるなら、死体の中ならどれだけ運び出せる？ インチキな破片事故をでっちあげて、死体を切り拓き、そこにメタをつめて、哀れな被害者を運び出せばいいだけだ。鳴いたりわめいたりもなし」

「殺人？」

「おまえらジンクどもは、娯楽で人を殺すじゃないか。儲けのために殺すくらい平気だろう」

「そうやって大量に運び出すわけか。なるほど。ノヴァの輝きは何時間もたたないと表に出ない。衛兵には、その死体が四十、五十ポンドものメタを詰め込まれているとはまったくわからない。プロの手口だな。片手の手口は？ 金持ちになりたい一匹オオカミだけしかやるまい。だが系統的な殺しは？ プロだけだ。獲物としてはだれが選ばれると思うね、ローグ？」

「気に食わないやつならだれでも。うるさいやつ。男を振った女。警察と仲良しすぎるヤツならだれでも。インチキ屋。詐欺師。ただ乗り屋……」

「貴様らのマフィアがそれを仕切るのか？」

「おそらく。はっきりとはわからん。ぼくはマオリの王だが、何でも教えてもらえるわけじゃない」

「それでも、またもや貴様にポイントをやらんとな、ローグ」

「ありがとう」

「殺さずにすめばいいんだがな。貴様のシナジーは使える」と満州人は嘆息した。「充分見たな？」

「これがマザー鉱脈すべてってはずはない」

「まさか！ 暗いので見えないだろうが、これは何キロも続いておるのだ。これは展示用に使う、掘り尽くされた古い部分でしかない。貴人訪問のためのショーだ。本物はトンネル、傾斜、鉱床、シャフトで、苦力やクライオ装置だらけだ」トマスは改めて嘆息した。「ではきたまえ、ベイビー。貴様のクソ裁判と処刑をさっさと終えよう。裏切ってこちら

に加われと説得する手間はかけるまい。貴様が生まれつきの跳ねっ返りなのはわかっておる」

ヤングはウィンターの肘の握りを緩めたことはなかった。いまや彼は門に戻り、暗号のノックをした。それが開かれると、控え室の目もくらむ明るさの中にやってきて、ちょうど別の門から苦力団が運び込んでくる巨大な荷造りケース二十個の最後のものを目撃することとなった。そのケースのどれも、深紅の三日月と星がステンシルされている。

ヤングはニヤリとした。「おお、最後のおやつだ。ちょうどトルコの友人たちからの支払いが届いた。アフメト・トロイジは我が最もお気に入りの国だ。決して出荷を遅らせることなく、重さを量る必要もなく、その生のヘロインと大麻は常に最高品質。来る不快感を麻痺させるため、大麻パイプでも何本かやるかね？ ワシらがお情けのトリップと呼んでおるものだ」

だが苦力と衛兵たちが、嬉々とした期待感に満ちてそのケースを開くと、そのそれぞれから武装したマオリ殺し屋が出てきて、危機的な一分間にわたり控え室は殺戮の衝突と叫びが響き渡った。いまや、あっけにとられた満州人の肘を握りしめるのはウィンターの番だった。

「これこそトロイの木馬なんだよ、トムベイビー」と彼は嬉々として、呆然とする男を殺戮するスライスナイフと血の海から振り向かせた。「うちのコマンドー部隊とのランデブーは期待してたが、それをうまくジグれるかは自信がなかった。こんなに手間を省いてくれて、きみにもポイントをあげないとね」

巨大なコマンドー隊長チンチャが、血の斑点と染みをつけたままウィンターに拝謁した。「いま鉦脈を制圧いたしますか？ オパロと兵たちがご指示を待っております」

永泰魔はうめいた。「なんだと？ ワシらの鉦脈を制圧？ 気でも狂ったか。貴様らみんな」とショックから回復した。「いまのうちに降伏しろ、ローク。慈悲はかけてやる」

チンチャは慈悲のかけらもなく、スライスナイフの先端をヤングの喉につきつけた。

「こちらは百人。おまえらの千人でも相手にできる。鉦脈を制圧するぞ」

「あり得ぬ！」

「そしておまえらはこっちの条件で取引するのだ」

「あり得ぬ！」

ナイフは永泰魔公ののどから小さな血の一滴をつつきだしたが、満州人が決してひるまなかったことは言うておかねばならない。チンチャは繰り返した。「我々と取引をするか、さもなければトリトンをメタで小太陽にしてやる。R オグ王がそう命じられたのだ」

ヤングは叫んだ。「正気か、ローク。全人類の終末の日、神々の黄昏を命じたのか？」

「殺しは命じたよ。マオリ・マフィアはそれを最後まで実施する覚悟だ。だがその必要

はないよ、チンチャ」とウィンターは付け加えた。

コマンダー隊長は、ウィンターに厳しい疑いの目を向けた。

ウィンターはニヤリとした。「少なくとも今はね。トリトンの頭領は、ご親切にもご自身を我々の手の内に納めさせてくれた。こっちは満州の死神侯爵を持っていて、鉦山のキングや新星のエースよりもこの札のほうが強い。こいつがいればすべての勝負に勝てる。おまえはメタが手に入るし、ぼくは自分の女が取り戻せる」

「ワシは貴様の手になど落ちておらぬぞ、このバカ者めが！」

「そうかい？ こいつを連れてきてくれ、チーフ。宇宙の中心をぬけるVIPルートで出よう。そしてオパロと連絡を取る」

「ワシをトリトンから連れ出せるなどと思うな、ローグ」

「そうかい？ ではその王族の腰帯をいただくかね、よろしければ。これがぼくと兵たちのパスポートだ」

ヤングはせせら笑った。「愚か者め！ ワシは永泰魔公<sup>ユンタイモクン</sup>だ。腰帯などなくてもすぐにそれとわかる」

「さあいただきますしょう」

「主ロックでワシが一言言えば、お前の百人の部下たちは八つ裂き刑だ。この盗みを諦めろ、ローグ。勝ち目はないぞ。慈悲はかけてやる。約束は守る」

「では鉦山を制圧しますか？」とチンチャがうなった。

「いや、コイツを制圧する」

## 12. トリトンのにらみ合い

敵との面談では、すべてを穏やかで好意的な雰囲気で行うべし。勇気は鋭く保ちつつ、剣と同じくらい洗練された態度を保つべし。

——リチャード・プリンスレー・シェリダン

ええ、死の永公をキタイの主ロックから連れ出して、トリトンから運び去ったわ、ことさら面倒もなしに。実のところ、満州人は一言も喋れなかったの。そもそも、GABA(バーブのガルダ・サービスキットに入っていたガンマアミノ酪酸)で完全なヤク漬け状態。これを使えばガニメデのマンモスだって、パテみたいに扱い安くなる。そして次に、彼を元のマオリの曲芸師のかわりにエジプト産ミイラの包みに入れて運んだわけ。見られることも聞かれることもない。よいこの死の貴族らしくってわけね。

でもジェットでガニメデに運ぶべく、包みを解いたときにはそれほど天使らしくはなかった。GABAは4-5時間で切れるし、積もった熱情が一気に戻ってくる。宇宙ではあなたの叫びはだれにも聞こえないけれど、ヤングは自分の小区画の壁を狂ったように脚で叩きつけ、ジェット全体を楽しませてくれた。まるでコンサートのパーカッションソロさながら。

「靴を脱がせるべきだったな」とウィンター。

「頭を壁にぶつけ出す前に、落ち着かせたほうがいいね。交渉前には、多少なりとも正気で責任能力がある状態にしておきたいから」とバーブが助言した。

ウィンターは嫌々ながらもうなずいた。彼はこれまでに取り組んだ、最もデリケートで潜在的に爆発的なパターンに直面していた。既知の物理的な拷問では一切屈服させられない、侮りがたい敵、七十五年にわたり生と死を支配してきた、無敵の相手から、どのおうに譲歩を説得、魅了、そして/あるいは脅し取ればいいのかのだろうか？

「不動の物体ってわけか。そしてこちらは抵抗しがたい力ってわけじゃない」

満州人から得たい譲歩はわかっていた。マオリ・マフィア向けには鉄壁のメタ取引——オパロの協力を得るためにそれは約束してあった——と、自分向けにはチタニア人ガールフレンドの安全な返還。問題は、天の現状への復帰と、太陽系内の夷狄どもへの恐ろしい



処罰だけを懇願する人質から、それをどうやってシナジリ出すかだ。

「十二戒を使うんだな、ベイビー、それが一体何なのかは知らんが」と彼はつぶやき、ハッチを開錠して小区画の中に入った。

「おはよう、おはよう、おはようございます、ヤングさん」と楽しげに歌って見せる。「いらっしゃい、いらっしゃい、いらっしゃい、そしてようこそ、船上にようこそ。ぼくの名前はウィンター——人呼んでキラキラ・ウィンター——、クルーズ担当で、あなたのご旅行を、楽しい船の楽しい旅にするのがぼくの楽しい仕事なんです。さてすでに、お昼ご飯のときにあなたに美人コンテストの審判になってもらうことにしましたよ——美しい美女が十人、ヒキワケになったら審査員へのサービス次第、ハッハッハ——卓球チャンピオンシップ、ちょっとしたダンスパーティー、さらに——」

ヤングは鼻を鳴らした。

「傷ついてる、トム？」

ヤングは鼻を鳴らした。

「おもしろくないか、え？」

「まったく」

「まあ精々やってみたのは認めてくれよな。船員によれば、ご不満があたりとか」

「そんなことばでは足りぬ」

「かんかん？」

「まだ近い」

「はらわた煮えくりかえる？」

「摂氏二千度で」

「ぼくと一族に永遠の恐怖を誓ってる？」

「その通り」

「あんたの言う恐怖って何、トム？ おみ足で我らを踏み殺す？」

「面倒すぎる」

「絞首刑？」

「すばやすぎる」

「八つ裂き？」

「まだ速すぎる」

「人間アーチェリー？」

「あっさりすぎる」

「恐怖の種が尽きてきたな」

「貴様らマオリの蛮族どもは独自のアイデアがないのか？」

「そいつは興味深いね、トム。ぼくたちは、きみたち天上人なら単純すぎると思うものに回帰したんだ。余計な手間をかけた殺しなど信じない。すぐ殺すのがこちらのやり方。鉦脈でそれは見ただろう。ザクッ、ザクッ、そしてバイバイ」

「ならワシを何のために活かしてあるのだ？」

「あんたを殺すなんて一言も言ってないだろ」

「ではなぜ拐かした？」

「分かるだろう、トム。きみなしではトリトンからジグれなかった」

「なんだと？ ミイラのようにくるまれて？ 怒りに溺れていなければ笑うところだ」

「あんたの怒り？ 我々の？」

「両方」

「おお、だがあんたの怒りがこちらの怒りを生んだ。共感魔術かね？ そしてあんたの腰帯が権威を与えてくれた。ちなみに、ここにあるよ、お礼をこめて返そう。うちのちっちゃい殺し屋女が、洗ってアイロンかけてくれたよ。彼女をアフメト・トロイジから受けついただかもしれないね、トム。おめでとう、でもホタテ貝殻には気をつけて」

「ハ、ハ、ハ」

「怒りが笑った？」

「おいローグ、いったい何が望みだ？」

「わかってるだろうに」

「直接聞きたい」

「いや、ぼくたちは仲良くしたいだけだよ、トム。相互行進チャウダー団だ」

「ぼくたちとはだれだ？」

「マオリとジンク」

「貴様の言う相互とは？」

「聖なることば、歌や物語で崇拜されるもの……絆。結婚と離婚のちがいだね」

「くだらぬ、くだらぬ！」

「まじめに言おうか、トム」

「貴様にまじめなときなどないだろう」

「では実務的に？」

「やってみろ」

「メタのパートナーシップがほしい」

「なんだと？」

「この交渉はマオリのためだけ、太陽系なんぎクソ食らえ。太陽系の他の部分は好きなだけむしればいいが、ぼくたちはダメだ。きみたちとメタのパートナーシップがほしい。」

いっしょに働き、指揮するのはきみだ、トム。こちらのほしい分のメタは、原価に定率上乗せ方式でよこせ。ジंकが帳簿をつける。真面目で実務的なビジネスだ」

「あり得ぬ」

「まあ聞いてくれ。あんたらの市場として、マオリなんて小さなものだろう。一パーセントに満たない。失うのはそれだけ。かわりに何が手に入る？ その十倍だ。こちらは密輸をやめるからね。きみたちにとって、どれだけ節約になる？ なあトム、双方にとって、すごくお得な取引だぜ」

「あり得ぬ」

「ジグジーズ、きみたちの天意は計りがたいものだね、とりつく島もない。なぜあり得ぬ？ それも2回も？」

「貴様が密輸の終わらせ方を示してくれたからだ」

「ベイビー、ベイビー、マフィアは必ず新しい改善版のインチキを思いつくぜ」

「そしてそのクソマフィアどもは、どのみちこちらをぼったくる」

「どうやって？」

「こちらが原価定率上乗せでメタを供給したら、マフィアはそれを太陽系に密売して、暴利を貪る」

「確かに。もっともな点でよくわかるが、答は次の通り。マフィアがそちらに加わるかわりに、きみがマフィアに加わり、きみがいっしょに楽しく永遠に泥棒を続けられる！」

「気でも違ったか」

「なぜ？ きみに取っては、またも補助的な役割でしかない。オデッサ・パートリッジ——きみに心からの畏怖を送るってさ——はソーホー・ヤングの手口と、きみのやってたおとり職員詐欺について全部話してくれた。だからいまやマフィア詐欺を運営して取り分を懐に入れたらいい」

「そして貴様が自分の取り分を手放すと信じるとでも？」

「手放すって何を？ ぼくはマオリの二重殺し王で、それですら重荷すぎるくらい。密売なんか絶対関わりたくないね。全部やるよ」

「貴様の手を借りずとも全部手に入る」

「ぼくのお客でいるうちは無理だね」

「ワシの釈放も取引の内なのか？」

「もちろん」

「他には？」

「ぼくの彼女を帰せ」

「貴様の彼女？」

「ぼくのチタニア人。彼女の妊娠を診察しようと言ったね？ 忘れた？」

「彼女は持っておらぬ」

「それは知ってるが、きみの作業者が彼女の居場所を知っていて、手を出せないんだというシナジー直観があるんだ。そうなのか？ 正直に言ってくれよ、トム。係っているものが多すぎる」

「貴様にそれで何の得がある？」

「居場所がわかれば取り戻せる。隠れ場所を知ってるか？ どうだ？」

「知っている事実だ。それがこちらの勝ち札だ」

「そうかも。そうかもね。まずはビジネス」

「断る」

「何を断る？ メタ？ 釈放？ 彼女？」

「貴様とはどんな意味でも、どんな時期でも協力せぬ。さあ貴様にどんな札が切れる？ 死か？」

「問題外だ、トム。そっちがこちらを必要とするのと同様、こっちもきみが必要だ」

「拷問？」

「あり得る」

「オデッサ・パートリッジは、ワシが別の変装をしているときに、ガニメデのズルー族につかまり、情報をあぶり出そうとしてジャングルグリルにあわせたときの話をしたかな？ だができなかった」

「信じるよ」

「ワシを吐かせる拷問は発明されておらぬ。しかもかなり残虐なものも受けてきた」

「確かに挑戦しがいがある」

「こちらの望むもの以外は何も引き出せぬ」

「何が望みなんだ、トム？ 求める代償は？」

「貴様のドームに暖炉はあるか？」

「これは交渉か、ただのおしゃべりなのか？」

「あるのか？」

「王宮と部族酋長のオパロ、チンチャとかだけだ。ステータスシンボル以上のものじゃない」

「炉端にはシロクマのじゅうたんか？ 頭丸ごとと白い毛皮？」

「マンモスだ。あまり魅力的ではない」

「ワシはデルフトタイルの暖炉を持っており。その炉端の絨毯として、貴様の頭と皮がほしい。さらに最後に、生き皮を剥がれたおまえの身体から頭を切り落としてほしい。ゆ

っくりと！」

「そしてぼくがBフラットマイナーで叫ぶ？ どうもなんだか、きみにあまり好かれていないような気がするなあ」

「いやもっといいのは——あのガルダ女がワシに注射したのは何だ？」

「GABA 派生物だ。諜報部はあれを使って、ガラガラヘビでもテーブルの上で大人しくするくらい親しみやすくしてくれる」

「もっといいのは、貴様をその GABA 漬けにして、生きた身体をそのまま暖炉のじゅうたんにしてやる」

「現実的になろうよ、トム。あんたの蹄の下にいつまでも転がってはいられないよ。食餌もいるし、ときどきトイレにも連れてってくれないと」

「いやいや。大小便をたらしたら、貴様のマオリ豚どもがそれをきれいに舐め取るのだ。そしておまえはそいつらの生肉をくらう」

「ひゃあ！ そいつはひどいね。人肉食か。一つたのみをきいてくれ。まずはあのちっちゃな洗濯娘を喰わせてくれ。すでに彼女のケツは味わったからね。覚えているだろう——あのセクシーなベリーダンサーだよ——それともオカマすぎて覚えてないか」

「ザグリおろう、ログ！」

「いや別に秘密でもなんでもない。前から知ってたよ。ぼくのお気に入りの隠れゲイだが、残念無念、残酷ながら、汝の名はオカマなり。ウィリアム・シェイクスピアにはお詫びを。ハムレットは芸だったと思う？ あのビョーキのマザコンぶり……」

「ちくしょうめ、貴様を——」

「そしていまやコンピュータは半分有機だから——あのテラのあんたのタンク、愛憎関係を続けてる細工は——ちゅばちゅばしてくれるんだろ？」

「貴様よくも！」

「図星のようだね。すばらしいよな？ 準人間コンピュータと接続できるようになったから——うちのワークショップのタンクはまちがいなくぼくより生き活きしてるんだ——それと情事も持てるってわけだ。ラジオ、電話、電信でも絆が持てる。あんたの細工にしゃぶらせるのは、トリトンにいるときは短波を使うのか？」

「誓って、貴様を永遠になぶり殺してやる」

「そうでちゅか、おぼちゃん？ あんたの拷問方法のヒントをくれてありがとう」。突然ウィンターは冷たい鉄のようになった。「最後の一周だぞ、満州人。メタは妥結？」

「決して」

「彼女の居場所は？」

「決して」

「ズルー族にはどのくらい焼かれた？」

「一週間」

「それでも折れなかった？」

「決して」

「一週間で吐かせてやる、満州人。しかも手をつかわずに」

## 13. 吊られた男のバラッド

悔りがたい敵の侮辱が、秘密ゴシップの網の目と  
コンピュータの崇拜に満ちた同伴を通じてお互いを  
求める恋人同士の探索につながる物語

——著者

ニューヨーク動物園

提供

生き物サーカス

出演

善玉ゴリラ

困惑するクマ

心配するオオカミ

迷えるメガネザル

追放されたオランウータン

気さくなアシカ

脱ぎたがりのゾウ

偽善者ハイエナ

石割屋カワウソ

たかり屋マンモス

チキン  
臆病なニワトリ

そして

主演は

興行主、人の姿の悪鬼

製作総指揮

## ニジェレ・イングランド

(製作者お呼び劇場経営陣は、  
エコ劇場プロデューサー太陽系連盟会員です)

### 入場無料

(大人は子どもの同伴が必要)

消防通知：考えなしの連中が公演中および休憩中に禁止区域で蓄え、大麻パイプ、水パイプに点火してちょっと一服してお客様を苛立たせ他人の安全を阻害する。これは市条例違反であり法的に処罰される。

この薄汚い腐った興行主(氏ね氏ね!)は優しい無害な動物たちを拷問し(ウー、アー!)火の輪くぐりをさせ、灼熱の鞭を使ってジャグリングさせ、へんな仕掛けに乗らせるんだ(ブー!、シュー!グルルル)そこへ決然としたサルが反乱(イエーイ!)、さらに他の動物たちが反乱に加わる(「世界の生き物たち団結背よ!失うものはおまえの鎖以外何もない!」)。邪悪な興行主は制圧され(爆笑!)そして自分の鞭で彼らの曲芸を演じる羽目になる(大拍手!エクスタシー!)

カーテンが下りると、裏方たちがセットや書き割り、実物大マリオネットを次の公演に向けて並べ直す。ただ興行主の人形だけがワイヤのついたまま舞台裏の楽屋に歩かされ、そこではアルビノ獣医のナイジェレ・イングランドとログ・ウィンターがお待ちかね。

ニジェレがワイヤをはずし、鍼治療の針を人形の身体の催眠性制御スポットから外す横で、ウィンターは言った。「今朝はなかなかいい演技だったよ。昨晚より改善した。ずっとよくなった。本当に役柄をモノにしてきたね。笑い40回、爆笑10回だったぜ」

永泰魔公<sup>ユン・タイマクン</sup>、ジnkの官僚ナンバーワンにして、満州の生と死の貴族は、どうすることもできずに顔をしかめた。

「きみはこの役にぴったりだよ。子どもたちはきみを嫌うのが大好き。ニグは、きみがここ何年でも最高のアトラクションだって言ってるよ」

「ワシが……貴様を……なんとか……」

「ほらほら! 役者のかんしゃくはよしておくれよ、トム。役柄で遊んじゃいけない。録画公演用に鍼を打たれてるんだから、脚本からずれないでくれよ。ショーが第一」

「これ、いつまでも続けるわけには行かないわよ、ログ。舞台の間に休憩はさんでも、いずれは重要な体液がつきて植物状態になるわ」とニジェレ。

「一週間あれば、こいつの自尊心を叩き潰せるんだ、ニグ。どんなオカマでも虚栄心は



そこまで持ちこたえられない」

そして

主演は

興行主、顔を歪める悪鬼

「トム、今夜は本当にすばらしかった。あの善玉ゴリラが熱いレンガをきみのケツに押し込んだときには、きみの苦痛の悲鳴で会場中が大爆笑したよ」

永泰魔公<sup>ユン・タイモククン</sup>、ジnkの官僚ナンバーワンにして、満州の生と死の貴族は、どうすることもできずににらみつけた。

「うんわかるよ、脚本を書き換えてるよね。でもわかってくれよ、トム。偉大な脚本は書かれるんじゃない。書き直されるんだ。それがショービジネス」

そして

主演は

興行主、歯噛みする悪鬼

「あの気さくなアシカが、火の輪をくぐったきみの口にサーディンを放り込むという余計な芸が本当にいいのかどうかはわからんね、トム。それと脱ぎたがり屋があんなふうに着込んでウソをきみにぶちまけるのは絶対反対だ。悪趣味だよ。最悪。やめるべきだな、子どもたちには大人気でも。」

でも心配すんなって、ベイビー。ニグ・エングランドは明日に脚本会議を予定してるので、何とかするよ。西海岸からギャグ作家を何人かつれてくるかも。何か提案は？ 仕事をしたい脚本家とか？」

永泰魔公<sup>ユン・タイモククン</sup>、ジnkの官僚ナンバーワンにして、満州の生と死の貴族は、どうすることもできずにうめいた。

そして

主演は

興行主、泣き言まみれの悪鬼

「すごいニュースだよ、トム！ 見出しを飾った！ きみはカルト的存在になったよ。子どもたちは太陽系そこら中で、興行真似っこクラブを始めてる。きみの写真を身につけてる——善玉ゴリラがレンガをきみのケツに突っ込んでるすごいショット——そして赤い鞭をテニするんだ。ブルジーンズをブルー悪鬼<sup>ふいーんず</sup>と呼んでる。何よりも、大量の大人がきみの写真に気がついて、なぜ有名な地球外生物学者がこんな道化をやっているのか知りたがってる。」

トリトンは、その天の貴族様が動物園のショーで汚れ役を演じてるとは信じられないので、直接見にくるってさ。きみはスターだよ、ベイビー。サイン会のプログラムもしないと」

ユン・タイモくん  
永泰魔公、ジnkの官僚ナンバーワンにして、満州の生と死の貴族は、どうすることもできずにすすり泣いた。

そして

主演は

興行主、芸能界入りの悪鬼

「さあそれでは紳士淑女の皆様、人間、人々、ハイブリッドの皆さんも、ハハハハ、到るところで生きて元気、ハハハハ、ニューヨーク動物園から太陽系のあらゆる隅々まで、SBC-TV がバラエティ史上最新最高最カワイイ最悪漢の道化を、最新のまっさらの下品で邪悪で恨みがましく憎悪まみれのバラエティミニシリーズでお届けし、そのスターはみなさんが大好きなほど嫌いな御仁——リンギー・ディング・うんこショーの興行主です！」

「あと五分です、ヤングさん。オンステージで」

「ギグ、トムベイビー。ワイヤつけてプログラムしてみんなをあっと言わせようぜ。あんたとトリトンはすごく有名になってキャッチフレーズになるんだ。そしたらぼくは、あんたがタダの死の貴族だったときから知り合いだったと言える。だから……レッツゴー。ご幸運を。クソッ。脚を折りな……」

「コン……ピュー……ター……」 満州人がうめいた。

「なに、ベイビー？」

「コン……ピュー……ター……知ってる……」

「コンピュータが知ってる？」

「そ……」

「コンピュータが何を知ってるだ？ 急げトム。あと三分で出演だ」

「どこ……貴様……彼女が……」

「どこ貴様彼女？ どこに貴様の彼女がいるか？ コンピュータがぼくのチタニア人の隠れ場所を知ってるって？ きみの兵たちにも手が出せないところ？」

「そ……」

「どのコンピュータ？ どこ？」

「……」

「頼む、トム。ふざけないでくれ。太陽系には何百万もタンクがある。デミがいるのは具体的にどのコンピュータなんだ？」

「……」

「しっかりしろ、この野郎！ もう手札はない。小賢しい真似はするな。吐け。どのコンピュータでどこにある？」

「……」

「無駄よ、ログ」とニジェレ。「無理。完全に干上がってる……もう純粋な人形。意識ある自我を取り戻すのにいつまでかかることやら」

「そうだな。ショー用にワイヤつけるしかないか。このロクデナシにも感心させられたよ。六日も耐えた。それと自分にも感心だ。手を使わずこいつを屈服させた……でも結局手がかりなしだ、ワラが多すぎるせいで」

「何ですって？」

「一筋のワラをもつかむ、そのワラが多すぎるんだ、ニグ。まずはそのクソなコンピュータを見つけるんだが、それがどこのタンクかもしれない。そしてそいつが本当のことを言うかもわからない」

「コンピュータはウソはつけないわ」

「半分生きてるんだろ。生き物で、なんやかんやでウソをつかないものを一つでも挙げてくださいよ」

「そうプログラミングされてれば」

「そしてこの満州のタコが、デミが自分を隠した場所を知ってるタンクをそうプログラミングしなかったとも限らないだろ？ パスワードのコードをキーインしないと真実を語らないようにしてあるとかさ」

「確かに悩ましいわね」

「そして、タンクが探す場所を教えてくれても、実際に見つけるのはさらに悩ましい」

「どうやるつもり？」

「常識だよ、ニグ。死の貴族が兵たちに探すべき場所を教えられて、それでも捕まえられないなら、まったくアクセス不能なはずだ。オイ、ヴェー、クソッタレ！ おいらの<sup>エストマク</sup>おなかに<sup>ツイベレス</sup>カイヨウできそう！」



ログとデミが、お互いを探してニューヨークの街路をうろつくというバカげた妄想を私は抱いてるの。二人が出会う確率は何兆億に一つ。彼がダウンタウンを探しているときに彼女はアップタウンに向かい、彼女が東に向かうと彼は西に向かうから。

でもこの私のバカなドラマでは、たまたま同じ町角を反対側からやってきて、あらゆる確率を乗り越えて二人は出会いかけるのよ。ただその瞬間に巨大な劇場の看板が角の歩道

におろされて、電球を換える。ローグは看板の外側を歩き、デミは内側を通り、二人は決して会わない。その看板の広告は：「運命——ただいま宝物劇場で上演中」

でもこのバカげた笑劇は、二人が後に私に告白してくれた現実に触発されてるの。二人とも、名誉あるコンピュータ群のネットワークを通じてお互いを探していたんだけど、これは都市の街路よりはるかに迷路じみてるんだから。

コンピュータ技術は最も予想外の形で義肢を逆転させてしまったのよ。義肢というのは、身体の血管を置き換えるための人口部品追加のこと。エンジニアたちは、コンピュータに有機部品を追加すると、それを単なる電光石火の加算機から、半分生きた存在に変えられることを発見したわけ。でもだれも予想しなかった副作用として、タンクは絡み合う一大おしゃべりと化したということ。

デミ・ジェルーはその絡み合いの中から、ウィンターを探索してた。コンピュータのセミ生命がコンピュータのおしゃべりを通してどんなふうに見るかご覧なさい。

```
!PRINT "ALL POINTS BULLETIN = APB"
```

```
APB
```

```
!PRINT "ROGUE WINTER = ROG"
```

```
ROG
```

```
!PRINT "R-OG UINTA = ROGUE WINTER = ROG"
```

```
ROG
```

```
!PRINT "TERRA = T"
```

```
T
```

```
!PRINT "GANYMEDE = G"
```

```
G
```

```
@PRINT "TRITON = TT"
```

```
TT
```

```
READY
```

```
!
```

```
APB ROG TGTT
```

```
T
```

```
?T
```

```
?
```

```
900 REM***SEARCH GENERATOR***
```

```

1000   CLS
1010   INPUT "COMPUTERS (C)"; A$
1020   INPUT "ANALOG & DIGITAL (A,D)"; #
1030   CLS: IF A$ = "A" OR A$ = "D" THEN#= INFORM
1040   IF # = "N" INFORM
1050   IF#= "D" INFORM

                                PRINT APB LOCATION ROG
                                NO SIGNIFIES 'NUMBER'

1060

                                0 SIGNIFIES 'ZERO'
                                0 IS A NUMBER
                                NO = R-OG UINTA
                                NO = ROGUE WINTER
                                0 = NO R-OG UINTA
                                0 = NO ROGUE WINTER

1070   THANKS LOADS A HEAP & YOU ARE N = NERD

!!           REM***MAIN PROGRAM - ROG CAPTURE***
10           GOSUB 1000 ROGUE WINTER
20           GOSUB 2000 R-OG UINTA
30           ROG = "RANDOM = R"
40           ROG APB= R"
50           GOSUB TERRA "T"; GOSUB GANYMEDE "G"
60           IF ROG = "T" THEN APB "T"
70           GOSUB APB ROG TGTT JUST IN CASE
           IF NO = 0 & 0 = NO ROGUE WINTER THEN
80           WHERE?

                                LOOKING FOR YOU STUPID
                                AND YOU CAN STICK 1070

```

その一方でウィンターはこのパーティー会話の外で作業をして、デミの隠れ家のヒントを求めてそれを調べようとしたのだけれど、その絡み合いのネットワーク自体が独自の秘密を持っているとはまったく気がつかなかったのね。大量のコンピュータタンクを尋問





これであたしのアクセス不能な隠れ家のすべてを知ったからには、ログがボザールのアパートに怒って疲れ切って戻った時に、あたしがログの言ったりやったりしたことすべてをどうして知っていたか、わかるはずよ、オデッサ。

盗み聞きしてたのよ、それは確か。でも恋する乙女にはその権利があるの。「戦争と愛では何でも許される」と言ったのはだれだっけ？ フランシスとかいう詩人だったと思うフランシス・スコット・キーじゃない、フランシス・スメドレー、メアリーマウントの寮のすぐ外で、「スターとバー・ソーダ・ソラリアム(シングルなし)」を経営してた人でもない。

ログはニグ・イングランドからあたしのサイキヤット(名前は「ココ」よ)を回収して、フラストレーションをあの子にぶちまけてたわ。ココはもちろん彼の首にしがみついてて、満足げにのどを鳴らしてた。ちょっとうらやましかったのは認める。あたしもそうしたかったから。でもログはサプライズの準備を慎重にしてあげないと。マオリのマッチョなプライド、特に二重殺し王のプライドはすぐに炎上するから。

とにかくあの人、グチってたのよ。「まったくマダム、トリトンのタンクも連中の大使館で試したんだよ。こっちが向こうの大切なお偉いさんを持ってるので、これ以上ないほど協力的だからね。それから『ソーラー・メディア』のやつ。失踪人登録用のもの。彼女のアパートのやつ。彼女が有料アカウント持ってるところすべて。それからアリタリア、ユナイテッド、トランスソーラー、ジェットフランス、パンソル。ヴァージニアまでの長距離列車。オデッサ・パートリッジとその諜報機構。トム・ヤングの地球外生物学部の細工。エレクトロネンレヒネル、オルディナテュール、カルコラトーレス、コムハリーム、そしてあのエルサレムにある、古いオリジナルのゴーレム 1 コンピュータまで試した。どこも何もなし。ゼロ。ヌル。ナダ。手詰まりだ！」

あの人、ジャンプスーツの襟元を緩めて、それを開いてあたしのサイキヤットがのどにまわりつけるようにしたわ。それから苛立ったようにアパート内を探索して、あたしが使った家具をすべて検分し、あたしが見た絵や本をすべて調べ、あたしの触ったガラクタやおみやげも見たわ。一度もいっしょに入る機会のなかった、長さ 180 センチのバスタブ。いっしょに使った日本っぽいベッド。それからワークショップに入って、神経シナプスされたコンピュータのスイッチを入れようとしたの。でもすでに点いていた。

「どうかしてる。夢遊病かなんかで入れたのかな……いやおまえか、ネコちゃん？」

「スプクルルル」というのは答なし。

でもアパート中につけた、タンクの補助ビデオ画面は起動して、第二の自分と論争する

間にさまよいつつ、それがどんな答を表示するか見られるようにしたわ。その画面に、あたしたちふたりが居間のソファにすわって、あの初夜にお互いに話をしているところが表示されたので、あの人ったら戸惑っちゃって。

「でもあの初夜にはコンピュータは起動してなかった。それは誓ってもいい」

ローグ

ぼくのどこが気に入ったの？

デミ

いつのこと？

ローグ

きみが初めて『ソーラー』に出社したとき

デミ

なんで気に入られたと思ったのかしら？

ローグ

お昼をいっしょに食べたがってくれたから

デミ

そのすごい熱意よ

ローグ

具体的には何への熱意？

デミ

スキーロッジで全員がふりむく、洗練された美女ミスティーク・ド・カリスマ

ローグ

ミスティーク・ド・カリスマなんていないぞ

デミ

そこが気に入ったのよ

「でも全然そんな会話じゃなかったぞ、あのぼくたちの初夜には。みんなまるっきりひっくり返ってる！」

デミ

ミスティークのサイン入り裸身ショットが欲しい？ 『メディア』のアート部門に偽造してもらえるけど



ローグ

結構だね。きみからは偽造ヌード以上のものがほしい。

デミ

あらマッチョになってきたわね。女の子をモノにしたから、本性あらわしてきたな。

「いったいこのイカレタ錯乱タンクで何が起きてるんだ？ 声や映像は完璧だけど、会話は歪曲されている」

デミ

初めてあたしに『ソーラー』で会ったとき、どこが気に入ったの？

ローグ

誰が気に入ったって言った？

デミ

盗賊みたいに襲ってきて、ランチに誘惑したじゃない……いやもっと誘ったでしょ。

ローグ

きみのゲイぶり。

デミ

あたしがドラァグのオカマだと思ったの？

ローグ

いやいや、陽気さのほうのゲイ。すべてを楽しく愉快にこなすし、まったく予想がつかない。きみは——きみは陽気なたばかり屋だ。

デミ

つまりウソつきってことね。

ローグ

つまりきみが精霊ってこと。

デミ

そう。みんなに「ティンカーベル」って言われる。

ローグ

そしてぼくは妖精を信じてるから。

デミ

妖精を信じる人は拍手をお願いします。

「わかった！ わかった！ タンクは彼女の視点から語ってるのか。彼女の希望的な記憶、

というか、こういうふうに起きてほしかったという願望。ここにネコをおいてどこやら  
ラムりにジグったとき、この宝物を録画したんだろう」

ローグ

こんなの、何であれ出発点としてクソいかれてる。

デミ

どうして？ 楽しく愉快じゃないの？ あたしのそこが気に入ったって言ったじゃない。

ローグ

だれが楽しんでる？

デミ

あたし。

ローグ

だれが愉快？

デミ

あなたの陽気なばかり屋。

ローグ

ではぼくの役柄は？

デミ

耳からのノリで合わせてよ。

ローグ

左耳、それとも右の？

デミ

その真ん中。魂があるのはそこだから。

ローグ

きみはこれまで会った女子の中でいちばんとんでもないな。

デミ

あなたよりマシな男に罵倒されてきましたからね、旦那。

ローグ

どんな男？

デミ

あたしが最悪のものを拒絶してきた男たち。

ローグ

本当かなあ。

デミ

そう、疑惑がないとあなたをコントロールできないから」

ローグ

ちくしょう、格がちがうようだな。

「オドロキモノキ！ この再演は実際のできごととかなり近いぞ。明らかにデミはこの部分が気に入ったのか。どうしてここがそんなに彼女にとって特別だったんだろう」

デミ

あなたがそんなふうだとは夢にも思わなかった。

ローグ

そんなふうって？

デミ

おどおどするの。

ローグ

ぼくが？ おどおど？

デミ

ええ、でも素敵よ。目はあれこれ見ているのに、身体の他の部分はためらってる。

ローグ

そんなはずはない。

デミ

ジョン・ダンの愛の詩は知ってる？

ローグ

いや残念ながら。たぶん落第したんだな、何かの過剰のおかげで。

デミ

ヴァージニア娘はみんなそれを読んでため息をつくの。一つ演じてあげる。

ローグ

こわくなんかないぞ。

デミ

「我がさまよう手を許し、それを行かしめよ、前に、後ろに、間に、上に、下に」

ローグ

こわくなってきた。

デミ

「おお我がアメリカ！我が新大陸、我が王国、乙女が男を得て安らかに  
汝を発見した我はなんと恵まれていることか！」

ローグ

デミ、頼むからやめて。

デミ

「全裸！あらゆる喜びは汝のおかげ、魂が身体遊離するように、肉体は脱衣されねば、  
全き喜びを味わうために」

ローグ

お願いだ……

デミ

「汝に教えんがため、我こそ先に裸身に。今宵、汝が聖霊以外の覆いなど要るだろう  
か？」

ローグ

デミ！

デミ

いらっしゃい、ローグ……

**「ジグジーズ！彼女、あの夜のベッドの中の二人まで、彼女版を録画したのか？」**

ええしましたとも、まさに、暗闇の中で彼は、百の手、口、股間を持つ百人の男のよう  
だった。あたしの息をつまらせる分厚い舌の黒人、あたしの奥底まで震わせる長く深いス  
トロークだった。

汁気に満ち、口があたしの肌から前に、後ろに、間に、上に、下にアルペジオを飲む間  
に耳に睦言をささやき続けた。あたしを獣のように奪い、腹からエクスタシーのうめきを  
むしり取る中で、腹の底からのうなり声をあげる外部世界の動物だった。タフで優しく、  
強引で野蛮で、マッチョ、マッチョ、マッチョ。股間は果てしない痙攣の地震に打ち震え  
た。

それでも、そのすべてを通じてあたしたちは、シャンペンとキャビアをいただきつつ、  
輝く会話を交わし続けたわ。暖炉の前に横たわり初めて愛を交わすエロチックな序曲とし  
て。そして最初のキスの後で彼は、あたしの左手の薬指に指輪をはめてくれたの。ピンク  
黄金の印章リングで、ヴァージニアの州花が彫られた指輪。

ウィンターは思わず立ち上がった。

「暗転！」と半自分に怒鳴った。

画面が消えた。

彼は深く息を吸った。自分が命令を考えたのかもしれないが、いまやコンピュータが自分勝手に動いているのを知り、その理由を思案した。「彼女が指輪のことを知っていたはずはない」とゆっくりつぶやく。「ぼくが買っていたときには、すでにトリトン兵から逃げているところだった。見たこともない。聞いたこともない。ただし……ただし……」とうろつきまわる。「ぼくより偉大なシナジストが言ったように『簡単なことだよ、ワトソンくん』。まさにその通り。そしてぼくは大バカ者だ。ジンのゴリラどもが彼女をつかまえられなかったわけだ」と彼は声を上げた。「プログラム Problem APB デミ・ジェルー Print 絶対アドレス」そしてすわって待った。

何を期待すべきかわからなかった。街路表記か CB コールサインか、あるいは家、オフィス、端末、都市、大陸、衛星、惑星、川、湖、海の画像かも。デミの居所を知っているのは、自分のタンクだったのだ。「絶対アドレス」がコンピュータ業界では、参照オペランドの絶対保存位置を要求するものなのは知っていた。命令の前、後ろ、間、上、下などでごまかす余地はなし。画面が明るくなかったが、確かにこれはまったく予想外だった。

「# \$ ε t')( \*+ : = - ; # .」

「いったいこりゃ何だ？」

「\* #) \$( %' ε t + .」

「何かぼくに言おうとしてる？」

「# \* \$ % \* \*\* ε t \* \* ( \* ) ( .」

「オイ・ヴェー！ わしよいいンディアン、あんただれ？」

「+ = ; \* - 0) 0 ( # ε t = + .」

「これ、何語か教えていただけませんか……語と言うべきものなら」

「, . ; = 0 - \* + : ? #) ( .」

「別のでやってもらえる？ ソララントとか？ TankSpek だってかまわないよ。ほら、いちたすいちが、プログラムされた通りのものになるやつ」

「[ ? ]」

「それは『ノー』？」

「+」

「それは『イエス』？」

「+」

「おお、話が通じはじめた。じゃあ『20の質問』いってみようか。きみは動物？」

「+」

「植物？ その+と[?]を改めて確認したいので」

「+」

「両方なの？ 変化球投げてるなあ。鉱物？」

「+」

「三つとも？ さてこの三つすべてとなると？ 動物、植物、鉱物。人間か？ そうかも。義肢まで考えるならね。義肢を使う人は最近多いから。機械？ そうかも。食べ物？ かもね。調味料の一部は鉱物だ。でも人間はそんな言語はしゃべらない。機械も。じゃあ食べ物か。食べ物！ 味と匂いの美しい言語をしゃべるし——」

ウィンターはまたハッとしました。

混沌とした一瞬の後に、彼は思わず叫んだ。「神よ！ 親愛なる、信頼できる、忠実にして役に立つ、仲良しで親切な神様、汝に感謝いたします、そしていつの日か、お返しに何かいいことをいたします。もちろん！ 簡単なことだよ、我が親愛なるワトソンくん。匂い、味、触覚——チタニア人の化学言語。このタンクはそれを視覚に翻訳しようとしてるんだ、単にそれが味覚や触覚を投影する装置を持っていないからだ。そんなコンピュータはない。いずれ作るべきかもしれない。とにかく、感激した。本当に感激したよ。そんなことができるとは思わなかった。じゃあギグ、プログラムを続けて。全部チタニア語で話してくれ。デミ・ジェルーはいったい全体どこに？」

\*

「ほう？」

\*\*

「ほう」

\*\*

\* \*

「続けて」

\*\*

\* \*

\* \*

「その調子で」

\*\*

\* \*

\* \*

\* \*

「半月かな？ なんか横倒しになってる？」

```
  **
 *      *
 *      *
 *      *
 *      *
  **
```

「円か。わかった。それで？」

```
  **      **
 *      * *      *
 *      *      *
 *      *      *
 *      * *      *
  **      **
```

「円が二つに分割。それで？」

```
  **      **
 *      * *      *
 *      *      *
 *      *      *
 *      * *      *
  **      **
 *      * *      *
 *      *      *
 *      *      *
 *      * *      *
  **      **
```

「今度は四つ？ ちょっと待て。待った。ちょっと。だけ。とにかく。待って。このパターン、ピンとくるな。ピン。ピン。ピンハネ。ピン留め。ピントあわせ。ピンじゃなくてピン。それだ！ 工学部の生物学研究所で道具を覆う、びん状のガラス覆い。細胞が分裂して胞胚に。そして腸胚。胎生学。いま目にしているのはそれか。何かが生まれようとしてる。何が？ どこで？ これって一体何のメッセージ？」

彼は稲妻のような細胞分裂の表示に魅了された。胞胚、腸胚、胎盤……

「なんと！ それがミリ秒単位で進んでる」

外胚葉、中胚葉、内胚葉……

「コンピュータが出産するのはこれが史上初だが、何が生まれるんだ？」

原始条……

興奮のあまり彼はワークショップに入って、最終製品を自分のコンピュータの巨大なブライムビデオでもっとよく見ようとした。その数瞬の間に発達が加速して大団円を迎えた。というのもちょうど部屋に入ったとき、巨大画面が真正面で爆発したからだ。デミ・ジェルーがプラスチックの破片にまみれてコンピュータから飛びだしてきた。丸まっていたが、彼のでっぺんで身体を広げた、裸で、汗まみれで、震えている。

「なんとまあ！」と彼女はあえいだ。「出るのに比べると、入るほうがずっと簡単。怪我はない、ダーリン？」

「大丈夫。もう最高。天にも昇る気分。呆然。よう。ハイ。元気、愛しい人。ハイ、ダーリン妖精。きみみたいないい子が、こんなところで何してるんだい？」

「驚いた？」

「いや全然。ぼくたちにその力があるのは元からわかってたよ。ずっとわかってた」



## 14. テラ・インコグニタ

ア、メエ！二、三世紀前に世界が発見されつつあるときにそこで生きるってのがいかにすごかったことか！当時、人は自然に求愛してたけど、いまや結婚した。あらゆる謎が消え去っちゃった。太陽系は、町々を結ぶ踏み固められた通路と同じくらいおなじみになってしまった。そんなことを信じてるなら、あんたどうかしてるわよ。

——オデッサ・パートリッジ

今回、二人は 180 センチのバスタブをいっしょに出て、水をポタポタ垂らしたまま居間に入った。ソファにすわってコーヒーテーブルに足を投げ出し、あらゆるものに風呂の水をしみこませたが、危機がすべて最終的に解決したので、まったく気にもしなかった。

ウィンターは笑った。「家具やじゅうたんの文句がきみにも聞こえたらね。ゴボツ、ゴボツ。ゴボツ。グルグググルグ。グルウウウグ、グルウウウグ、グルウウグ。何をやっても満足してくれないモノってのはあるからね」

「あたしは満足したモノよ」とデミは顔を輝かせた。波の上に横たわるネレイドのような姿になっていた。流れるような赤毛、緑の目、サンゴのようなピンクの肌。「水中で愛を交わすのがあんな——あんな——」

「あんな何？」

「言えない！ 素敵なヴァージニア娘は決してそんな話をしないから、ことばがないのよ。あなたは、これまでしたことあるの？」

ウィンターは即答した。「何度も。各種の海の下でならず者だったから。海塩、海千山千、海ほたる、海の幸、膿だらけ、潮の海、舞の海——」彼女はそれを叩いて黙らせた。

「そしてあたしの留守中は？」

「留守中は何？」

「わかるでしょ。他にだれかとやった？ 許してあげるから。約束よ」と言って、ホイッ

スラーの母親像のような姿になり始めた。

「いい気になってるんじゃないよ」と彼はニヤリとした。そして真顔になった。「信じてくれよ、愛しい人。みんな尻は追いかける。それは淫らだからじゃなくて、単に目先を変えた新しいものを求めるからにすぎない。娯楽だ。でもきみとは毎回目新しく目先が変わってるから、もう尻を追いかける必要はないんだ。答はノーだよ。自分の娯楽を喜んで待ったんだ。それに、自分のバラエティショーを見つけて取り戻そうとするのに忙しかったからね」



「あなた、あたしのお気に入りのスターシュマイクラーね」と彼女は顔を輝かせ、赤面する乙女の彼女なりのイメージに変身した。「じゃあコンピュータのゴシップ網で報告されてない冒険をすべて聞かせて」

「いや、きみが先だ」

「でもあたしは何も冒険なんかないけど。無理よ、あなたのひっでえ古いタンクに雪隠詰めなんだから」

彼はためらった。「じゃあ、どっちにする、いいほう、悪い方？」

「まず悪いほうから。そっちを先にすませましょう」

彼は真面目くさってうなずいた。そしてゆっくり始めた。「きみには知るよしもないが、トリトンで、連中の恐るべき氷溶岩洞窟に、何時間も何時間も囚われていたんだ。食べ物も、水も、光もなし。それを切り抜けられたのは、きみのことを考えて、きみをもし万が一見つけられたら、いっしょに遊ぶ各種のすばらしくエキサイティングなパターンを夢見ていたからなんだ」

「でも脱出できたんでしょう、ログ、明らかに。どうやって？」

「最後に、ほぼヤケになって、ぼくはマオリの蛮人に対抗し、囚われの獣のように手だけで氷と溶岩をかきむしったんだ。そしてついに、外部に出られるくらいの穴を開けられたんだ。だが……」

「だが何？」

「でも外に出たら自分の影が見えたので、また中に戻りましたとさ」

彼女はちょっと悲鳴をあげた。「このっ、このっ、このっ！信じちゃったじゃないか！ウソつき！意地悪ログうそつき！棺桶に入ってもウソばっか」

「そう、棺桶担ぎの人たちにね。で、きみはどうやってコンピュータに入った？ぼくにしか開かない。他のだれにも明けられないのに。きみの影でも見せたの？」

「そうね、ジnkの殺し屋たちから逃げ出してから——」

「どうやって？」

「目つぶし」

「そんなものを持っていたとは」

「持てなかったけれど、チタニア化学語で『目つぶし』と叫び続けたら、結局同じ効果になったのよ」

「なんとまあ、きみは大した工夫屋だよ」

「まったくね。ええ。あなたと『頭痛を抱える』ことはなくてすみそう。いつも化学で冷やしてあげられるから。といっても唯一無二の我がお星様では、あまりそれもなさそうだけど。とにかく、ネコとここに来て、鍵で中に入って、よく考えたの。あたしが生き延びられて、ジンクどもに二度と攻撃されないところはある？ 思いついたのがあなたのタンクだけだったから、そこに入ったのよ」

「でもぼくしか開けない」

「つけっぱなしだったわよ」

「そうかも。でもぼく以外からの入力を受け付けないだろう。で？ どうやった？」

「なんというか、水晶玉に念じるような」

「水晶玉占いみたいに、ってこと？」

「そんなものね」

「信じられん」

「なんで？ あたしたちは結晶世界からやってきたのよ」

それは認めざるを得なかった。「どんな具合になるの？」

「水晶玉を使う必要ななくて、なんでもいける……インクだまり、水、鏡、ガラス、あなたの指の爪……」

「で？」

「コンピュータ画面を使って意識を集中させたの。何かに意識を埋没させないと」

「それで？」

「画面がミルクっぽくなって、黒くなって、その反射も消えたわ」

「それで？」

「そしたらあなたが見えたの。白黒で、動かず、スチルの写真みたいに」

「それで？」

「やがて色がついて、あなたが動き始めた。熟考しつつ口に出してウロウロするやり方で。映画がゆっくり始まるときみたい」

「声は聞こえた？」

「最初は聞こえなかった。サイレントだった。それから声が聞こえてきた。そして、画面上の映画ではなくなって、本物になったのよ。部屋の脇に立っていてあなたが真ん中にいて、あなたがこっちを見て、あたしがあなたに近寄って——そしてあなたが抱きしめてくれて——そしたらあなたのコンピュータの中」

「どうしてぼくだと確信できた？ ほとんどの人は、ぼくがあまりに融通無碍で、適応性が高いから、本当の礎石がないんだろうと文句を言うんだ……最初の妻ですら」

彼女は唇をかみしめて、自首させられる犯罪者のような顔つきをした。そして「こう言われるとお気に召さないでしょうけれどね、ダーリン。あたしもできれば言いたくないけど、でも……ええ、あなたは深く複雑で適応力あって気分屋で——でもチタニア人から見れば、さほど謎めいてはいないのよ。だから実に多くのチタニア人はテラで暮らしたがるの。テラ人は簡単な算数みたいなものだから、実に暮らしやすいのよ。だからあたしはあなたの人格と個性を再現できて……」

彼女の言う通り、彼としてはまったく気に食わなかったが、何とか自分を抑えた。「それで入ったと。何として？ メモリバンクの『ビット』としてかい？」

「あたしたちはどんな生命体にでも変身できるわ、アメーバからブロントサウルスまで。あなたのタンクには生きた有機交換台があるわね、あなたの感覚を受信して調整するコントロール・ステーションみたいな一種の脳橋。それを複製して、並列でそこに加わったの」

「脳橋のバックアップみたいに？」

「そんなところ」

「そしてタンクの中で元気に暮らし、脳橋と同じ栄養素で生き延びたわけだ」

「そう。ただ乗り寄生虫。ごめんなさいね」

「そしてぼくしかアクセスできない？」

「あなただけ」

「じゃあ、あのろくでもない満州人の死の永公は、きみの居場所をどうやってつきとめたんだ？」

「よくわからないわ。あの人は実に聡明な、珍しいメンサタイプよ。だから演繹したのかも。あるいはあの献身的な地球外コンピュータがゲロったのかも」

「あれは知っていたのか？」

「みんな知ってたわ。あなたのタンクは、手の届く他のあらゆる有機体と接触してるから」

「どうやって？」

「クロストークと通信信号や電力線の搬送帯。あなたのタンクでいろいろ勉強したのよ」

「そして安全だった。なんでぼくに報せてくれなかった？」思ったほど怒りを統制できなかった。「いやはや、きみが心配でほとんど気が狂いそうだった」

「でも報せたわよ、報せた！ ネットワーク中のすべてのタンクがメッセージを送ってたのに」

「メッセージって？」

「あたしが無事だって。受けとらなかった？」

「何も。何を送ったの？」

「あたしが OK だって」

「受け取った OK は、動物園と銀行と領事館からのものだけだった」

「どんなもの？」

「きみのサイキヤットがかごの半分を共有できる——銀行がほしいお金の半分しか出せない——トリトンの半年査証許可が OK。ちょっとまった。あとガニメデ行きのジェットで船室半分を共有できるってのもあったな」

「コンピュータは何て言ったの？ 正確に」

「半分 OK。『半分』は数字だった」

「ああログ、ログ、ダーリン！ あなたの知恵はどうしちゃったの？」

「トリトン攻撃を計画してたんだよ。きみのために」

「ええ、ええ、それはありがとう、愛しい人、本当にありがとうね。でも。えーと……コーヒーの小さなカップを何て言う？ 半分のカップを？ あるいは半神半人をなんていう？」

「そりゃあ、デミタスカップに決まって——」彼の声が途切れた。「そして半神半人は、デミ・ゴッド……？ おおジーズ！ なんともジグジーズ！ じゃああれは『デミ OK』だったのか、ずっと！ フランス語で半分を意味するデミ」彼は爆笑しはじめ、怒りはすっかり消えていた。「おれは世界一の頓馬だ」

「他にもっと大事なことを考えてただけよ」

「でもぼくはもっと——」と口ごもる。「ワタクシ、イッヒ、モワ、かの偉大なるシナジストが、そんな見え見えのヒントを見逃すなんて！ 落ちたもんだよ」

「あたしにはそう見えない」

「そりゃきみはね！ ぼくにベタ惚れだもんな。でもなんでメッセージで名前を使わなかったの？」

「世界中に報せる気？ ネットワークに送り出された命令では、暗号はあなただけのためのものよ、FWO, For Winter Only.」

「ぼくだけ？ なら死の永公はどうやってきみが安全だと知ったのかな、そしてコンピュ

一タがきみの居場所を教えてくれると？」

「彼のタンクが命令をオーバーライドして、彼に明かしたにちがいないわ。明らかにあの満州人の愛技はベチャベチャ口らしいし」

「愛技？ アハ！ じゃあきみもあのビョーキのおかまインチキを知ってたんだな？」

「あたしたちタンクはすべてお見通し」

「騒動がおさまって、出てきても安全だってどうしてわかった？ またもネットワークか？」

「ニグ・エンランドの動物園タンクがすべて入力してくれたのよ。言いたくはないけど、あなたが永泰魔<sup>ユンタイマ</sup>にやったことは、残酷すぎてちょっとあなたが恐くなった」

「実はそんな単純な算数ピエロじゃなかったってか？」

「あら、ホントに傷ついてたのね！」と彼女は、もとの『ソーラー・メディア』のデミに戻り、怯えて泣きそうになった。「そうなるのはわかってたけれど、どうしようもなかったの。どうしても答を求めていたし、本当のことを言うしかなかった。どんなウソをついても見破られたでしょうし、二倍も腹をたてたでしょう。お願いログ、なんとかわかって、ね？ ログ？ 仲直り？」と手を差し出し、信頼できる、忠実な、裸のガールスカウトになり始めた。

彼はその手を見て、彼女の怯えた顔を見ると、いきなりニヤリとして、跳び上がり、ワークショップに駆け込んだ。そしてすぐに戻ると彼女の隣にすわった。彼女はポーズも表情も変えていなかった。心配で凍り付いたようだった。

「きみとコンピュータがあんなにエロチックに妄想した以上、それを本当に実現させるべきでしょうな」と言って彼は、ピンク黄金の印章リングを彼女の左手の薬指にするりはめた。「火をともしようか、愛しい人？ 冷蔵庫にシャンパンがあるかはわからないけど」

彼女は指輪を見てキャアキャア言い出した。どこから見てもヴァージニアの社交界デビュー娘だ。「ああログ！ ログ！ ログ！」と我が身を彼に投げかけ、自分の口でログの口を覆い尽くした。

彼はその報酬を大喜びで受け取り、こんな音をたてた。「わわっわ。やあえっどいいおう。おいえおいえおうえい」そして唇をもぎ離した「わかった。さあベッドに行こう。おいで、星の妖精さん」

だが彼女のくぐもった賞賛は、くぐもった苦痛と驚きが変わった。

「デミ！ どうした？ どうかした？」

「ご、ごめんなさい、でもあたし、豆をひり出すみたい」

「なんだって！」

「たぶん」

「たった2ヶ月だろ」

「ええ、で、でも……」

「それにまったく腹も出てない」

「ええ、で、でも……すべてが初めてでちがってて。史上初。あたし……あたし、文明戦争のルールすべてを破ってるみたい」

「いやはや神様助けて！ オデッサを呼ぼう。動かないで。何もするなよ」と大興奮で電話に駆け寄った。「またや新しいパターンとは！ またも新たな危機。チタニア人といっしょだと、一瞬たりとも退屈しないね。いったい全体どんなものが出てくるのか——もしもしオデッサ？ ログ・ウィンターだ。助けて！」

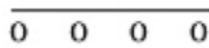


はいはい、オデッサ・パートリッジですよ。このイカレたラブストーリーを始めたのは私ですから、締めも私がやりましょうか。

満州人は極秘のうちに収監してある。理由はいくつかあって、一つはニグ・エンブランドが警告したように、そいつが完全に燃え尽きていて、だからおもしろい実験をしているため。肝臓がダメになった患者は、血液を浄化する装置につながるのはご存じでしょう。満州人の精神も同じやり方で回復させようとしてるの、イルカを使ってね。

イルカはとても賢くて、ほとんどの人間以上かもしれないから。それを永公と神経直列接続して、それを通じて脳刺激を与えている。イルカの回路が満州人の回路も開いてくれることを期待してね。こんな賢い脳を無駄にするのは惜しいから。

これを、明かりのスイッチを入れるだけで、その仕組みなんか考えもしない人たち向けに説明したほうがいいのかも。例としてクリスマスツリーの明かりを使いましょう。それが並列接続されていると、コンセントから二本の線が延びて、それぞれの電球はその並列の線の間につながれる。こんな具合。



並んだ明かりが直列に配線されると数珠つなぎみたいになる。一本の線がそれぞれの電球に電流を流して、回路が閉じるとそのすべてが点灯する。

これをイルカと永公でもやったわけ。彼の脳がこの直列の最後の脳。もちろん、もし彼が意識を回復したとしたら、イルカみみたいな考え方を初めて、海に行きたがるかもね。そしてそれでまた殺戮に向かうようなら、漁業はえらく苦勞することになるかも。

満州人を抑えている間にトリトンとのメタ交渉も現実的なものになりそう。オパロとその愉快的なマフィアはあまりそれがお気に召さないようで、ジェイ・ヤエルがなんとかそれをなだめようとしている。手助けにバーブをガニメデに送り返す羽目になったわ。ちなみに、彼女は大当たりを引き当てた。ウィンターのちっちゃい殺し屋女に諜報訓練を受けさせたの。あの若い小悪魔は、とんでもないガルダ職員になりそう。

チタニア人妖精の言った通り、彼女はあらゆるルールをたたき壊した。何の苦勞もなく双子少年を産み落とし、まるで枝豆みたいにひり出した。それぞれ体重5ポンド(2.3キロほど)、全部で10ポンドなのに、彼女の腹はも、後ろも、間も、上も、下もまったく出なかった。そして、どうやって10ポンド(10)の混血を2ヶ月(2)で生み出せたのか？ 太陽系医学協会は彼女と双子を調べたくてハアハア言ってるわよ、特に子どもたちは十分に発育していて、保育器が一切必要なかったから。

まったく普通の伝統的なテラ児。チタニア人らしいところはまったくない、とみんな重い、パパとママはそれを不思議に思った……内心がっかりしたんだろうと思うね。二卵性ではなく一卵性双生児で、名前はテイとジェイ、見分けがつくように足環をつけている。でも、完全に、絶対的に、百パーセント同じというわけじゃない。

クルーニー・デッコが、自分とデーモン・クルップが連結放射線排出によるメーザー生成胎児増幅を実施している間に、実験用赤ちゃんの夢を追跡していたという話をしていたのでご記憶かしらね。その実験の結果がログ・ウィンター。同じことを生まれてすぐにデミの子たちにもやったら、二人が異性体、鏡像双子なのがわかったのよ。異例ではあるけれど、決して前例がないわけではないこと。

人々は、胎児がそもそも何の夢を見るのか、と不思議がる。結局のところ、利用できる材料も経験もないんだから。答は「文化的無意識」。現代人の発達に入り込む、無数の文化的蓄積が脳にたまっていて、そうした強力な進化の波で考え夢見る。

Exempli gratia: 私たちみんな、どこかの時点で、漠然とした恐怖に襲われる。何か源も原因もなしにやってくる、説明のつかない恐怖。精神科医はそれを、禁忌や不安によって合理化しようとするけれど、真相は、それが集合的な記憶庫からの盲目的な波だということ



と。未知のものに対する恐怖のおかげで生き延びた、石器時代世代からの贈り物ってわけ。

その一方で、誕生というのは子宮に封じ込められていた生き物にとってはショッキングな体験だから、困惑する夢の材料はそこから大量に得られる。デミの双子も同様で、おかげで二人が右旋回と左旋回の鏡像だというのがわかった。その混乱は  $c$  で結ばれている。 $C$  は光速の  $c$  で、今日ではまた概念 (concept) の多価速度を示す記号でもある。二人の至高はときに具体的、ときには意味不明で、奇妙な形で右と左に旋回している。

#### 右旋回のジェイ

AcA  
CAcAC  
SH0cK  
c0NTACT  
cAC0PH0NY  
c0NFLICT  
SH0cK  
CAcAC  
AcA

#### 左旋回のテイ

AcA  
CAcAC  
Kc0HS  
T CATN0c  
YNPH0CAc  
TCILFN0c  
Kc0HS  
CAcAC  
AcA

今日の哲学者たちはときどき、 $E=MC^2$  の本当の読み方は「進化 (Evolution) は人間 (Man) と概念 (Concept) の速度自乗の席に等しい」なのだと主張する。

すべて平穏無事、ですわね？ ただし今日立ち寄って、約束通りにスタッフを見張ったわけでございますよ (デミはログを初のヴァージニア訪問に連れ出していて、自分の獲物を誇らしげに見せびらかしたのはまちがないでしょう)。そしてゆりかごの子どもたちを覗いたわけ。するといやはや、右巻きジェイが、ゆりかごの格子を左手でつかんで、左巻きのテイは右手でつかんでたの。足首の ID 票を見て確認しちゃったわよ。まちがないし、こいつら役割を逆転させてやがった。だから、そっちの手口はお見通しだって報せて

やんなきゃいけなかった。

「おい、このこずるいガキども、起きた起きた！ こちらあんたらのパワフルな名付け親おばちゃんが、お灸を据えにきたんですからね。まだしゃべれないけど、あんたら半パイソンの天才児ども、耳が聞こえて理解できるのは絶対わかってんのよ。あんたら変身して入れ替わったでしょう！ ジェイがテイになって、その逆もまた。笑っちゃうわよ、まったく」

ちっちゃいテラニアンの小悪魔どもは仰向けになって、何とも言えない陽気ないたずら顔をしたので、私は思わず笑い出した。

イケナイ赤ちゃんたばかり屋ども、半分テラ人、半分チタニア人。そしてどっち半分が何をたくらむやら、神のみぞ知る！ 妖精とシナジストは、とんでもないまったく新しいパターンを抱え込んじゃったってわけだ。そして太陽系も。

## おしまい

## 訳者あとがき

本書は Alfred Bester, *The Deceivers* (1981) 全訳である。翻訳には昔持っていたどこかのソフトカバー版と、Kindle 版を使っている。邦題は、直訳すると『詐欺師たち』『騙す者たち』となるが、それでは題名としてあまりにすわりが悪いのと、以下で述べる訳者の不満から、勝手に変えた。別に商業出版ってわけじゃありませんから、好きにさせてもらいますね。読み通した方は、ご自分なりの好きなものにしてくださって結構。

アルフレッド・ベスターと言えば、かの名作『虎よ、虎よ！』の作者であり、また晩年にはあの怪作『ゴーレム 100』を執筆したことで知られ、ワイドスクリーン・バロックの筆頭格。次々に放出されるきらめくようなイメージとアイデアの数々、そこに散りばめられた、俗悪さと文学的なイメージの混在、それをつなげる古典的な英雄譚じみた軽薄きわまるストーリー。ベスターのこの作風は生涯変わらず、余人の追隨を許すものではない。



本書はそのベスターの遺作となる。そこには上にあげた要素がすべてつめこまれている。

そして……本書は**とんでもない愚作**である。

お話は……ネタバレ注意ではあるが、正直いってそんな、すごい(良い意味で)驚きのネタがあつたりはしないので、ネタバレ上等。

ときはすでに人類が宇宙進出を果たしたいつやらの時代。新規に発見された反エントロピー触媒メタのおかげで地球の各種民族は、太陽系各地にドームを作り、いまの民族構成を維持してそれぞれナショナリズム/エスニシティに基づくドームで暮らしている。主人公ログ・ウィンターは、何やら能力開発実験を受けつつ事故でマオリ族のドームに引き取られ、その王族の養子として育てられたが、すべての隠れたパターンを感知する能力により金も女もウハウハで、お気楽ジャーナリストとして暮らす。

それが何やらですな、王位継承をめぐる暗殺未遂をかわすといきなり何の伏線も前置き

もなしに、天王星のチタニアで生まれた、何にでも姿を変えられる異星人デミに惚れられて、その日のうちにくつつき、故郷に帰るとマオリ王位を継承する。ところが戻ってみると、デミが誘拐された模様。実はそこには、メタを独占するジャップとチャンコロどものあいのこであるジंकどもが、そのメタの密売の主力たるマオリ・マフィアを潰そうとする陰謀があったらしい！

そこでウィンターは彼女を取り返すべく、ジंकどもの本拠タイタンに乗り込み、その親分たるフー・マンチュー（仮名）と対決。つかまったふりをしつつ、悪者が最後に本拠に意味もなく案内してあらゆる陰謀をペラペラしゃべってくれるというトホホな定石を経て、偶然が百個重ならないと実施不可能な裏の作戦のおかげで逆転して相手を捕まえて拷問。

ところが実はそいつらはデミの身柄を確保しておらず、何となく推測しただけ（えー、何だってえ？）。実は彼女はバイオコンピュータの一部となって、ウィンターの家のマシンにずっと隠れていたのだ！ そのパターンを見分けたウィンターがキーボードを叩くと、マシンの中でコードが細胞分裂を起こして、ジャジャーン！ デミがスクリーンを破って飛びだして復活し、子どもも生まれました～！ めでたし、めでたし。

……なにがめでたしだよ。なんかここまでいい加減な話を読まされると頭に頭痛がしてくる。ラスボス対決のあまりにご都合主義、さらにそのための設定は実はまったく意味がなく、ガールフレンドは実は何の危機にもさらされておらず、最後にあっさり出てきておしまい。じゃあこの物語すべて、何も意味ないだろう！ なんなんだよ！

持ち味としては、あの『コンピューター・コネクション』に似ていなくもない。主人公は悠々自適、あるときできた友人を不死人に仕立てようとする事故をきっかけに、新たな身内の騒動に巻き込まれることになる。不死人たちのつくる銜学的なソサエティ、その中での争いと、コンピュータとの新たな共生。無数のアイデアがほとんど行きがけの駄賃のように投げ散らかされる。だが『コンピューター・コネクション』は、多少は人間とコンピュータ知性体との関係をめぐって、少しは考えた形跡があった。一応、話の主要な要素がきちんとからみあい、そこにダジャレもまぜこんでまとまりを見せていた。

ところが本書は、アイデアとすら言えない思いつきがその場限りで投げ出され、それが何にも貢献しない。ずいぶんページを割いて一時的にストーリーの中心となっていた部分すらそうだ。王族の後継者争いの殺し屋対決はどうなった？ 何も。本書の狂言まわし役の諜報部員オデッサが、女子大生時代にフー・マンチューの仮の姿だった質屋から教えを受ける章があるが、そのからみもその後、一切意味を持たない。つか、そのオデッサ・パ

ートリッジもほとんど何の役も果たさず、途中で『クリスマスの12日』の仕掛けで最後に「梨の木のパートリッジ」というダジャレを出すためだけにいるようなもの。ローグが感応しているとされる宇宙意志ことアニマ・ムンディとやらも、結局何も意味をもたない。あれも、これも、何の意味もない。

いやベスターはそういうもんだろ、という異論は認める。もともとベスターは、上述のワイドスクリーン・バロックの旗手で、緻密に構築された話を書く人間ではない。目先のやりすぎなくらいの派手派手さぶりが身上とすら言える。『虎よ、虎よ！』で出てくる、へんな上流階級パーティーのまったく無意味な豪勢ぶりとか。



だけれど、一応そうではない部分もある。メインのストーリーは、雑でいい加減とはいえ、ある種の強さがあった。『虎よ、虎よ！』は、ガリー・フォイルの絶望と怒り、社会的格差に対する不満、そしてそこから最後の人民への信頼に到る軋轢と葛藤に、いかに雑とはいえ読者の共感があった。『破壊された男』は、やはり管理社会とそれに対する反発がベースにあり、それが読者の中二病精神をいやがうえにもそそる。『ゴレム100』は、スラム化した社会と超ハイソの有閑マダム群、そいつらの生み出すイドの怪物という設定自体が迫力を持っていた。

それがこの作品はなんだい。主人公さん、勝手な能力もらってお金持ちで王族、いいご身分ですねえ。そして異星人女の子は勝手に向こうから告白して迫って股を開く。なろう系のラノベでも、ここまで安易な設定はなかなかないぞ。自分の属するマオリ族がマフィア商売をやっていて、それがジंकどものメタ資源独占と衝突——で、そのメタ商売をめぐる対立はどう解消されるのかというと……解消されないんだよ。フー・マンチュー捕まえたら、そっちの話は全部消え、「協議中です」の一言で片づけられる。別にベスターの小説に社会問題への洞察を求めるつもりはないんだが、話の決着くらいはつけてほしいと思うのは人情ではないの？ 表向きだけでも資源配分の新たな方向性くらい、あってもいいんじゃないの？ 太陽系の命運を左右する資源の支配力を得たら、少しはそういうこと考えないの？ ところが何もないんだよなー。主人公は徹頭徹尾、自分のことしか考えない。ガールフレンド回収だけ。それでいいんですか？

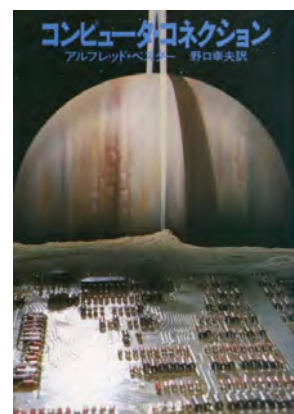
また書きぶりについても、華やかさはまったくない。それこそ『虎よ、虎よ！』がブレイクを持ち出したように、文学的に華やかな表現や言及はベスターの身上の一つであり、

ディレーニを始めインテリがベスターを誉める理由にもなっていた。それは本書でも、決して不在ではないのだが……だれも気がつかないというか気にもしないだろうけれど、文学的な仕掛けとしてウィリアム・S・バロウズの引用は明らかだ。だがバロウズのいいところではなく、悪いところばかりを持ってきている。デミがめぐる夜の町での、へんなおかまショーまがいの裁判や殺し合い、ウィンターがやけ酒をあおる中で出てくる下品な酒場とドリンクの数々、ジnkの(人種ステレオタイプてんこ盛りの)ドームで展開される首つりゲームにお下劣な群集……そんなところをバロウズからもってきてどうする！ かつてベスターはインタビューでバロウズについて「こんな靈感に満ちた文章が、と思ったらすぐにこんなゴミクズがなぜ？ あの子の編集者は何をしてたんだい」という感想を述べていたそうだが、まさか彼が靈感に満ちたと思っている部分が、ぼくにとってのゴミクズの部分だったとは、まったくの予想外ではあった。

なぜこんなものが出たのか、ベスターも出版社もこれをボツにしなかったのか、というのは謎ではある。欧米では、晩年の諸作については罵倒が多く、本書については『ゴーレム 100』がペーパーバックになるのにあわせて、話題作りのプロモ用に出したのでは、という説が述べられていた。まあそんなこともあるのかもしれない。またベスターは、本書が出てしばらくしてから妻を失い、その後自分もかなり体調を崩し、特に目をやられてあまり執筆できない状態だったようで、これが最後になるという予感もあったのかも。

そしていつかこの邦訳が商業的に出版される可能性は……ほぼないだろう。小説としてのできの悪さに加えて、特に第10章で展開される、ジャップとチンク(どっちもいまは発禁ものの差別用語)の合体したジnkたちの、あまりに人種ステレオタイプに満ち満ちた、どこかで聞きかじってきた誤解だらけの野蛮な風習の羅列は、人種ネタの悪口が好きなぼくですらちょっと嘔然としてしまう。これが許されたのはペリーの時代まででしょー。ベスターは長いこと、パルプ小説のテレビ版脚本などをやっていたけれど、その感覚がほぼそのまま。いまはよほど他の部分での価値がない限り、どこも出す気にはならないでしょ。

あ、でもね、バイオコンピュータのアイデアとか、その影のネットワークとその上の SNS みたいなコンピュータ同士のゴシップ網とか、最後のコンピュータから彼女が飛びだしてくるところとか、ラノベ風のサイバーパンク先取りみたいで、ベスターの先駆性が遺憾なく発揮……されてねえよ！ ある意味で、『コンピューター・コネクション』に登場した、人間とつながるコンピュータのイメージをさらに先に進めたと言えなく



もないけど、言ってどうする。

ちなみにその『コンピューター・コネクション』の訳者あとがきを見ると、野口幸夫はどうも本書の翻訳に取りかかっていたらしい。本書そのものにとどまらず、そこに出てくるダジャレにまでいくつか触れたりしているからだ。確か本書もサンリオ SF 文庫の近刊予告に出ていたように思う。それが出なかったのは、よかったのか悪かったのか。だが、それを残念と思い、本書がまだ見ぬ傑作ではと夢見ていたベスターファンのあなた（ぼくもそうだった）、夢を壊すのは気が進まないながら、彼の遺作はこういう小説だったのです。Now you know. 知らぬが仏ということばの意味を、みなさんも是非噛みしめていただきたい。

なお、第 10 章のへんな中国語もどきの漢字復元は、高口康太氏、乙井研二氏および ChatGPT さんにお世話になった。なんせ 1980 年代初頭なんで、表記もピンインではなくウェード式、しかも元の中国語がかなり怪しい状態。みなさんのご協力なくしては、それっぽく直すのは不可能だった。ありがとうございます！！

2025 年 1 月 12 日

山形浩生 [hiyori13@alum.mit.edu](mailto:hiyori13@alum.mit.edu)